

府内城・城下町跡 9

第 22 次調査

大分都市計画道路末広東大道線に係る発掘調査報告書 2

2013

大分市教育委員会



府内城・城下町跡第 22 次調査区 遠景

巻頭写真図版 2



SG010 出土状況(南より)



SB065 完掘状況(東より)

序 文

本書は、大分都市計画道路末広東大道線建設に伴い実施しました府内城・城下町跡第22次発掘調査の報告書であります。

府内城・城下町は、江戸時代府内藩の中心であり、多くの武士・町民が生活していた場所です。また現在の大分市中心市街地の骨格となったものであり、江戸時代の面影は市内各所に現在も残されています。中でも光西寺は、府内城の完成当初に移転してきてから現在も同地に建っており、府内城・城下町を代表する寺院の一つとして知られています。

今回は、江戸時代の光西寺境内に想定される場所を調査しました。調査では、礎石建ちの建物跡や、池、水琴窟などの庭園跡が見つかり、当時の光西寺の様子が明らかとなっていました。光西寺には江戸時代の境内の様子を描いた文献・絵図資料等があまり残されていないため、当時の景観が明らかとなったことは光西寺、ひいては近世の府内城下町の歴史を解明する上で、大変注目される成果となりました。

本書が、地元の皆様とともに多くの方々の文化財愛護への理解を深める一助となり、歴史教育・学術の振興に幅広く活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行にあたり、ご配慮・ご協力を賜りました関係機関及び関係者各位に対し、心よりお礼申し上げます。

平成25年3月15日

大分市教育委員会
教育長 足立 一馬

例　言

- 1 本書は、大分市末広町2丁目において大分都市計画道路末広東大道線に係る公共工事に伴い、平成24年度に調査を実施した発掘調査報告である。
- 2 調査は、大分市都市計画部街路建設課からの依頼を受け、大分市教育委員会が実施している。
- 3 発掘調査に伴う掘削・埋戻作業、調査記録作成、遺物整理、報告書作成は大分市教育委員会(監督員　松浦憲治)の委託を受け、株式会社九州文化財総合研究所(業務責任者　服部真和)が実施した。
- 4 発掘調査は平成24年6月11日～平成24年11月28日の期間で実施し、資料整理及び報告書の作成は調査終了後から平成25年3月15日の期間で行った。
- 5 遺構の実測及び写真撮影は株式会社九州文化財総合研究所が行った。
- 6 航空写真撮影は東亜航空技研株式会社が行った。
- 7 遺物の実測・拓影・製図作業・写真撮影は株式会社九州文化財総合研究所が行った。
- 8 本書の執筆は、以下のとおりである。
　　第I・IV章(松浦憲治)　第II・III章(服部真和)
- 9 本書の編集は、大分市教育委員会の企画に基づき、編集作業を株式会社九州文化財総合研究所(業務責任者　服部真和)が行った。
- 10 出土遺物・記録資料は、大分市教育委員会文化財課に収蔵・保管している。
- 11 発掘調査及び報告書作成に際して、下記の方々に御指導・御助言を頂いた。
　　追川吉生(東京大学埋蔵文化財調査室)、田中裕介(別府大学)、玉井哲雄(国立歴史民俗博物館)、
　　吉田寛(大分県教育庁埋蔵文化財センター)
- 12 焼継文字及び墨書の判読については、下記の方々の御教示による。
　　武富雅宣(大分市歴史資料館副館長)、植木和美(大分市教育委員会文化財課)

凡　例

- 1 本書で用いた遺構略号は、以下のとおりである。
　　SB：掘立柱建物跡・礎石建物跡、SD：溝状遺構、SE：井戸跡、SF：石畳状遺構、SG：池状遺構
　　SK：土坑・火災処理土坑・廃棄土坑・埋甕遺構、SP：小穴、SX：性格不明遺構
- 2 本書に用いた方位はすべて座標北(G.N.)である。座標は、世界測地系の平面直角座標2系(北緯33°0'、東経131°0')のX・Y座標を基点として表記している。
- 3 遺構の規模と深度の単位は原則としてメートル(m)で、遺物の法量はセンチメートル(cm)で表記している。
- 4 本書に掲載した遺物の実測図の表記は、以下のとおりである。
 - ・遺物断面が黒塗りのもの 陶器
 - ・遺物断面が灰色のもの 瓦質土器・瓦
 - ・遺物平面の稜線と調整の変換点 実線
 - ・調整が同じでその単位が分かるもの 長破線
 - ・釉と付着物、被熱による変色等その範囲を示す必要があるもの 一点破線
- 5 本書に用いた出土遺物の分類・年代観は、以下の文献による。
　　〔肥前陶磁器〕九州近世陶磁学会編2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
　　〔瓦・焰烙〕吉田寛1993『府内城三ノ丸遺跡』大分県教育委員会
　　〔錢貨〕永井久美男1996『日本出土錢総覧 1996年版』兵庫埋蔵錢調査会
　　〔その他全般〕江戸遺跡研究会編2001『図説江戸考古学研究事典』柏書房

目 次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査経過	1
第2節 調査組織	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第Ⅲ章 調査の成果	4
第1節 調査の概要	4
第2節 遺構	7
第3節 出土遺物の概要	33
第Ⅳ章 総括	45

図版目次

第 1 図 周辺主要遺跡分布図 (1/30000)	2	第 26 図 SX031 遺構実測図 (1/30)	22
第 2 図 府内城・城下町跡 調査地点位置図 (1/8000)	3	第 27 図 第 3 面 遺構配置図 (1/200)	23
第 3 図 土層模式図	4	第 28 図 第 3 面 全体遺構図 (1/200)	24
第 4 図 調査区(南区)西壁土層図 (1/60)	5	第 29 図 SB220 遺構実測図 (1/60)	25
第 5 図 調査区(北区)西壁土層図・(南区)東壁 土層図 (1/60)	6	第 30 図 SE033 遺構実測図 (1/40)	26
第 6 図 第 1 面 遺構配置図 (1/100)	7	第 31 図 SE150 遺構実測図 (1/40)	27
第 7 図 SF055・SF060 遺構実測図 (1/40)	8	第 32 図 SK140 遺構実測図 (1/40)	27
第 8 図 第 2 面 遺構配置図 (1/200)	10	第 33 図 SK145・SK155・SK160・SK165 遺構実測図 (1/40)	28
第 9 図 第 2 面 全体遺構図 (1/200)	11	第 34 図 SK185 遺構実測図 (1/40)	29
第 10 図 SB065 遺構実測図 (1/60)	12	第 35 図 SX034 遺構実測図 (1/40)	29
第 11 図 SB070 遺構実測図 (1/60)	13	第 36 図 第 4 面 遺構配置図 (1/200)	30
第 12 図 SB075 遺構実測図 (1/60)	14	第 37 図 第 4 面 全体遺構図 (1/200)	31
第 13 図 SB218 遺構実測図 (1/60)	15	第 38 図 SP203 遺構実測図 (1/40)	32
第 14 図 SG010 古段階遺構実測図 (1/40)	16	第 39 図 SB070・SB075・SG010 出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4・1/6)	34
第 15 図 SG010 新段階遺構実測図 (1/40)	17	第 40 図 SG010 出土遺物実測図 (1/3・1/4・1/6)	35
第 16 図 SK015 遺構実測図 (1/30)	18	第 41 図 SG010・SK015・SK050 出土遺物実測図 (1/3・1/6)	36
第 17 図 SK050 遺構実測図 (1/30)	18	第 42 図 SK099・SK099+SK100・SK100 出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4)	37
第 18 図 SK099 遺構実測図 (1/40)	19	第 43 図 SK116・SK048・SK051 出土遺物実測図 (1/1・1/2・1/3・1/4)	38
第 19 図 SK100 遺構実測図 (1/40)	19	第 44 図 SK066・SK067・SK115 出土遺物実測図 (1/3・1/4・1/6)	39
第 20 図 SK116 遺構実測図 (1/40)	20		
第 21 図 SK048 遺構実測図 (1/40)	20		
第 22 図 SK048 獣骨実測図 (1/20)	20		
第 23 図 SK051 遺構実測図 (1/40)	21		
第 24 図 SK066・SK067 遺構実測図 (1/40)	21		
第 25 図 SK115 遺構実測図 (1/40)	22		

第 45 図 SX031・SK155 出土遺物実測図 (1/1・1/3・1/8・1/10)	40	第 48 図 その他の出土遺物実測図② (1/1・1/3・1/4・1/6)	43
第 46 図 SE033・SE150・SK140・SK160・SK165 出土遺物実測図 (1/3・1/4)	41	第 49 図 その他の出土遺物実測図③ (1/1・1/2・1/3・1/4)	44
第 47 図 SK145・SK185・SX034 その他の出土遺物 実測図① (1/1・1/3・1/4・1/6)	42	第 50 図 遺構変遷図	46
		第 51 図 光西寺伽藍配置復原図及び真宗寺院 伽藍配置図	47

表 目 次

第 1 表 遺物観察表 1	50
第 2 表 遺物観察表 2	51
第 3 表 遺物観察表 3	52

写真図版目次

卷頭写真図版 1 府内城・城下町跡第 22 次調査区 遠景	写真図版 5 SF055 検出状況 (東より) SF055・SF060 出土状況 (東より) SB065 検出状況 (東より) SB075 完掘状況 (東より) SB070a 碓石 (東より) SB070a 碓石詳細 (東より) SK050 検出状況 (西より) SK050 土層断面 (西より)
卷頭写真図版 2 SG010 出土状況 (南より) SB065 完掘状況 (東より)	写真図版 6 SK050 完掘状況 (西より) SK050 蔊内部土層断面 (西より) SK050 蔊取り上げ後土層断面 (西より) SK099 土層断面 (南より) SK099 完掘状況 (西より) SK100 土層断面 (西より) SK100 完掘状況 (西より) SK116 土層断面 (南より)
写真図版 1 南区全景 (南より) 南区全景 (上が北) 北区全景 (南より) 北区全景 (上が北東)	写真図版 7 SK048 完掘状況 (東より) SK048 獣骨出土状況 (東より) SK066・SK067 土層断面 (東より) SK155 土層断面 (南より) SK155 完掘状況 (西より) SE150 完掘状況 (北より) 北区第 3 面検出状況 (南西より) 北区第 3 面完掘状況 (北西より)
写真図版 2 SB065 完掘状況 (上が北) SG010 出土状況 (上が北) SK050 出土状況 (西より)	写真図版 8 SK140 土層断面 (北より) SK140 完掘状況 (西より) SK185 土層断面 (西より) 北区第 4 面検出状況 (南西より) 北区第 4 面完掘状況 (北西より) SP203 土層断面 (南東より) 北区西壁土層断面 (南東より) 北区西壁土層断面詳細 (東より)
写真図版 3 南区第 2 面検出状況 (南より) 南区第 2 面完掘状況 (南より) SG010 出土状況 (南東より) SG010 新段階出土状況 (西より) SG010 古段階出土状況 (北西より) SG010 土層断面 (東より) SX031 土層断面 (西より) SX031 完掘状況 (西より)	写真図版 9 主要出土遺物写真①
写真図版 4 SK015 土層断面 (南西より) SK015 完掘状況 (南西より) 南区第 4 面完掘状況 (南より) SE033 土層断面 (南より) 南区東壁土層断面 (西より) 南区東壁土層断面詳細 (西より) 北区第 1・2 面検出状況 (南西より) 北区第 1・2 面完掘状況 (北西より)	写真図版 10 主要出土遺物写真②

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査経過

府内城・城下町跡は大分県大分市の市街中心部にあたる荷揚町・大手町・府内町・中央町・都町に所在する埋蔵文化財包蔵地で、近世の城下町跡として周知されている遺跡である。平成5年(1993)に周知の埋蔵文化財包蔵地として大分県教育委員会から通知されたものである。

本遺跡が周知される範囲を縦断する道路大分都市計画道路末広東大道線(以下、末広東大道線と称す)の建設が平成19年度に事業認可されたため、大分市教育委員会教育部文化財課は事業主体者となる大分市都市計画部街路建設課と協議を行い、文化財保護法第94条第1項の規定に基づく通知を行った上で、遺跡の取り扱いに対する指示を大分県教育委員会から受けるように伝達した。

平成24度の末広東大道線事業施工に伴い、大分市長釤宮磐より文化財保護法第94条第1項の通知が行われ、これを受け埋蔵文化財の記録作成のための発掘調査の実施について、大分県教育委員会教育長野中信孝より指示が行われた。

調査は府内城・城下町跡第22次調査として平成24年6月11日に着手し、同24年11月28日に調査区の埋め戻しを行い完了した。調査面積は364.7m²である。

なお、遺跡の記録資料や出土遺物等の整理作業は調査の終了後引き続き行い、報告書の作成を平成25年3月15日まで行った。

第2節 調査組織

調査主体者 大分市教育委員会 教育長 足立 一馬
事務局 大分市教育委員会 教育部 文化財課

文化財課

文化財課長 福田 誠一
特別顧問 玉永 光洋
主幹 坪根 伸也
埋蔵文化財班班長 高畠 豊
専門員 塩地 潤一
主査 佐藤 道文
主事 朝川 貴俊
主事 松浦 憲治

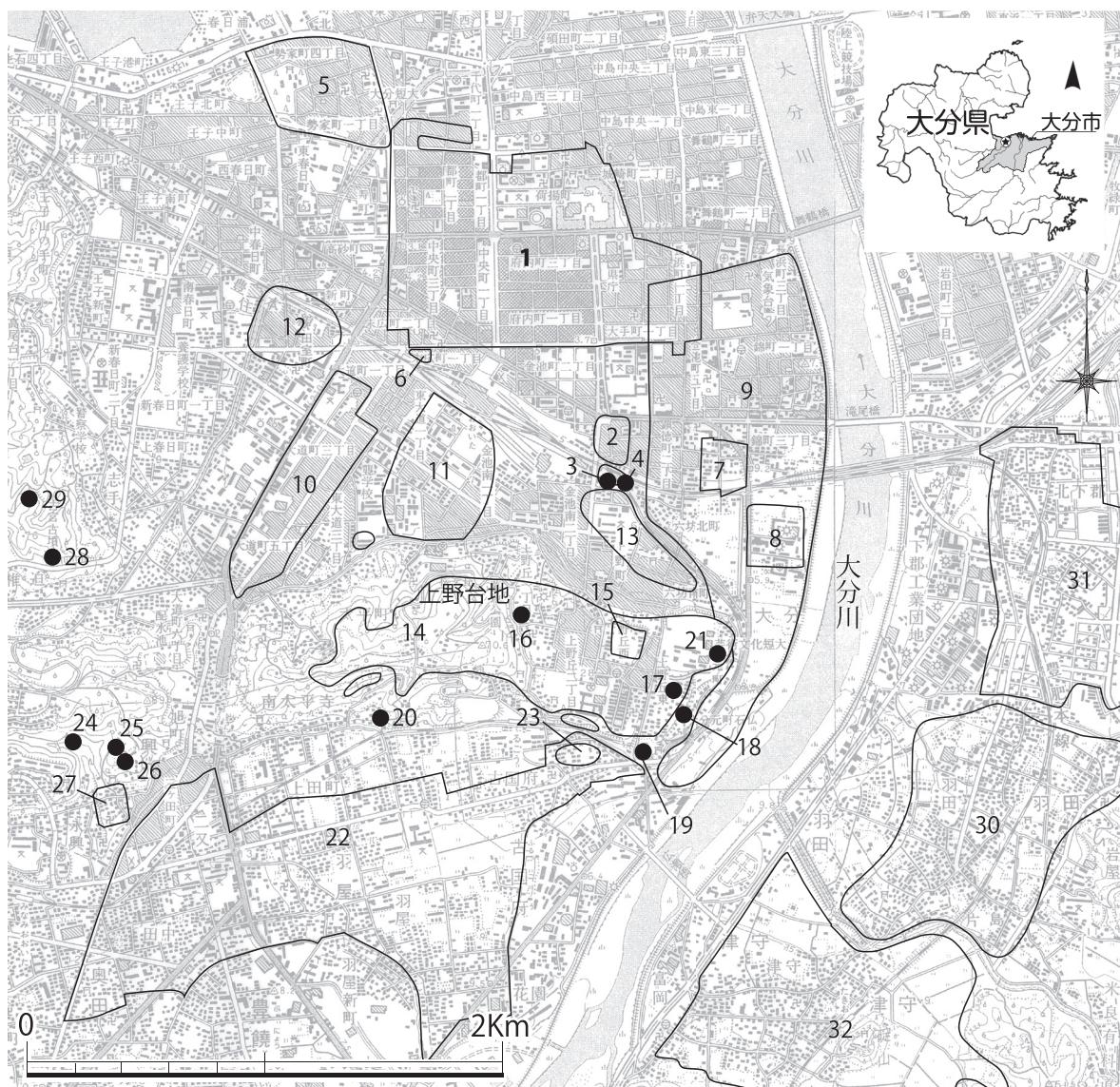
街路建設課

都市計画部次長兼課長 工藤 哲雄
庶務担当班主幹 佐藤 昭史
主査 安部 貴美代
主任 狩生 浩一郎
街路建設担当班主幹 利根 由晃
主幹 平野 栄治
用地担当班参事 山村 利彦
専門員 島谷 真司
主任 工藤 慶

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

大分平野は九州の北東部に位置し、別府湾南岸に面する平野である。大分平野の中央部には大野川が、西部には大分川が別府湾に注いでおり、流域に低地・台地・丘陵を形成している。大分川は由布岳に源流を発し、上野台地を境に東流から北流に転じているが、上野台地の南側では旧河道や微高地が複雑に入り組み、台地の北側では自然堤防・後背湿地・旧河道・浜堤などの微地形が広がる。府内城・城下町跡は上野台地の北側に位置し、第22次調査区は微地形分類図によると後背湿地にあたる。



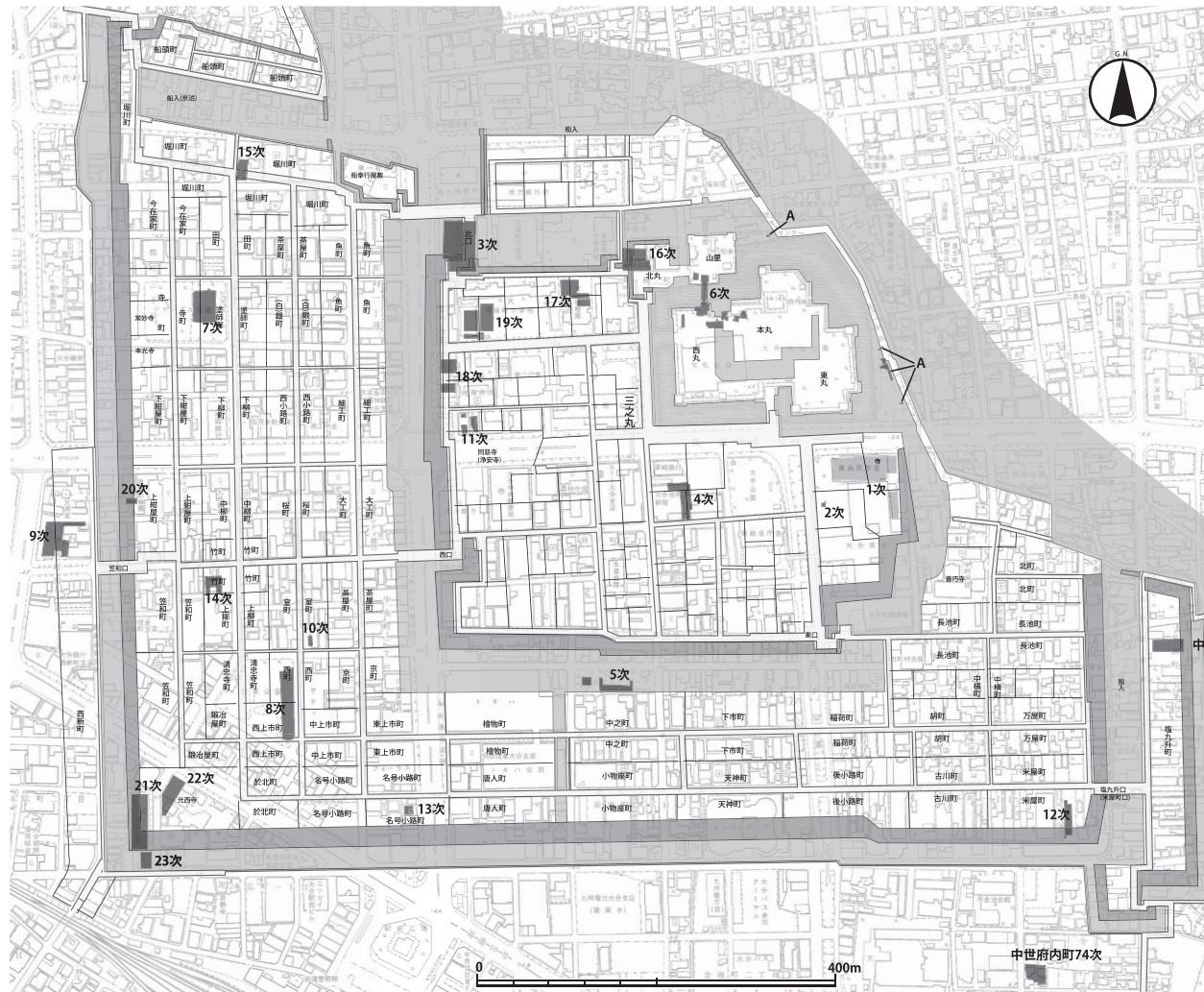
第1図 周辺主要遺跡分布図(1/30000)

第2節 歴史的環境

府内城・城下町跡は大分川左岸の河口部に展開した近世の遺跡である。府内城の築城は大友氏除国後の1597年に府内に入部した福原直高によって始まる。1599年に二ノ曲輪三重櫓や三ノ曲輪家臣屋敷が完成し「荷揚城」とした。1601年入封した竹中重利は城郭の増築工事を行い、1602年に四重天守等の城郭中心部を完成させると共に城下町の建設に着手した。城下町には碁盤目状に区画された町屋が形成され、大友府内町に所在した寺院や町民を町名ともども移転させている。1605年に外堀の掘削、1607年に城下への入口である塩九升口・笠和口・堀川口を設け、1608年に商船用の港「京泊」を作り、城の名前を「府内城」・城下町を「府内」とし城下町の完成をみる。

第22次調査区は大分川と住吉川に挟まれた標高約3.5～4.0mの微高地上に位置し、「府内城下の復原図」によると光西寺の寺域内に該当する。光西寺は15世紀後半、大友親繁の時代に中世大友府内町の下市町（現在の大分市錦町周辺）に創建されたと言われ、戦国時代の豊後府内の町を描いた絵図である「府内古絵図」にも描かれている。1602年の城下町の建設に伴い、城下町南西角にあたる現在の地に移転してきた。2300坪を超える広大な敷地のなかに寺中寺5か寺を有し、東本願寺派の豊後国触頭にも位置付けられる寺院であった。第12次調査区では多くの焼土・炭と共に焼継ぎが施された陶磁器が大量に廃棄されていたが、その中に焼継文字で「光さ口寺」と記された禁裏御用品肥前器皿が出土している。

近代になると城下町の外堀は埋め立てられ、太平洋戦争下の1945年7月16日には大分大空襲により光西寺をはじめ大分市街は灰燼に帰する。戦後には光西寺境内西側に残されていた土塁も撤去され、現国道10号線の建設や周辺の区画整理と都市開発により、城下町当時の景観や町割りをうかがい知る事は困難となっている。



第2図 府内城・城下町跡 調査地点位置図(1/8000)

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の概要

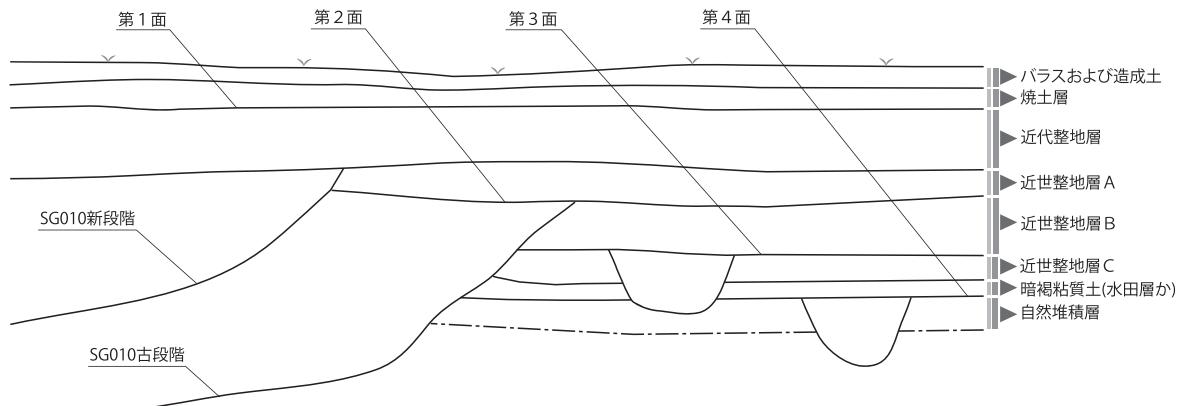
調査地は大分市末広町2丁目に所在する。末広東大道線街路建設に伴い、平成24年6月11日～平成24年11月28日の期間に調査を実施した。調査面積は約364.7m²である。調査区は南北に細長く複数の敷地にまたがっており、駐車場として利用されている事や土置き場の確保といった点から、調査区を南・北区に分けて反転する調査方法をとり、南区から調査を開始した。

調査地は近世から光西寺の寺域内であり続けた事から複数の遺構面の存在が想定されていたため、礎石と思われる石などが検出されると部分的に残しながら機械掘削を行い、南区は近世遺構面と古墳～中世段階の遺構面の計2面の調査を行った。北区については、南区の土層観察で把握された遺構面と整地層の状況を基に、近代～現代の遺構面、近世の遺構面を2面、古墳～中世段階の遺構面の計4面の調査を行った。南・北区とともに現代の搅乱により多くの破壊を受けていた。

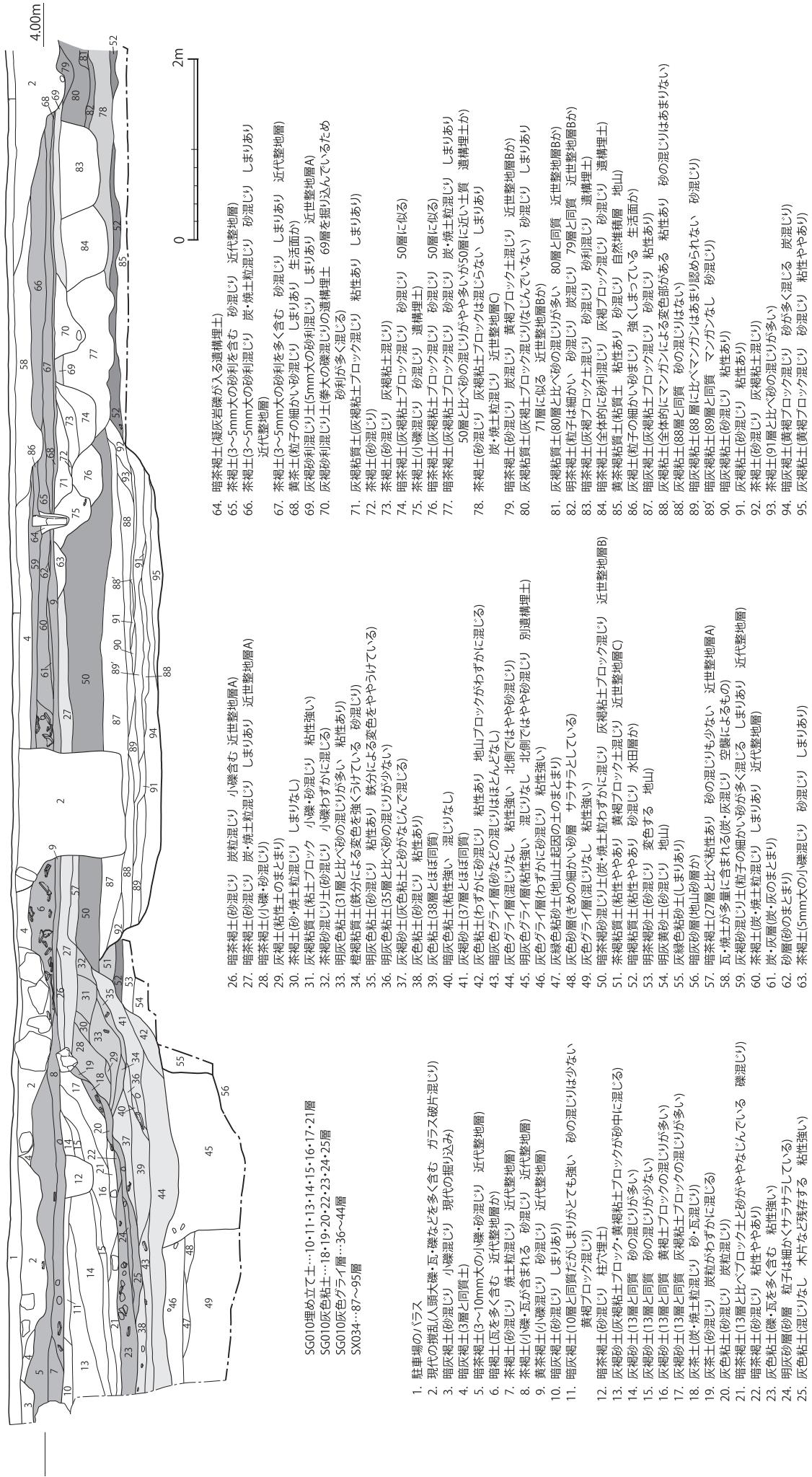
(1) 基本層序

基本層序は以下のように大別される。検出した整地層は基本的にフラットで把握しやすいが、礎石建物の位置する北区西壁については整地の単位が複雑で位置付けが難しい。

1 バラスおよび造成土	現代の駐車場バラスおよび宅地造成土で、調査区全面で確認できる。
2 焼土層	1945年の大分大空襲時の焼土層である。焼土と共に瓦・溶解ガラス破片を多く含む。北区では西壁に、南区では東壁を中心に確認できる。
3 近代整地層	暗褐土・暗茶褐土が該当し、調査区全面で確認できる。近代～1945年と推定される。
4 近世整地層A	暗茶褐土・灰褐砂利混じり土などが該当し、調査区全面で確認できる。19世紀初頭頃と推定される。
5 近世整地層B	暗茶褐ブロック混じり土・暗茶褐砂混じり土などが該当し、調査区全面で確認できる。17世紀後半～18世紀後半頃にかけての整地層である。
6 近世整地層C	茶褐土などが該当し、暗褐粘質土(水田層?)を覆う整地層である。調査区全面で確認できる。光西寺移転時(17世紀初頭)の整地層と考えられる。
7 暗褐粘質土(水田層?)	平面的に検出していないが、土層で畦畔状の高まり(黄茶褐粘質土)を確認している事から、水田層の可能性が考えられる。古墳時代～古代の土師器破片が出土するが、時期は断定できない。本来は調査区全面に広がっていたと推測されるが、北区西側では削平を受けており確認できなかった。
8 自然堆積層	黄茶褐粘質土・明茶褐砂土が該当する。河川氾濫により形成された自然堆積層である。

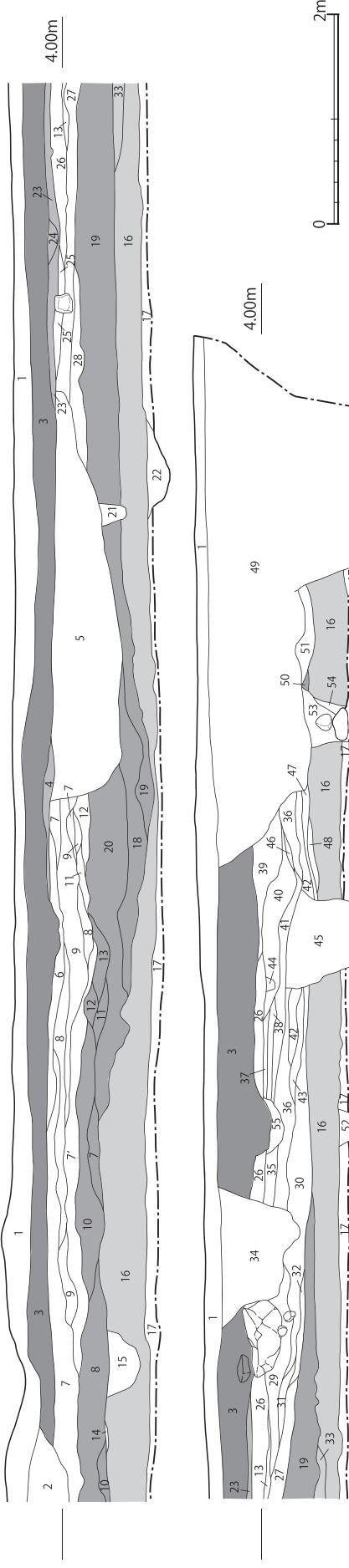


第3図 土層模式図



第4図 調査区(西区)西壁土層図(1/60)

北区西壁土層図



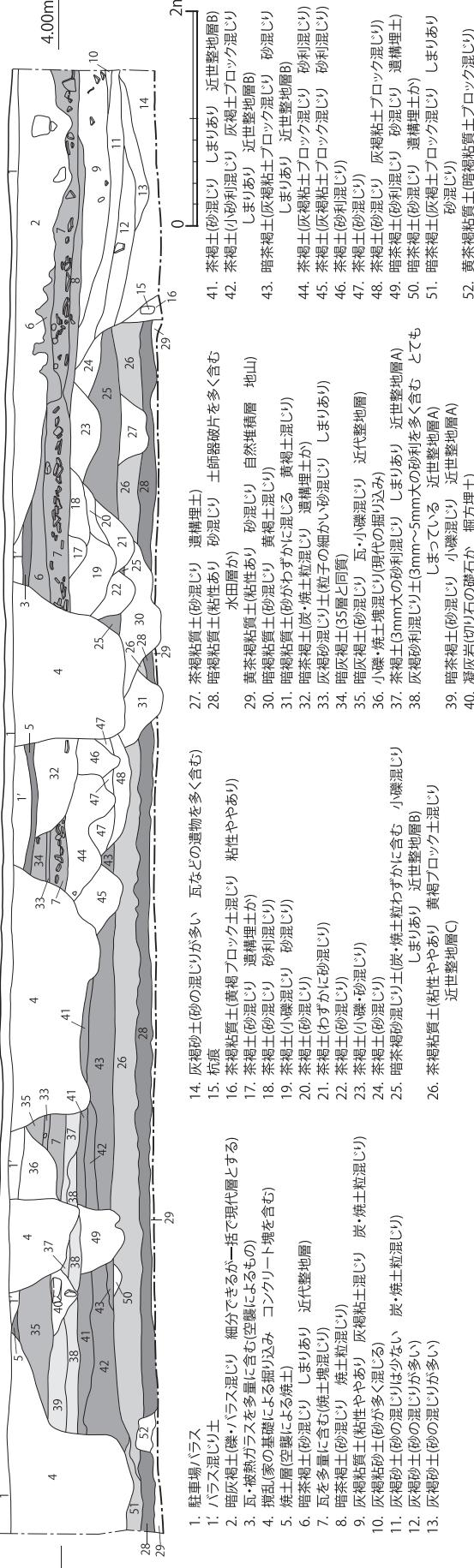
1. 駐車場・ラズ

2. 摂乱(角砂)
3. 燐土(粘土)
4. 灰褐色土(砂混じり) 粘性あり 近世整地層
5. SK01土(灰褐色土(砂混じり) 粘性あり)
6. 灰褐色土(灰褐色土山) ブロック層(砂) やや粘性あり
7. 灰茶土(砂混じり) やや粘性あり
- 7' 灰茶土(7層と同質) 粘性あり
8. 灰茶土(砂混じり) 灰褐色土ブロック層(砂)
9. 灰褐色土(砂混じり) 灰褐色土ブロック層(砂)
10. 灰褐色土(9層と比べ砂の混じりが多い)
11. 灰茶土(炭混じり) 粘性あり
12. 灰茶土(砂混じり) やや粘性あり
13. 茶褐色土(黄褐色地山) ブロック層(砂)
14. 灰褐色土(まこま)

15. 暗灰褐色土(砂混じり) 小漂層(砂) 遺構埋土
16. 細褐色土(砂混じり) 粘性あり 近世整地層C
17. 黄茶褐色土(砂混じり) 自然堆積層 地山土
18. 暗灰褐色土(砂混じり) 近世整地層B
19. 暗灰褐色土(砂混じり) 灰土粒混じり 近世整地層B
20. 灰褐色土(灰褐色土山) ブロック層(砂) 灰土粒混じり 灰土粒混じり
21. 暗灰褐色土(砂混じり) 遺構埋土
22. 灰褐色土(茶褐色土山) 灰土粒混じり 灰土粒混じり
23. 灰茶土(砂混じり) 小漂層(砂) 灰土粒混じり
24. 暗灰褐色土(砂混じり) 灰土粒混じり
25. 暗灰褐色土(砂混じり) 灰土粒混じり
26. 暗灰褐色土(砂混じり) 灰土粒混じり
27. 暗灰褐色土(砂混じり) 灰土粒混じり
28. 暗灰褐色土(砂混じり) 灰土粒混じり
29. 暗灰褐色土(灰褐色土山) 遺構埋土

30. 黄灰褐色土(砂混じり) しまりあり
31. 暗灰褐色土(灰褐色土山) ブロック層(砂) しまりあり
32. 暗灰褐色土(灰褐色土山) ブロック層(砂) しまりあり
33. 暗茶褐色土(砂混じり) 灰土粒混じり
34. 摂乱(耕作) 設置埋土
35. 暗灰褐色土(灰褐色土山) ブロック層(砂) しまりあり
36. 暗灰褐色土(灰褐色土山) ブロック層(砂) しまりあり
37. 暗灰褐色土(砂混じり) しまりあり
38. 暗灰褐色土(砂混じり) 灰粒混じり しまりあり
39. 暗褐色土(茶褐色土山) 漆食痕が多く混じる 灰土粒混じり
40. 暗灰褐色土(灰褐色土山) ブロック層(砂) しまりあり
41. 灰茶褐色土(砂混じり) しまりあり
42. 灰茶褐色土(粘性あり) 灰褐色土(砂混じり) しまりあり 近世整地層B
43. 明灰褐色土(粘性あり) しまりあり
44. 暗灰褐色土(40層と比べ砂混じり) しまりあり
45. 暗灰褐色土(SK108) 灰土粒混じり
46. 暗茶褐色土(砂混じり) しまりあり
47. 黄灰褐色土(砂混じり) しまりあり
48. 暗茶褐色土(粘性あり) しまりあり
49. 挖削(シングルト) 墓壙など含む 重機で掘られている
50. 茶褐色土(灰褐色土山) しまりあり
51. 暗灰褐色土(砂混じり) しまりあり
52. 灰褐色土(粘性あり) SD210埋土
53. 暗灰褐色土(砂利混じり) しまりあり
54. 茶褐色土(粘性あり) しまりあり SB075b埋土
55. 暗灰褐色土(砂混じり) 遺構埋土

南区東壁土層図



1. 駐車場・ラズ
- 1' ラズ・混じり土
2. 暗灰褐色土(ラズ・ラズ混じり) 細分でできるが一括で現代層とする
3. 瓦・被覆物(瓦による掘り込み) 瓦を多く含む
4. 摂乱(家の基礎による掘り込み) コンクリート塊を含む
5. 灰土層(空壁による) 近代整地層
6. 灰茶褐色土(砂混じり) しまりあり
7. 瓦を多量に含む(壁) 地山
8. 灰褐色土(砂混じり) 灰土粒混じり
9. 灰褐色土(粘性ややあり) 灰褐色土山) 灰土粒混じり
10. 灰褐色土(砂混じり) 灰土粒混じり
11. 灰褐色土(砂の混じり) は少ない
12. 灰褐色土(砂の混じり) しまりあり
13. 灰褐色土(砂の混じり) しまりあり
14. 灰褐色土(砂の混じり) 灰土粒混じり
15. 脱落
16. 灰褐色土(粘性ややあり) 灰褐色土山) 粘性ややあり
17. 灰褐色土(砂混じり) 遺構埋土
18. 灰褐色土(砂混じり) 灰土粒混じり
19. 灰褐色土(砂混じり) 灰土粒混じり
20. 灰褐色土(砂混じり)
21. 灰褐色土(砂混じり)
22. 灰褐色土(砂混じり)
23. 灰褐色土(砂混じり) 瓦・灰褐色土山) 灰土粒混じり
24. 灰褐色土(砂利混じり) 瓦・瓦の塊(現代の塊)入り
25. 暗茶褐色土(砂利混じり) 灰土粒混じり
26. 暗茶褐色土(砂利混じり) 灰土粒混じり
27. 灰褐色土(砂利混じり) 遺構埋土
28. 暗褐色土(粘性あり) 灰褐色土(砂利混じり) 土師器破片を多く含む
29. 暗褐色土(砂利混じり) 灰褐色土(砂利混じり) 地山
30. 暗褐色土(砂利混じり) 灰褐色土(砂利混じり) 灰褐色土(砂利混じり)
31. 暗褐色土(砂利混じり) 灰褐色土(砂利混じり) 灰褐色土(砂利混じり)
32. 暗褐色土(灰褐色土山) 灰褐色土(砂利混じり) 遺構埋土
33. 暗褐色土(砂利混じり) 灰褐色土(砂利混じり) しまりあり
34. 暗灰褐色土(35層と同質)
35. 暗灰褐色土(砂利混じり) 瓦・瓦の塊(現代の塊)入り
36. 灰褐色土(砂利混じり) 灰褐色土(砂利混じり) 灰褐色土(砂利混じり)
37. 灰褐色土(3mm~5mm大)の砂利を多く含む
38. 灰褐色土(砂利混じり) 小漂層(砂) しまりあり
39. 暗茶褐色土(砂利混じり) 小漂層(砂) しまりあり
40. 濃灰岩(切り石)の礫石か 灰褐色土
41. 茶褐色土(砂利混じり) しまりあり 近代整地層
42. 茶褐色土(砂利混じり) しまりあり 近世整地層B
43. 暗茶褐色土(砂利混じり) しまりあり 近世整地層B
44. 茶褐色土(灰褐色土山) ブロック層(砂) 灰褐色土(砂利混じり)
45. 茶褐色土(灰褐色土山) ブロック層(砂) 灰褐色土(砂利混じり)
46. 茶褐色土(砂利混じり)
47. 茶褐色土(砂利混じり)
48. 茶褐色土(砂利混じり) 灰褐色土(砂利混じり) 灰褐色土(砂利混じり)
49. 暗茶褐色土(砂利混じり) 灰褐色土(砂利混じり) 灰褐色土(砂利混じり)
50. 暗茶褐色土(砂利混じり) 遺構埋土
51. 暗茶褐色土(灰褐色土山) ブロック層(砂) しまりあり
52. 黄茶褐色土(砂利粘質土) ブロック層(砂) しまりあり

第5図 調査区(北区)西壁土層図・(南区)東壁土層図(1/60)

遺構配置図・全体遺構図の第1～4面の遺構は、面的に行った機械掘削ごとに検出できたものである。必ずしも時期ごとに分かれておらず、本来上面にあった遺構が下面で改めて検出できたものも内包している。

第1面 焼土層除去後の遺構検出面である。

第2面 近世整地層A除去後の遺構検出面である。

第3面 近世整地層B除去後の遺構検出面である。南区については暗褐粘質土除去後に確認した遺構の内、出土遺物や土層から、本来上面にあったと考えられる遺構を第3面に入れている。

第4面 暗褐粘質土除去後の遺構検出面である。

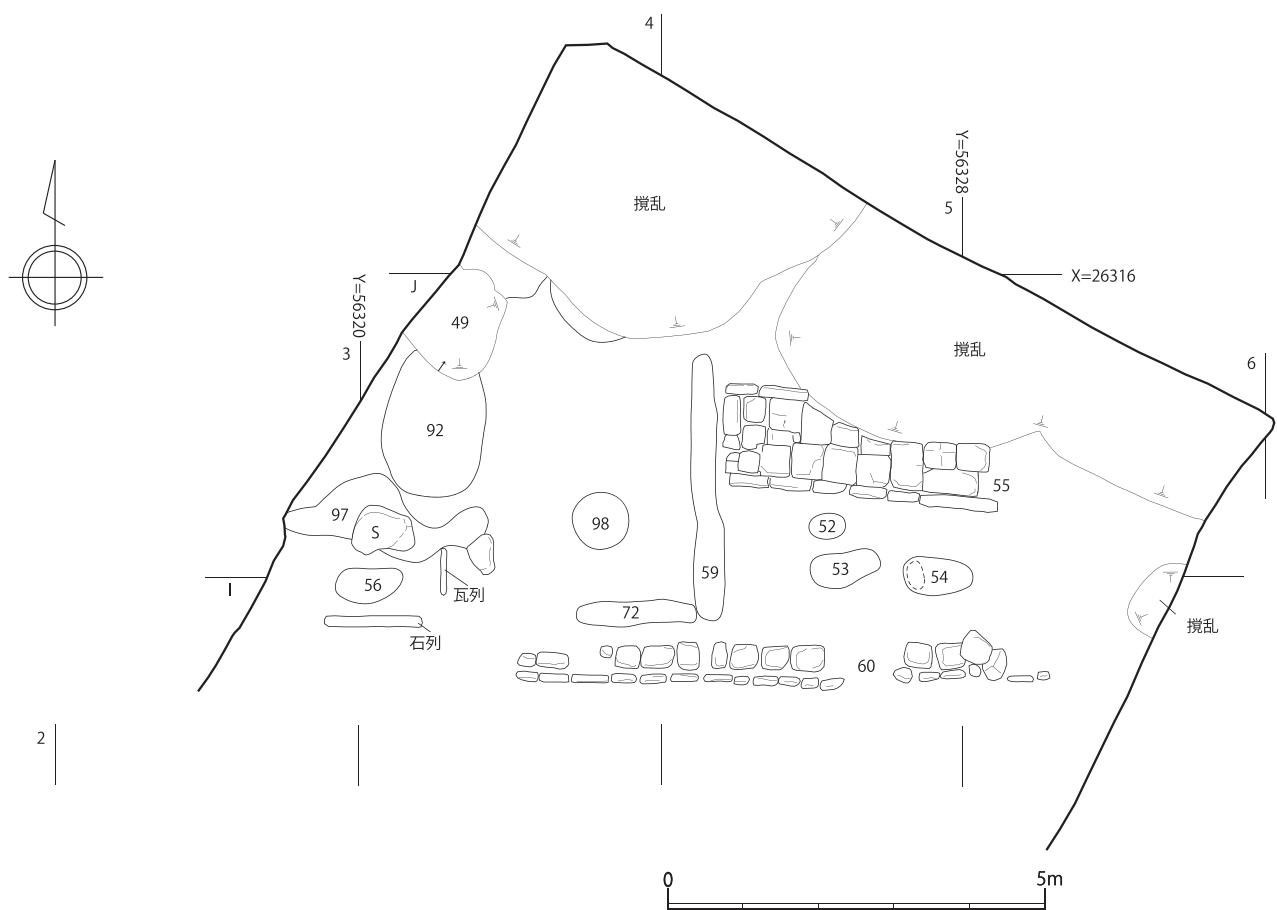
こうして検出された遺構は大きく5時期に分けられる。

- ・I期 古墳時代～中世(第4面)
- ・II期 17世紀～18世紀初頭(第3面)
- ・III期 18世紀代(第2・3面)
- ・IV期 19世紀初頭～中頃(第2面)
- ・V期 明治～昭和戦前(第1面)

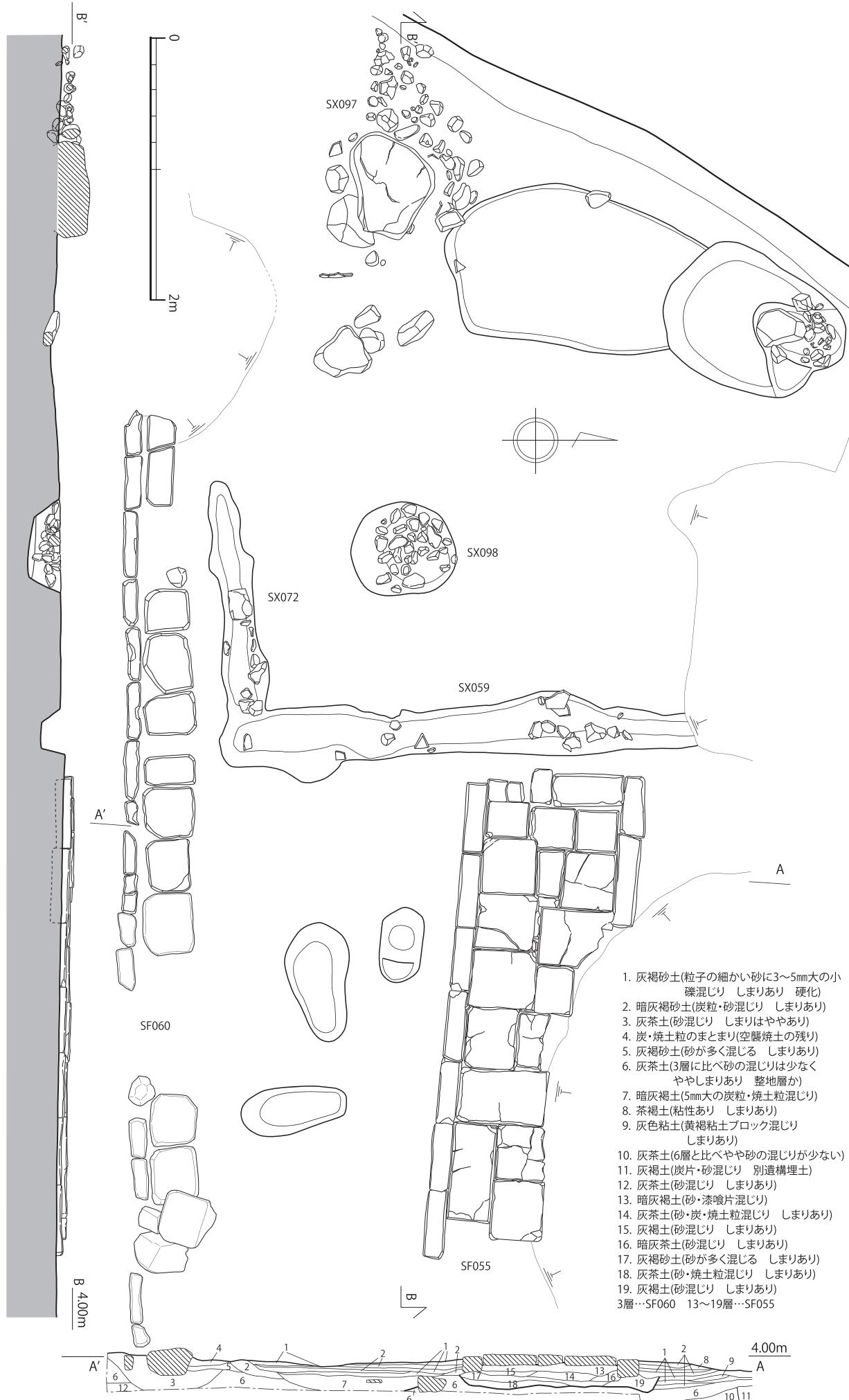
第2節 遺構

(1) 第1面 (第6図)

焼土層除去後に検出した遺構で、調査区北部のみで検出している。明治～昭和戦前段階の石畳状遺構や礎石建物跡が該当する。



第6図 第1面 遺構配置図(1/100)



石畳状遺構

SF055 (第7図)

調査区北部の J5 グリッドから J6 グリッドにかけて検出した東西方向に延びる石畳状遺構である。現代の搅乱により一部欠損するが、長軸約 3.80m、短軸約 1.35m の範囲に全面加工された凝灰岩を敷いている。主軸方向は W-6°-N で、石畳のレベルは西に向かいわずかに高くなる。石畳は検出面から深度約 0.30m の掘り込み内に砂混じり土を段階的に埋めた後に敷かれ、石畳の両側には敷き固められた土 (1・2・8 層) が幾層も確認できる。

SF060 (第7図)

調査区北部の I4 グリッドから I6 グリッドにかけて検出した東西方向に延びる石列遺構である。石を敷いていない所も部分的にはあるが、およそ長軸約 7.20m、短軸約 0.60m の範囲に石材を敷いている。主軸方向は W-1°-N で、石列のレベルは西に向かいわずかに高くなる。使用された石材は凝灰岩で、北列には地上面のみを平らに加工した方形の石を、南列には全面加工した長方形の石を並べている。石列は検出面から深度約 0.25m の掘り込みを砂混じり土で埋めた後に敷いている。

礎石建物跡

SX059・SX072・SX097・SX098 (第7図)

SF055 の西側には SX059・SX072・SX097・SX098 が展開する。SX059・SX072 は石の抜け跡である。重機による掘削時に石材を上げてしまったが、本来は長方形に加工した石を配していた。SX097 は J3・4 グリッドにかけて検出した礎群である。礎石と考えられる長軸約 0.70m の巨石と、周辺に拳大の円礎が集中してある。SX098 は直径約 0.80m の円形の柱穴で、拳大の礎が集中して入っていた。SX097・SX098 の直下からは礎石建物跡 (SB075) を検出している事から、これらの遺構は SF055 に伴う礎石建物を構成していた可能性が高い。

(2) 第2面 (第8図・第9図)

検出した遺構は 18 世紀～19 世紀中頃の礎石建物跡、池状遺構、埋甕遺構、火災処理土坑、土坑である。東側では土坑が重複するなど遺構密度が高いのに対し、礎石建物跡のある西側では遺構の切り合いがほとんど見られないなど、遺構種別の空間利用が歴然としている。遺物は陶磁器・瓦が主で、陶磁器は日用雑器が主体を占める。瓦は多量に廃棄されており、二次被熱を受け変形しているものと被熱を受けていないものに分けられる。

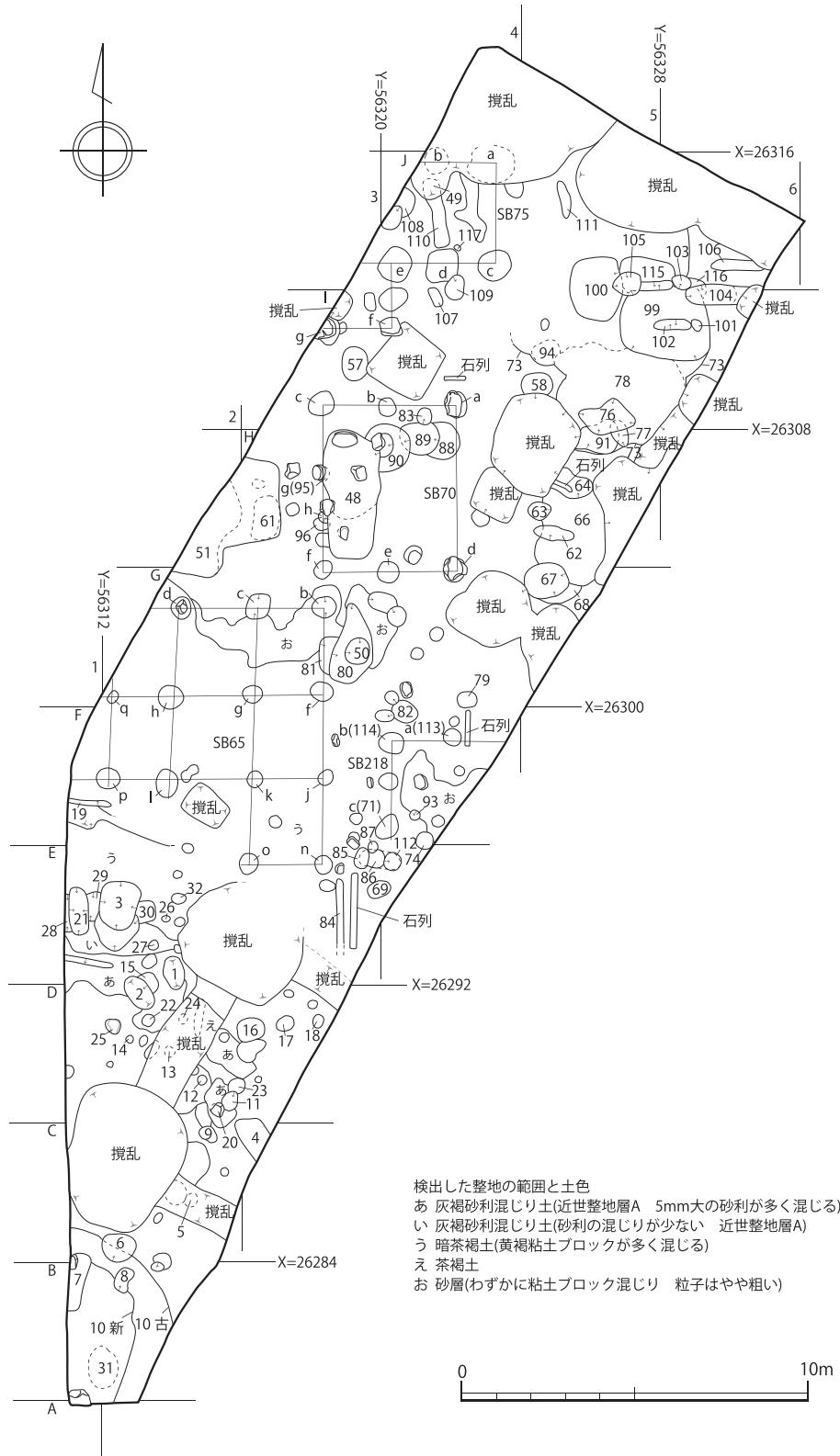
礎石建物跡

SB065 (第10図)

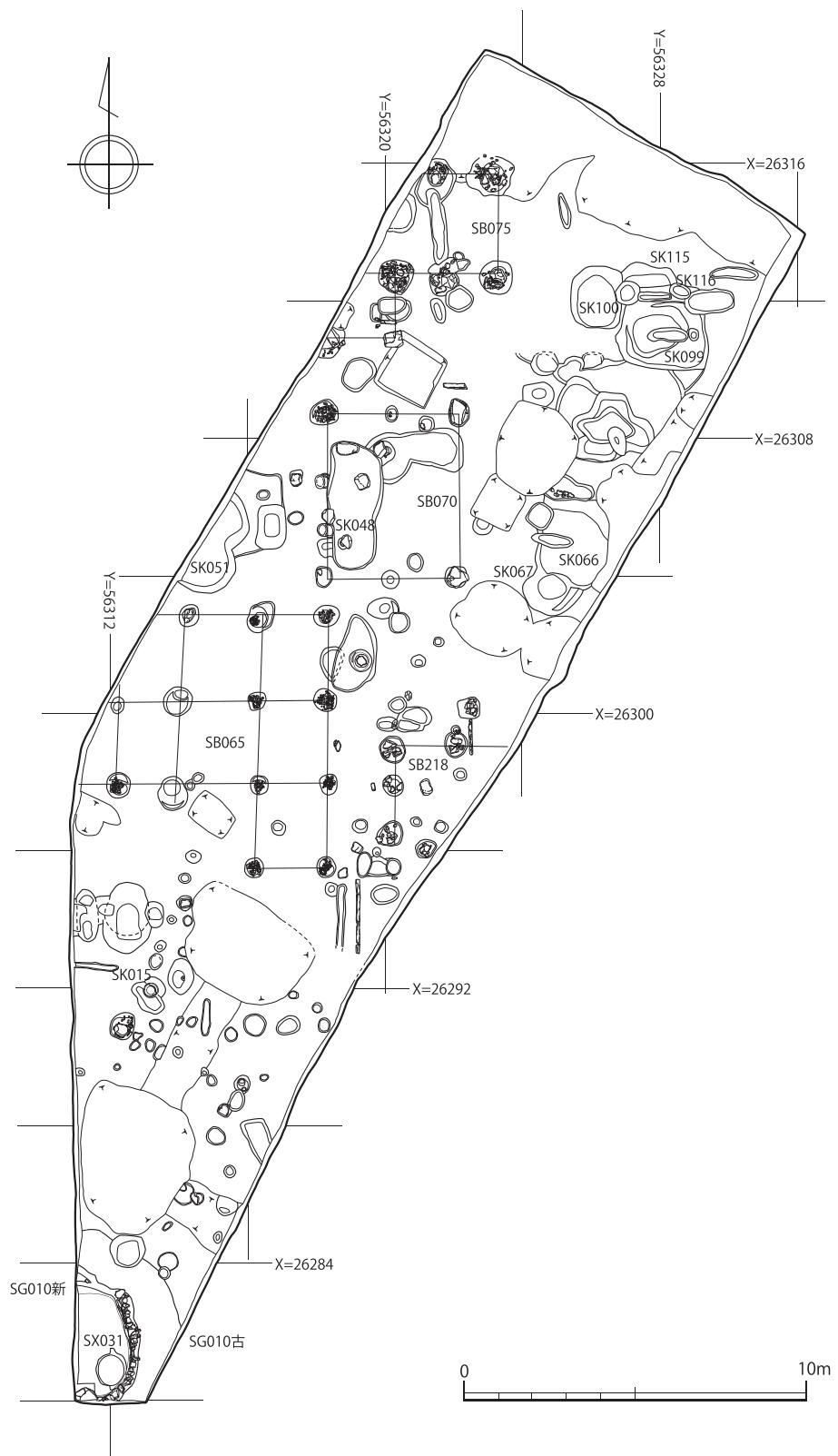
調査区中央部の E2・3、F1・2・3、G2・3 グリッドで検出した南北 3 間 × 東西 3 間 + α の礎石建物跡である。柱穴は直径約 0.50～0.80m の概ね円形で、柱間は南北柱間が約 2.40～2.60m、東西柱間が約 1.60～2.50m で、掘方の深度は約 0.20m である。柱穴 b・c・f・g・j・k・n・o・p では礎石自体は残存していないものの根緒石と考えられる小礎を多数検出しており、埋土は締まった土が薄く相互に入っている。柱穴 d は他の柱穴よりも深く掘り込み、瓦破片と小礎を多量に入れた後に入頭大の礎を据えている。時期については遺物も少量であるため判断が難しいが、後述する土坑群と切り合わないなど意識的な配置が見受けられる事や近代整地土除去後に検出できた事から 19 世紀初頭～中頃と考えられる。

SB070 (第11図)

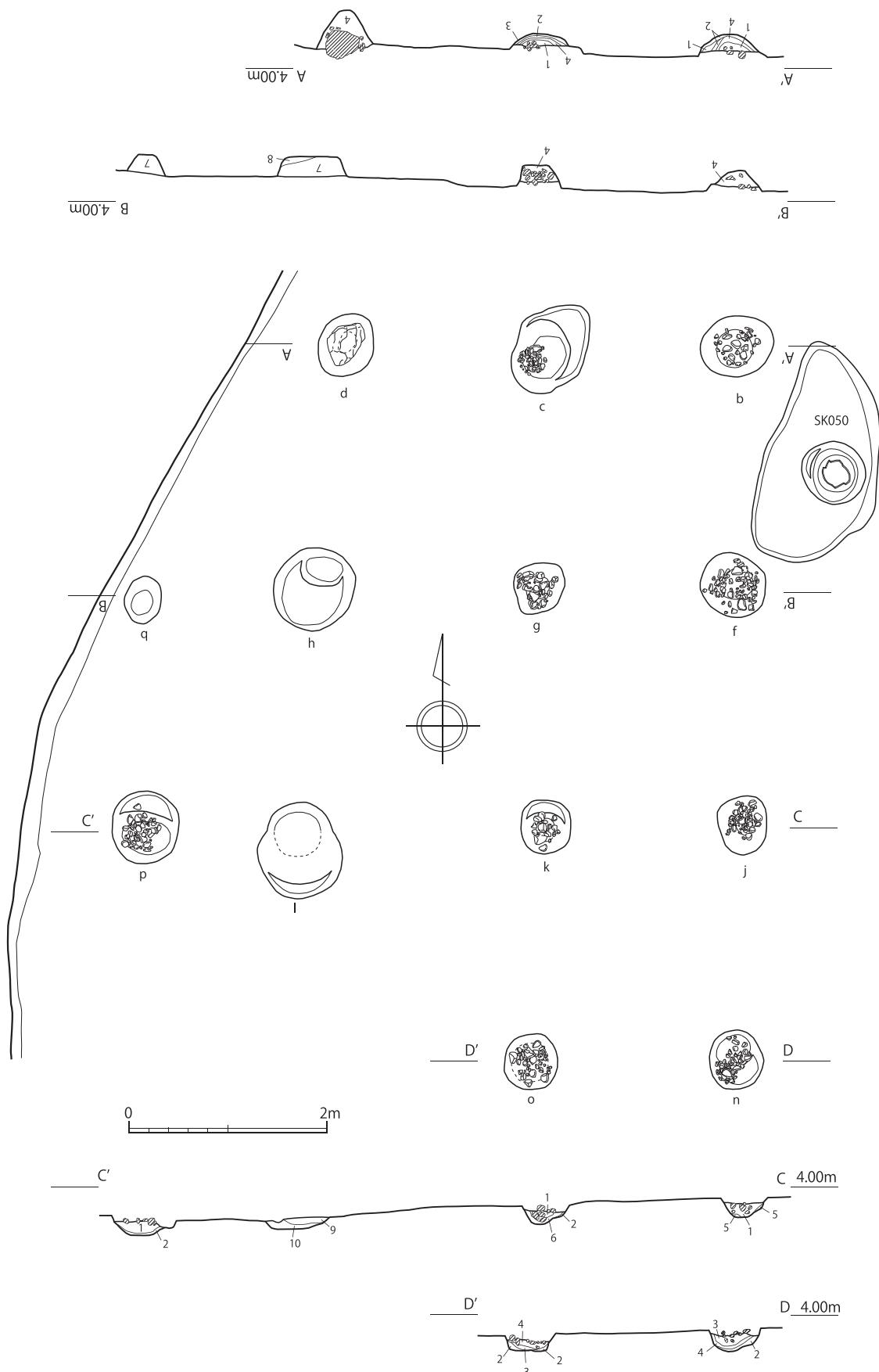
調査区中央部の G3・4、H3・4、I3・4 グリッドで検出した南北 3 間 + α × 東西 2 間と想定している礎石建物跡である。柱穴は直径約 0.60～0.80m の概ね円形で、柱間は東西柱間が全て約 1.90～2.00m と等間隔なの



第8図 第2面遺構配置図 (1/200)



第9図 第2面 全体遺構図 (1/200)



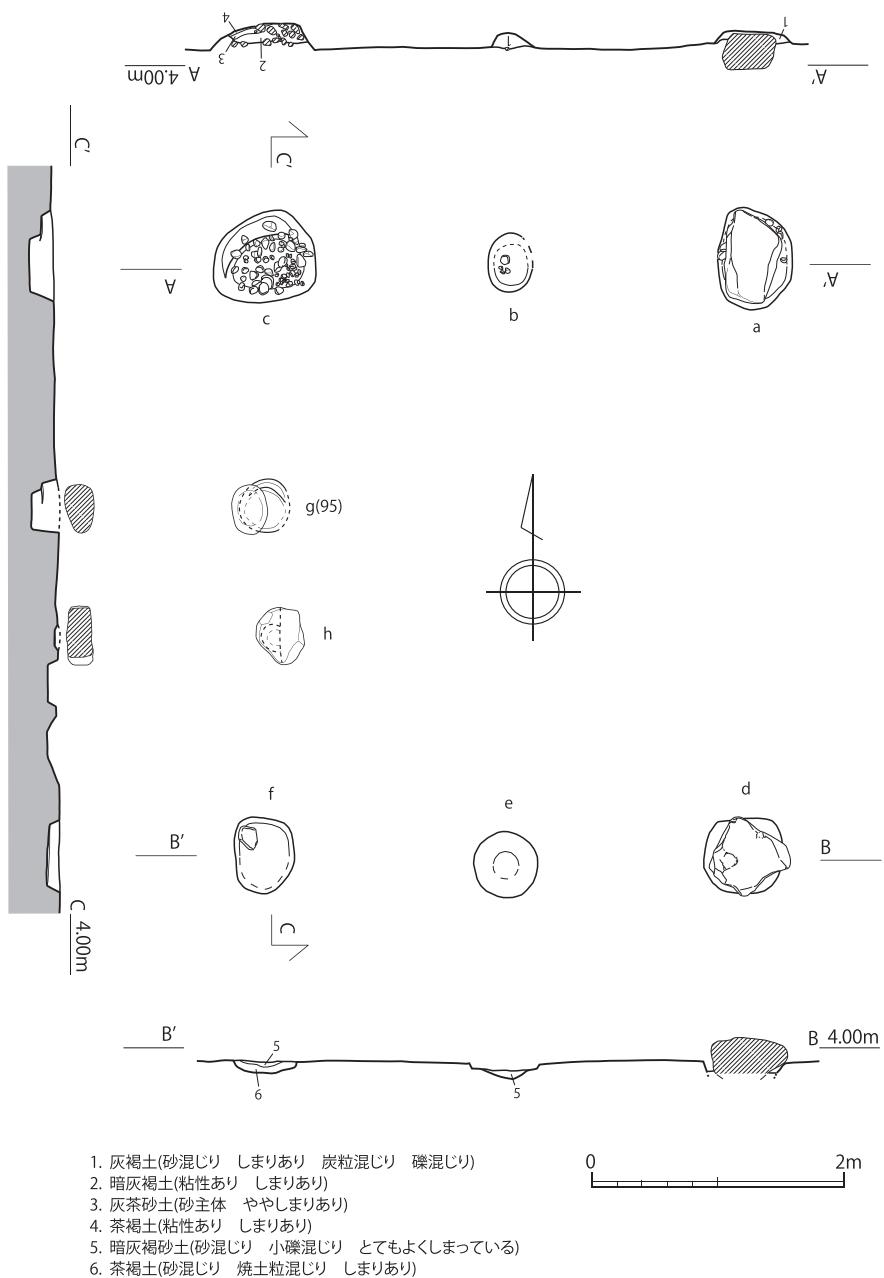
1. 暗紅褐土(砂・粘土ブロック混じり しまりあり)	6. 黄灰褐土(しまりあり 砂混じり)
2. 灰茶砂土(砂主体 しまりあり)	7. 暗茶褐土(しまりなし)
3. 茶褐土(粘性あり しまりあり)	8. 茶褐土(粘性あり ややしまりあり)
4. 暗茶褐土(粘性あり しまりあり ブロック土混じり)	9. 暗灰褐土(砂・粘土ブロック混じり)
5. 灰褐土(砂・粘土ブロック混じり 粘性あり)	10. 褐灰土(砂・粘土ブロック混じり 粘性あり)

第10図 SB065 遺構実測図 (1/60)

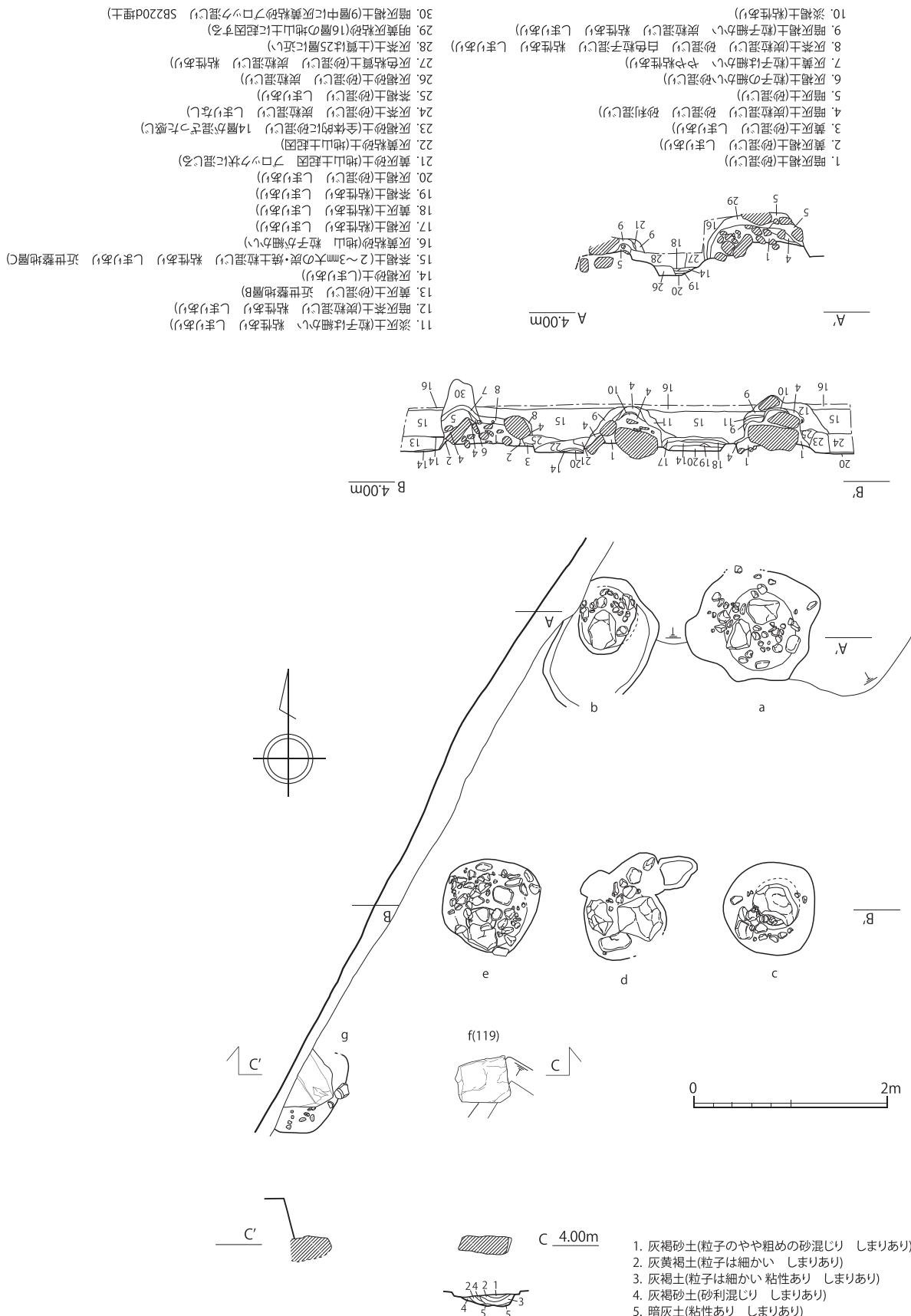
に対し、南北柱間は北から約 1.90m・1.10m・1.80m と不均等である。南北柱間が確認できたのは西側のみである。礎石は柱穴 a・d・g・h で確認できる。特に柱穴 a の礎石表面には割付線と考えられる墨で引かれた直線がわずかに残り、柱の当たり痕と考えられる丸い跡が写真上からうかがえる。柱穴 b・c では根締石と考えられる小礫を多数検出している。柱穴 c-f 軸は SB065 柱穴 b-n 軸の延長線上にあるなど規則性がうかがえる事から、SB065 と同時期と考えられる。

SB075 (第 12 図)

調査区北部西端の I3・4、J3・4、K4 グリッドで検出した南北 1 間 × 東西 2 間 + α 、南側に南北 1 間・東西 1 間 + α の張り出しを有すると想定している礎石建物跡である。柱穴は直径約 0.80 ~ 1.20m の概ね円形で、



第 11 図 SB070 遺構実測図 (1/60)



第12図 SB075 遺構実測図 (1/60)

柱間は南北柱間が約3.00m、東西柱間が約1.65mである。全ての柱穴に人頭大・拳大の円礫が多数詰め込まれている。SB075は土層観察から同じ位置に建物が少なくとも2回にわたり建て直されていた事がわかる。張り出し部には礎石が残存する。調査区西壁にかかる礎石gには、礎石上部に近代整地土がわずかに被り、礎石の下には根締石と考えられる拳大の礫が確認できた。礎石fについては当初現代のコンクリート基礎に若干乗った状態で検出できたため、元位置から離れた礎石と考えていたが、コンクリート基礎を除去後に直下から直径約0.75mの円形で、埋土に締まった土が相互に入る柱穴跡が検出できた事から、礎石はほぼ元位置を保っていた可能性が高くなかった。以上の事から復元すると、張り出し部は南北柱間が約1.80m、東西柱間が約2.00mである。張り出し部の

礎石gはSB070の柱穴c-f軸の延長線上にある事から、SB075とSB070が一連の建物であった可能性もある。時期はSB070との柱穴配列を考慮するならば19世紀初頭～中頃と考えられる。

SB218（第13図）

調査区中央部東端のF3・4グリッドで検出した南北1間+ α ×東西1間+ α の建物跡である。柱穴は直径約0.70～0.80mの円形で、柱間は南北柱間が約2.60m、東西柱間が約1.90mである。掘方の深度は約0.10mと浅く、全ての柱穴から根締石と考えられる人頭大～拳大の円礫・凝灰岩片が出土した。整地層を掘り下げる過程で検出できた事から18世紀頃と考えられる。

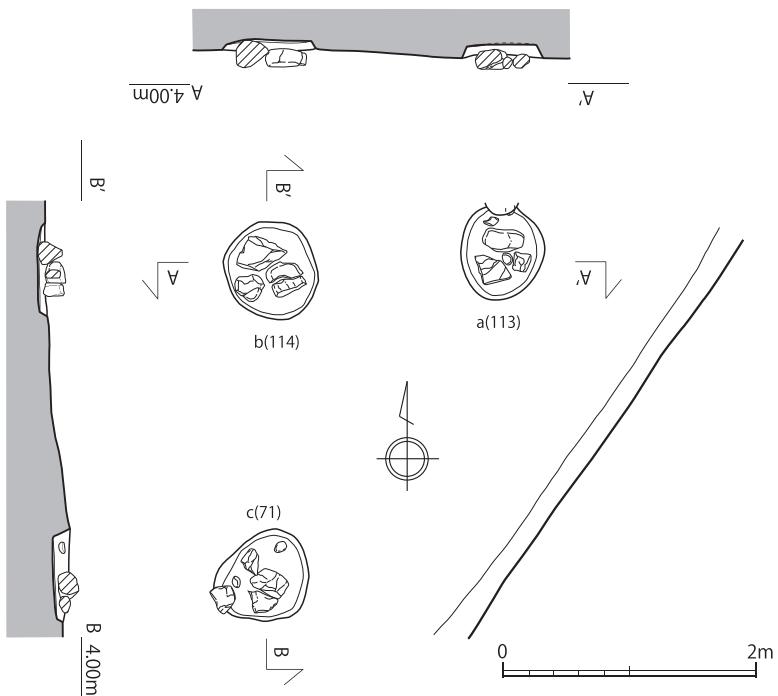
池状遺構

SG010（第14図・第15図・第4図・第5図）

調査区南部南端のA1・2、B1・2、C1・2グリッドで検出した。この地点は他の地点よりもグライ層が深くまである事が土層観察から確認できており、調査中の掘削時の湧水量も豊富であった事から、滯水しやすい環境であったと推測できる。池状遺構の形成以前にも遺構と考えられる掘り込み跡を調査区西壁で確認しているが詳細は不明である。池状遺構については護岸の形態と近世整地層との関係から2段階に分ける事ができる。

古段階は近世整地層Bの上面で遺構が検出でき、護岸と考えられる木杭がめぐる段階である。検出面からの最大深度は約0.60mで、掘方は円形を呈するように弧を描く。円形と仮定し復元すると、規模は直径約6.60mとなる。木杭は掘方に沿って二重に巡っている。池の底には灰色グライ層が堆積し、下駄・鎌・外青磁筒形碗などが出土地した。

新段階は近世整地層Aにより池の周囲を埋め立て、新たに石垣で護岸する段階である。検出面からの最大深度は約0.65mで、石垣は北側が崩れているものの東側の残りはよく、円形ないしは楕円形を呈するように弧を描く。円形と仮定し復元すると、規模は直径約3.60mとなる。石垣には人頭大の川原石・結晶片岩・凝灰岩が



第13図 SB218 遺構実測図(1/60)



第14図 SG010 古段階遺構実測図 (1/40)

使用されており、中には享保十一年(1726)の碑文のある墓石も転用されていた。この段階の池の底には灰色粘土が堆積し、端反碗などが出土した。

池状遺構は新段階以降、暗茶褐土、大量の瓦・陶磁器の廃棄、灰褐砂土により北側から人為的に埋め立てられている。暗茶褐土からは明治期の型紙刷りやガラス製品などの近代遺物が出土している事から、時期は古段階が18世紀後半頃、新段階が19世紀前半頃、埋め立てについては19世紀後半の近代にかけて行われたと考えられる。

埋甕遺構

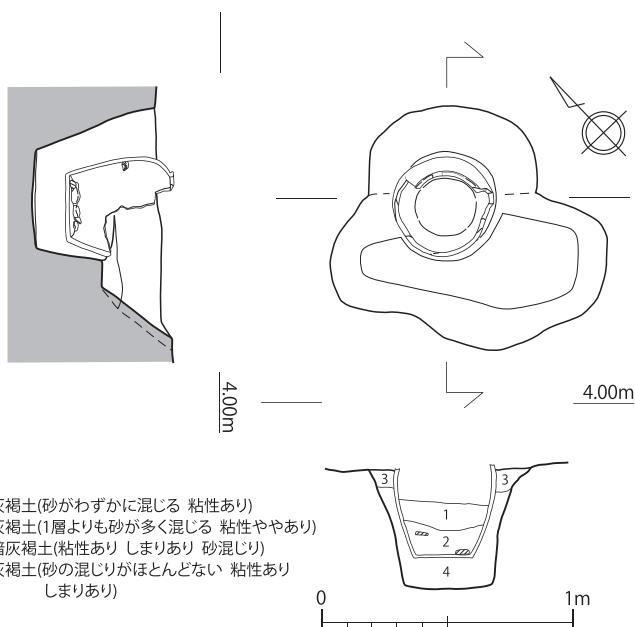
SK015 (第16図)

調査区南部のD2・E2グリッドで検出した。掘方は直径約0.67mの円形で、中央に土師質土器甕を埋置して

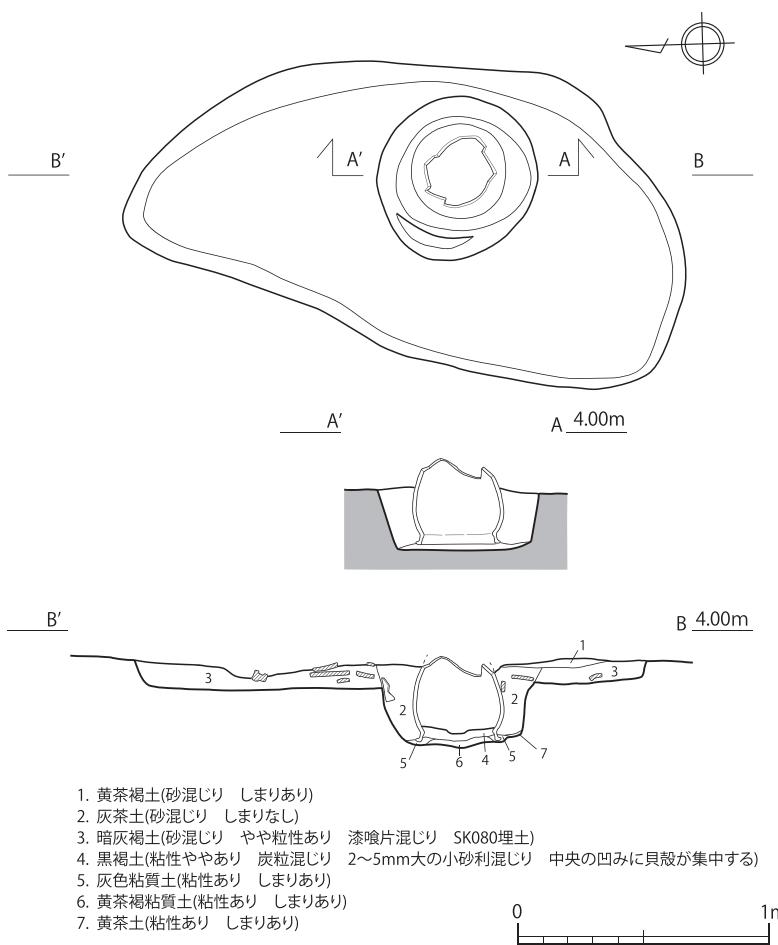


第15図 SG010 新段階遺構実測図(1/40)

いた。甕は現代の攪乱により上部半分が壊されていたが、埋土の観察から甕の内部には攪乱に切られる以前からすでに土が(1・2層)流入していた事がわかる。甕からは混じり込みと考えられる陶器・磁器の破片と、底部壁面に沿って小礫が並べられた状態で出土したのみであった。時期は近世整地層Aを掘り込んでいる事から、19世紀前半頃と考えられる。



第16図 SK015 遺構実測図 (1/30)



第17図 SK050 遺構実測図 (1/30)

SK050 (第17図)

調査区中央部のG3グリッドで検出した。掘方は直径約0.65mの円形、検出面からの最大深度は約0.33mで、中央に陶器甕を伏せて埋設していた。甕の底部には焼成後に直径約2cmの穿孔が施され、穿孔部周辺には漆喰が付着している事から水琴窟と考えられる。甕は掘り込んだ床面に粘質土を敷いた後に伏せて置かれ、口縁部は粘質土で目張りされている。裏込めについては、しまりがなく甕との間には隙間が生じており、締め固められた形跡はない。甕の内部には穿孔部より流入したと考えられる小砂利混じりの黒褐土が堆積し、穿孔部直下にはわずかな窪みが形成されている。窪みからは小巻貝が集中して出土した。SB065に付随すると考えられる事から19世紀初頭～中頃と考えられる。

火災処理土坑

SK099 (第18図)

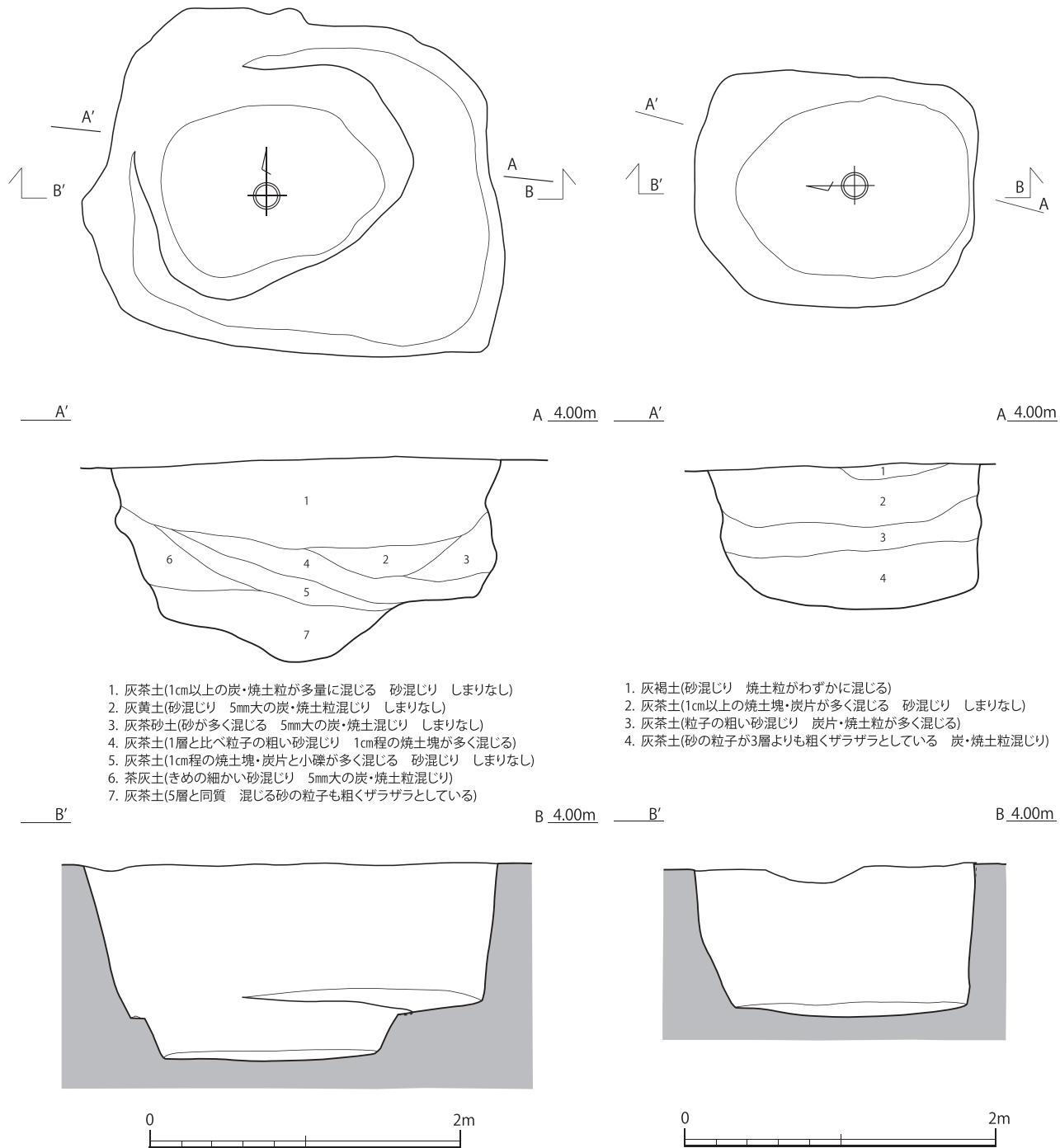
調査区北部東のI5・6、J5・6グリッドで検出した。SE150を切る。長軸約2.70m、短軸約2.10mの隅丸方形で、検出面からの最大深度は約1.30mである。多量の焼土塊・炭片と共に2次被熱を受け変形した瓦が出土している事から火災処理土坑と考えられる。時期は出土遺物(蛇ノ目凹形高台などV期)から18世紀末～19世紀初頭頃と考えられる。

SK100 (第19図)

調査区北部のI5・J5グリッドで検出した。SK185を切る。長軸約1.80m、短軸約1.50mの隅丸方形で、検出面からの最大深度は約0.95mである。大量の焼土塊・炭片と共に2次被熱を受け変形した瓦が出土している事から火災処理土坑と考えられる。SK099と遺構間接合する遺物が多く、出土遺物の様相からSK099と同時期と考えられる。

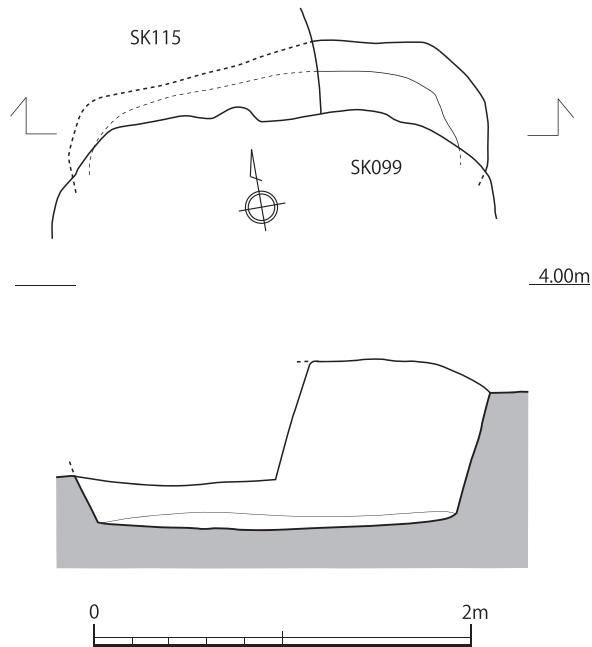
SK116 (第20図)

調査区北部東のJ6 グリッドで検出した。SK099・SK115 に切られる。長軸約 2.20m の隅丸長方形と考えられ、検出面からの最大深度は約 0.90m である。埋土には焼土塊が多く混じる事から火災処理土坑と考えられる。時期は SK115 との切り合いや出土遺物 (蛇ノ目釉剥皿) から 18 世紀後半頃と考えられる。



第18図 SK099 遺構実測図 (1/40)

第19図 SK100 遺構実測図 (1/40)



第20図 SK116 遺構実測図 (1/40)

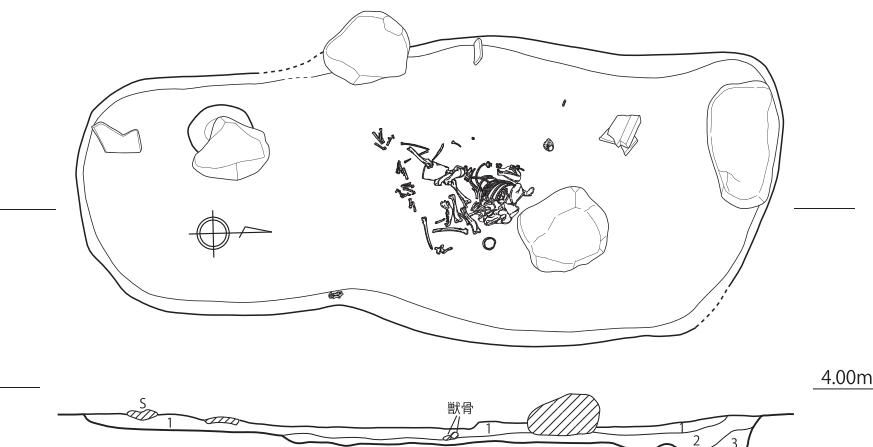
土坑

SK048 (第21図・第22図)

調査区中央部のH3グリッドで検出した。埋没後にSB070が建っている。長軸約3.70m、短軸約1.65mの隅丸長方形で、検出面からの最大深度は約0.20mである。礫と共に獣骨・サザエの貝殻・銅錢などが出土している。獣骨は犬と考えられ、一部の骨は移動を受けている。時期は出土遺物(端反碗などV期)から19世紀前半頃と考えられる。

SK051 (第23図)

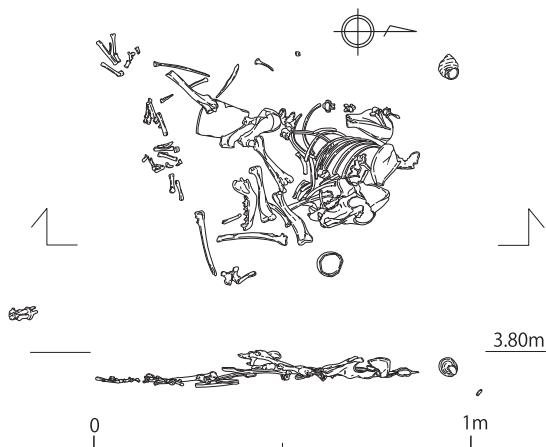
調査区中央部西端のG2・H2グリッドで検出した。長軸約3.10m、短軸約1.25m以上の不定形を呈する。床面は南に向かって傾斜しており、検出面からの最大深度は約0.35mである。埋土には炭・焼土が混じらず、被熱を受けていない瓦が多量に出土している事から、廃棄土坑と判断できる。時期は出土遺物(「大坂新町お笠紅」紅猪口などV期)や近代整地層に覆われる事から19世紀前半頃と考えられる。



1. 灰茶土(黄褐色土混じり 砂混じり 炭混じり 風化した骨も多くあり 獣骨はこの層中に含まれる)
2. 暗灰褐色土(砂混じり ややしまりあり 黄褐色土の混じりはない)
3. 暗灰褐色土(砂混じり 炭粒が混じる)



第21図 SK048 遺構実測図 (1/40)



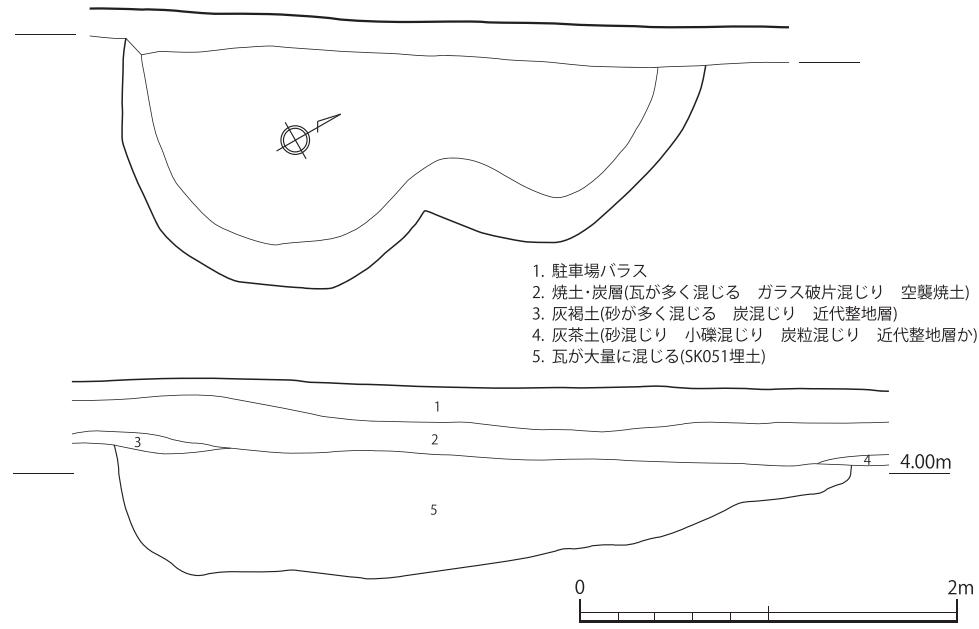
第22図 SK048 獣骨実測図 (1/20)

SK066 (第24図)

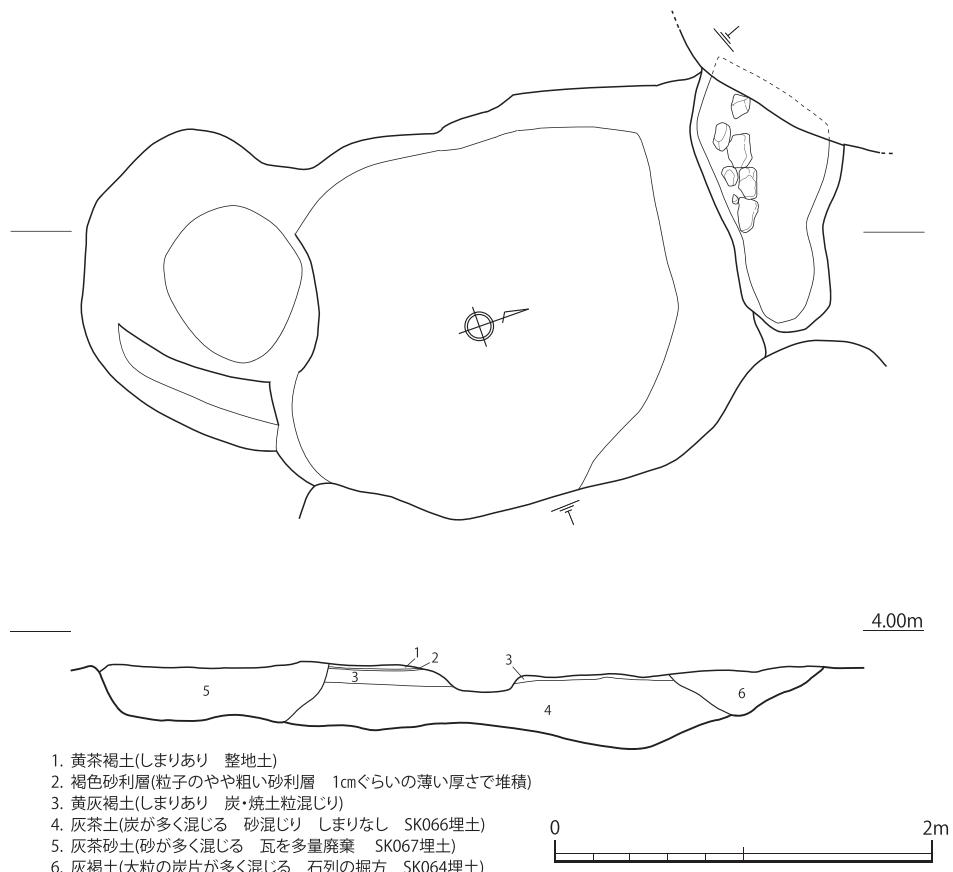
調査区中央部東のG5・H5グリッドで検出した。SK067に切られる。長軸約2.60m以上、短軸約2.00m以上の楕円形で、検出面からの最大深度は約0.40mである。埋土中からは炭の破片と共に瓦が多量に出土している事から廃棄土坑と考えられる。出土遺物や遺構の切り合いから19世紀前半頃と考えられる。

SK067 (第24図)

調査区中央部東のG5・H5グリッドで検出した。SK066を切る。長軸約1.40m、短軸約1.20mの円形で、検出面からの最大深度は約0.30mである。

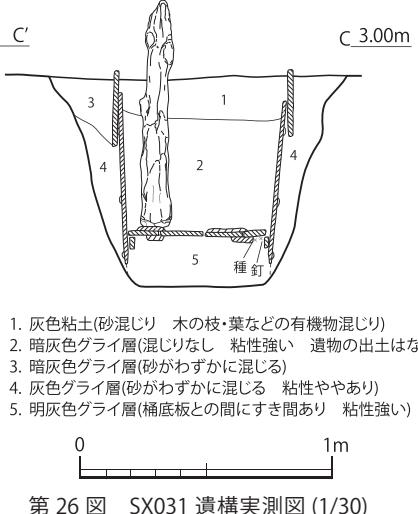
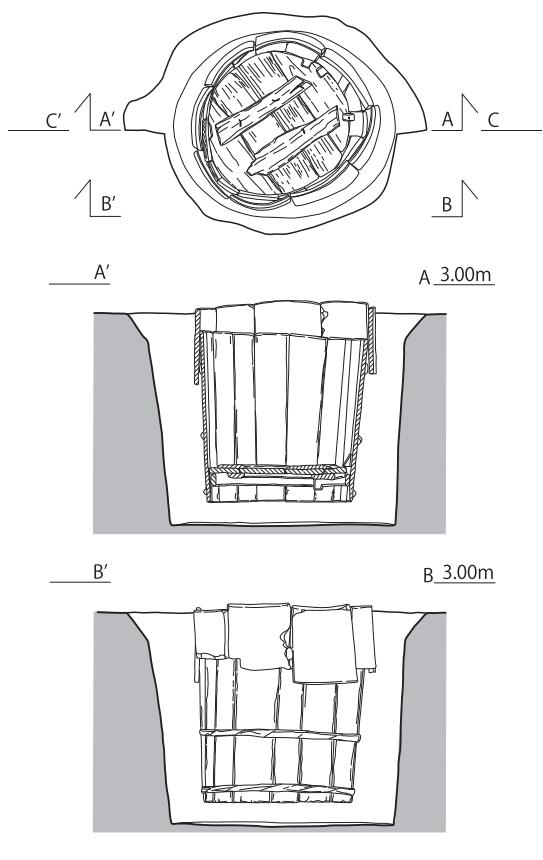
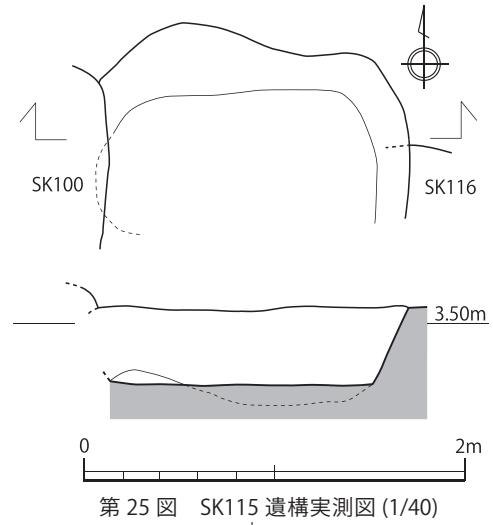


第23図 SK051 遺構実測図 (1/40)



第24図 SK066・SK067 遺構実測図 (1/40)

埋土は砂が多く混じる灰茶砂土で、瓦が多量に出土した事から廃棄土坑と考えられる。鬼瓦が出土している。時期は出土遺物 (端反碗などV期) や SK066 との切り合いから 19世紀前半～中頃と考えられる。



1. 灰色粘土(砂混じり) 木の枝・葉などの有機物混じり
2. 暗灰色グライ層(混じりなし 粘性強い 遺物の出土はなし)
3. 暗灰色グライ層(砂がわずかに混じる)
4. 灰色グライ層(砂がわずかに混じる 粘性ややあり)
5. 明灰色グライ層(桶底板との間にすき間あり 粘性強い)

第26図 SX031 遺構実測図 (1/30)

SK115 (第25図)

調査区北部のJ5・6グリッドで検出した。SK099・SK100に切られる。長軸約1.60m、短軸約0.90m以上の隅丸方形と考えられ、検出面からの最大深度は約0.50mである。埋土中には焼土の混じりはないものの、瓦が多く出土した事から廃棄土坑と考えられる。時期は出土遺物(広東碗などV期前半)から18世紀末～19世紀初頭頃と考えられる。

性格不明遺構

SX031 (第26図)

調査区南部南端のB1・2グリッドで検出した。SG010新段階の底の面から掘り込まれており、掘方は平面で検出するのが非常に困難であったが長軸約1.21m、短軸約0.90m以上の楕円形を呈する。中央には結桶が埋置され、桶の周囲には8枚の平瓦・棟瓦が取り囲む。結桶は直径約0.67m、高さ約0.67mで、桶の上部は被熱を受け部分的に炭化している。桶の中には長さ約1.00m、幅約0.10mの丸太材が立った状態で出土した。結桶内の埋土は、混じりのない暗灰色グライ層(2層)が大半で、上部に木の枝や葉などの有機物が多く混じる灰色粘土が堆積する。埋土の観察から丸太材は桶を埋置した直後に立てられた状態で置かれ、暗灰色グライ層を埋めて固定したと考えられる。灰色粘土(1層)中からは軟質施釉陶器碗、肥前産染付猪口が出土している。SG010新段階に伴う事から、19世紀前半頃と考えられる。

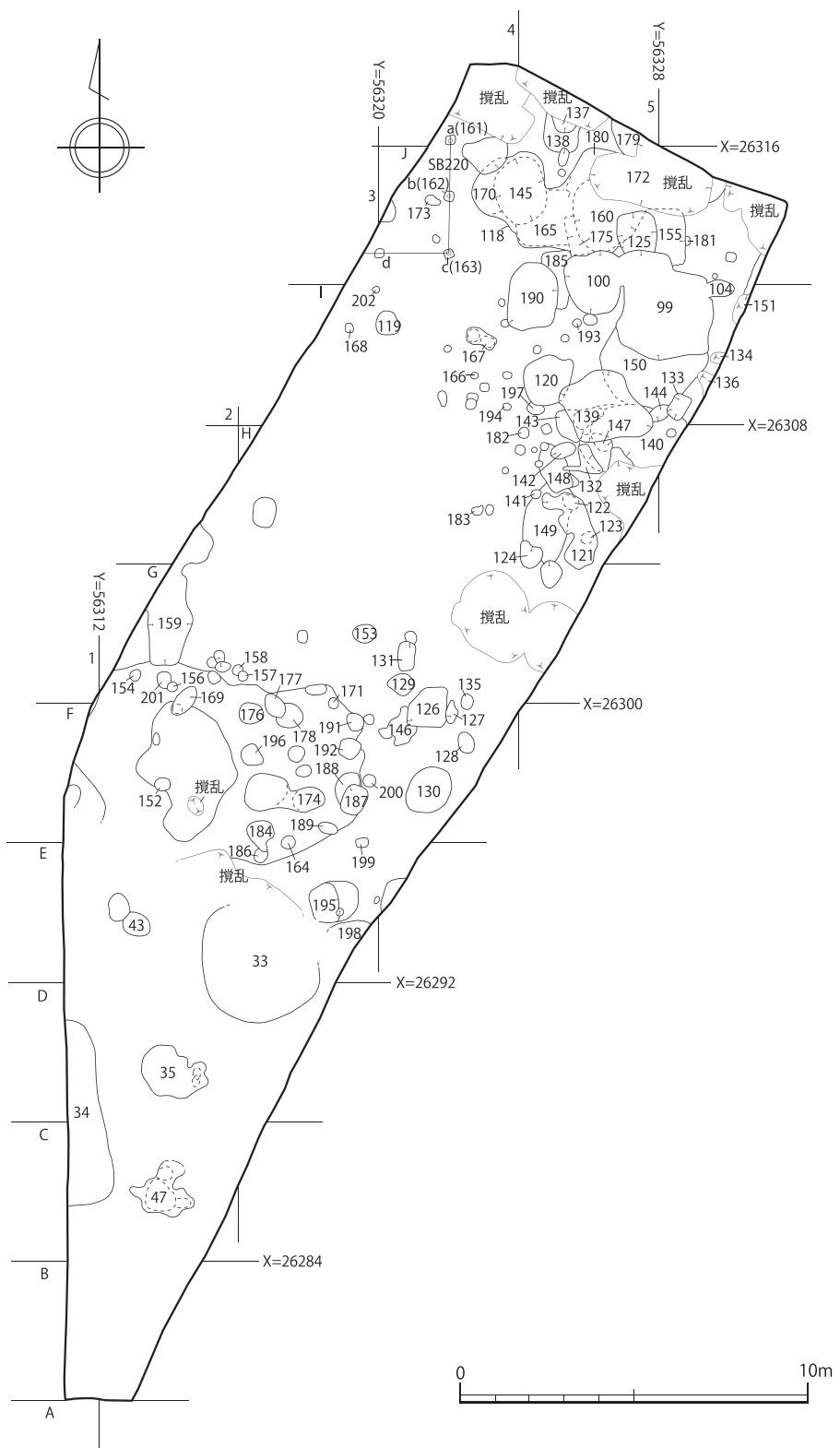
(3) 第3面 (第27図・第28図)

検出した遺構は17世紀・18世紀代の掘立柱建物跡、井戸跡、土坑などである。遺構密度は低い。第2面でみられた礎石建物跡の下は遺構がほとんど確認できない空閑地である。

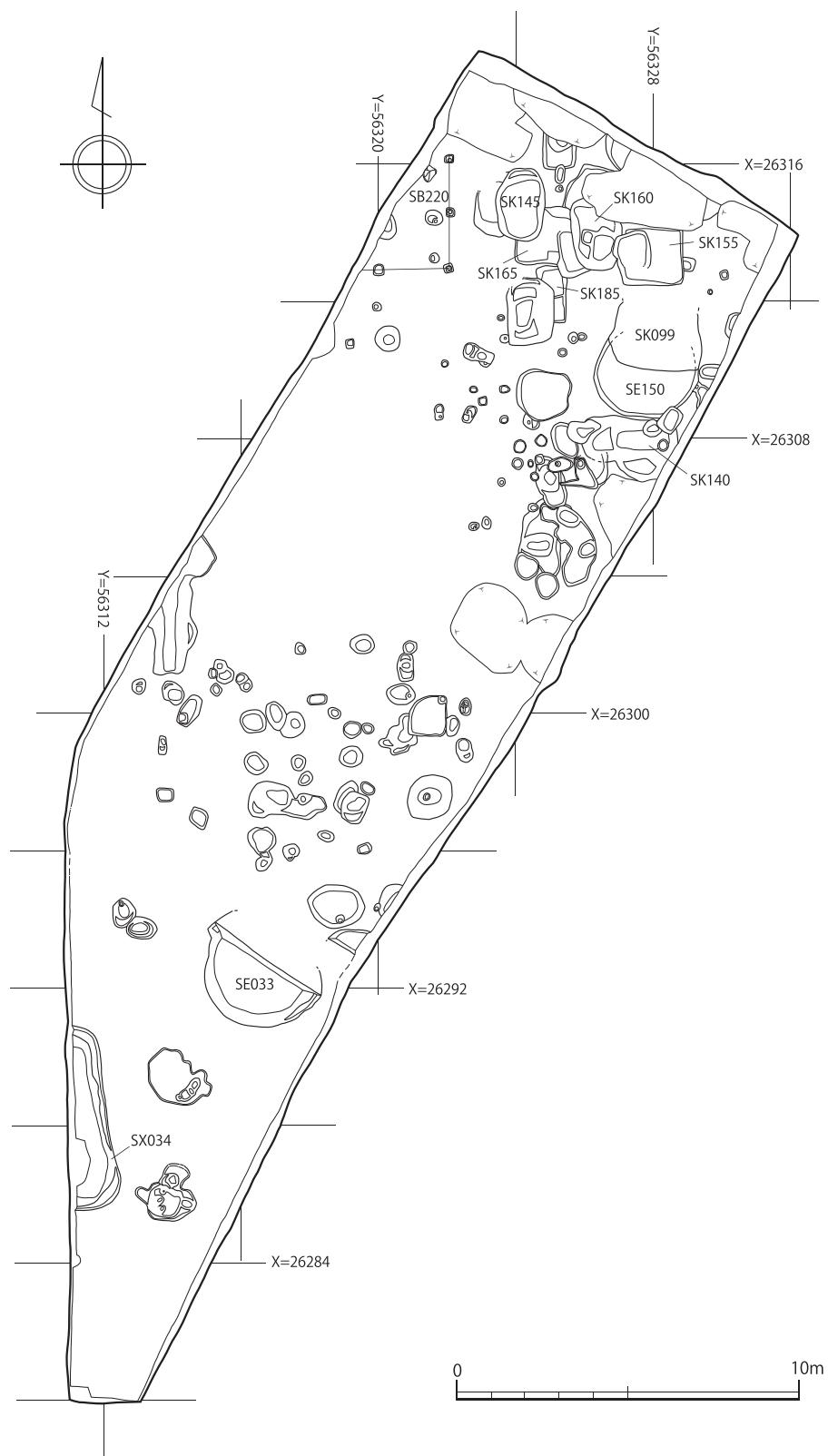
掘立柱建物跡

SB220 (第29図)

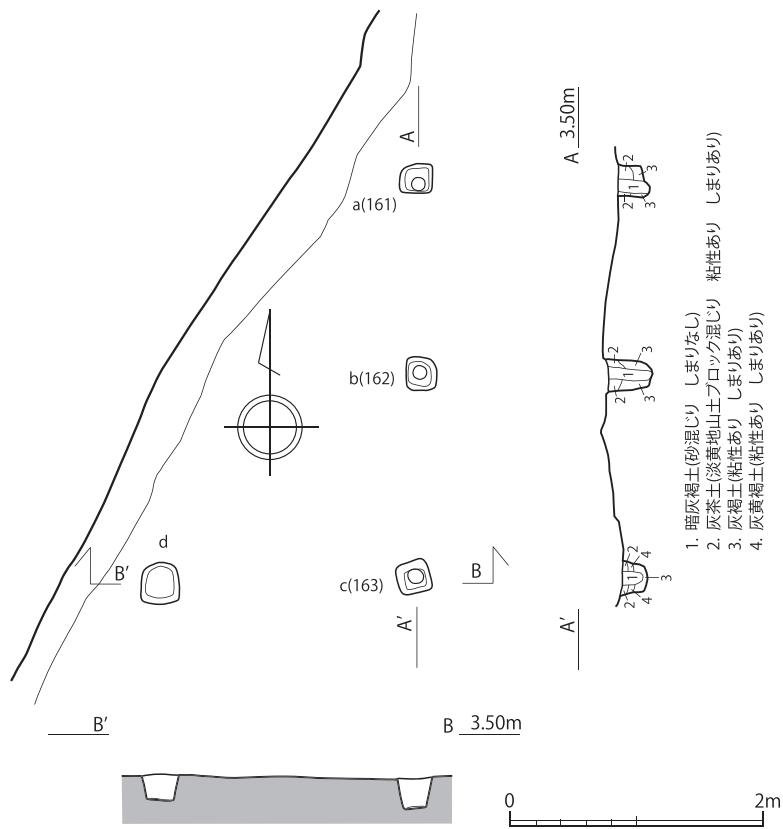
調査区北部西端のJ3・4、K4グリッドで検出した、南北2間+α×東西1間+αの掘立柱建物跡である。柱穴の掘方は長軸約0.25～0.30mの隅丸方形で、柱穴a・b・cにおいて柱痕が確認できた。柱痕は径約0.10mの円形で、柱間は南北柱間が約1.50～1.65m、東西柱間が約2.00mである。時期は近世整地層Bを除去後に検出できた事から17世紀～18世紀初頭頃と考えられる。



第27図 第3面遺構配置図(1/200)



第28図 第3面全体遺構図(1/200)



第29図 SB220 遺構実測図 (1/60)

井戸跡

SE033 (第30図)

調査区南部のD2・3、E2・3 グリッドで検出した。掘方は長軸約 3.80m、短軸約 2.70m 以上の橢円形で、湧水の関係から検出面より約 1.00m までの掘削で止めている。井筒の痕跡は確認できず、しまりのない灰褐色土ブロック混じりの暗灰褐色土が中央部に認められる事から、抜き取りの可能性がある。時期は近世整地層 B に覆われる事から 17 世紀～18 世紀初頭頃と考えられる。

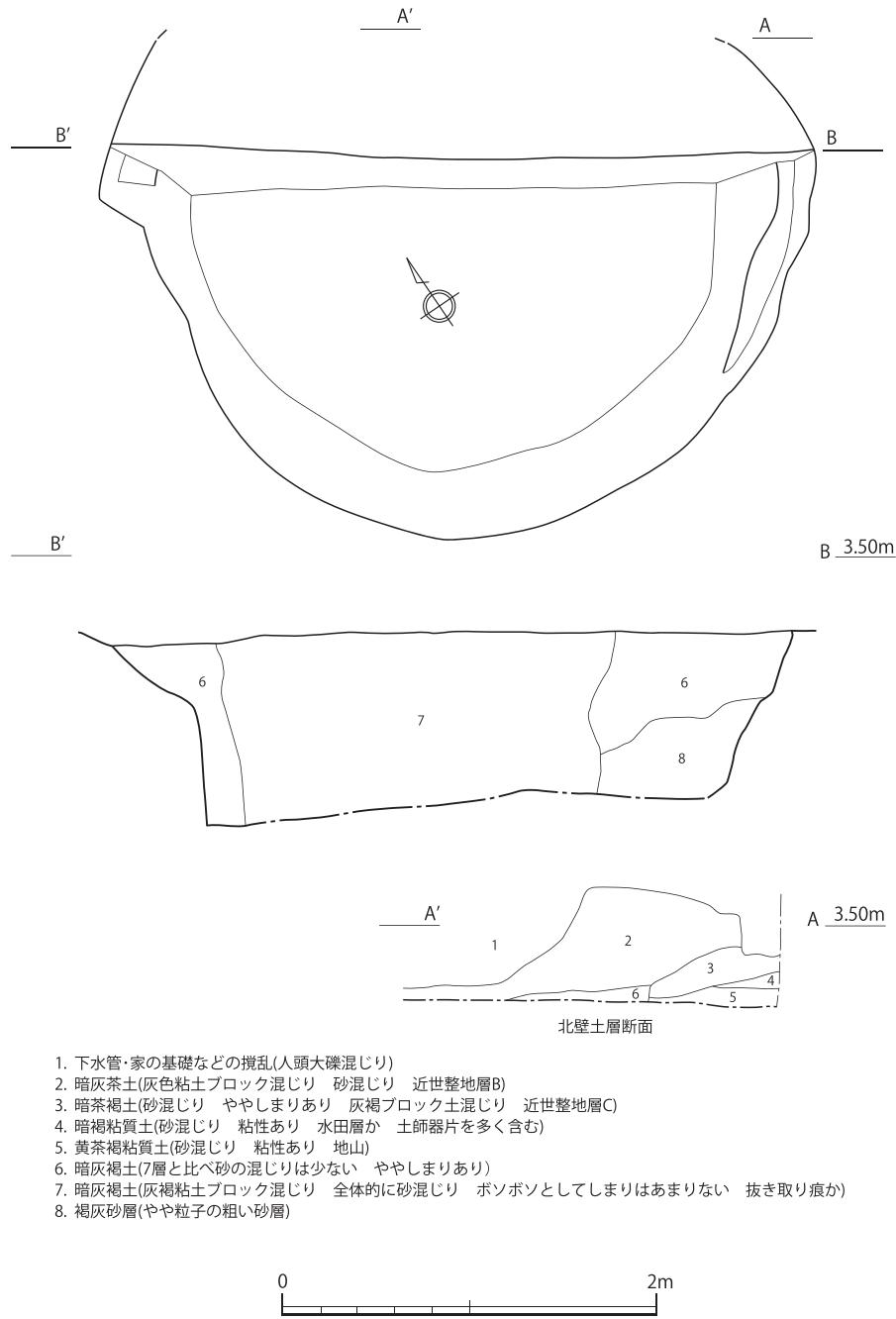
SE150 (第31図)

調査区北部東の I5・6 グリッドで検出した。SK099 に切られる。直径約 3.00m の円形で、湧水の関係から検出面より約 0.80m までの掘削で止めている。埋土が人為的に埋められた灰褐色土ブロック混じり土である事や遺構の規模から井戸と考えられる。井筒の痕跡は確認できなかったため、抜き取りの可能性がある。時期は出土遺物(丸碗などIV期前半)から 18 世紀前半頃と考えられる。

土坑

SK140 (第32図)

調査区北部東端のH5・6、I5・6 グリッドで検出した。現代の搅乱などに切られる。長軸約 2.80m、短軸約 1.80m 以上の隅丸長方形で、検出面からの最大深度は約 0.86m である。埋土は大きく下層(7層)と上層(1～6・8層)に分けられる。上層は人為的に埋められた埋土で、砂目積み唐津皿・絵唐津・軒丸瓦・軒平瓦などが出土しており、17世紀中頃以降の遺物は含まれない。下層からは遺物は出土しておらず、別遺構である可能性もある。時期は17世紀前半頃と考えられる。



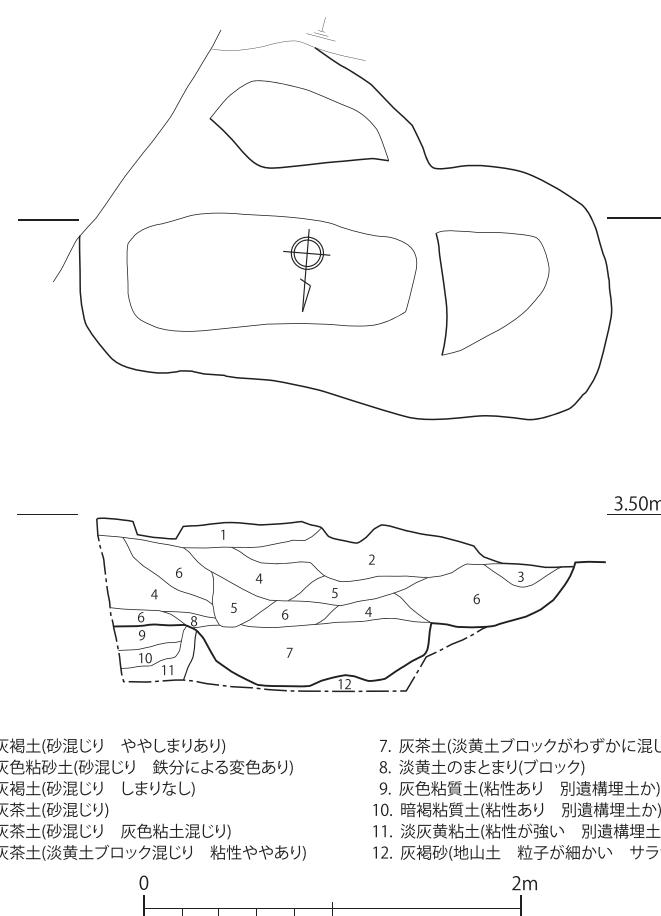
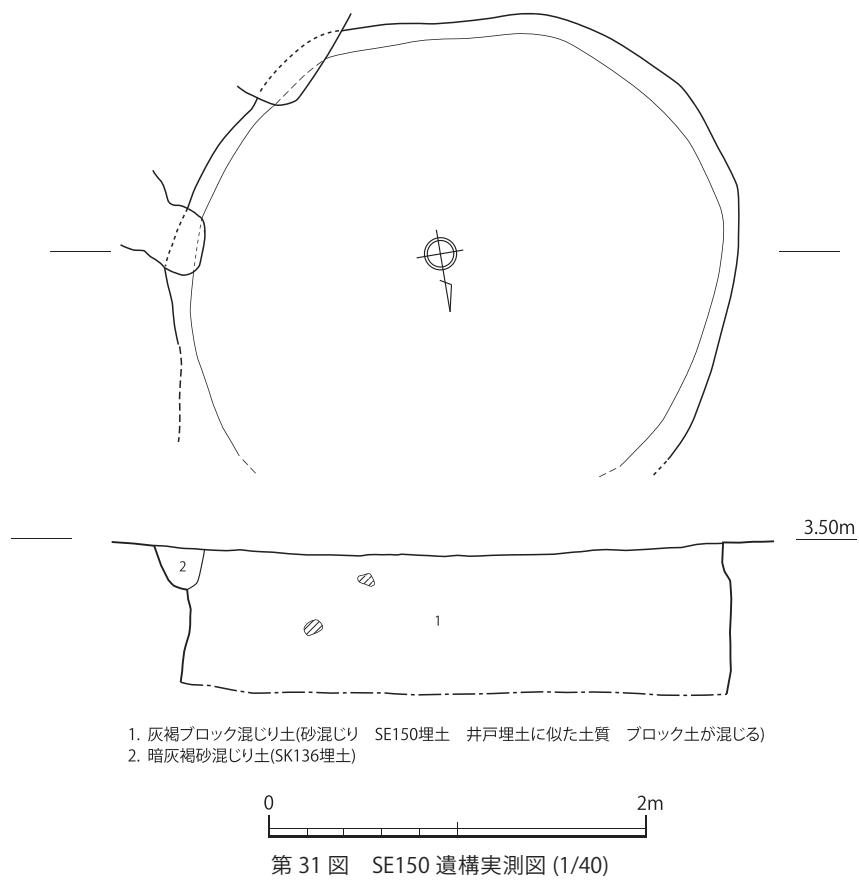
第30図 SE033 遺構実測図(1/40)

SK145 (第33図)

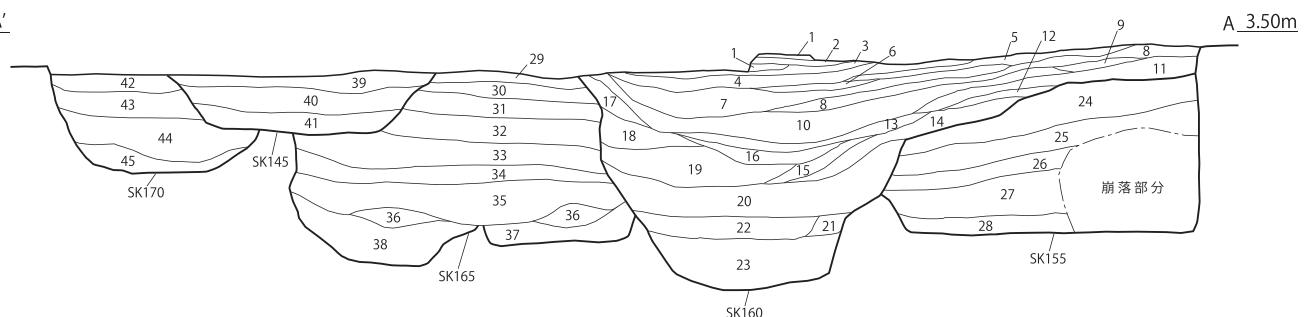
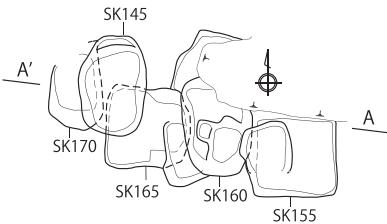
調査区北部のJ4・5 グリッドで検出した。SK165 を切る。長軸約 2.10m、短軸約 1.45m の橢円形で、検出面からの最大深度は約 0.35m である。断面形状は台形を呈し、埋土には炭・焼土粒が混じる。時期は出土遺物(外青磁碗・猪口などIV期後半)から 18世紀後半頃と考えられる。

SK155 (第33図)

調査区北部のJ5・6 グリッドで検出した。SK115・SK125・SK160 に切られる。長軸約 1.90m、短軸約 1.80m 以上の方形で、検出面からの最大深度は約 1.00m である。床面や壁面は平坦に掘られ、壁面の四隅には角が明瞭に認められる。多量の瓦が下層埋土から出土している事から、当初は別の目的で掘られていた土坑を廃絶時に

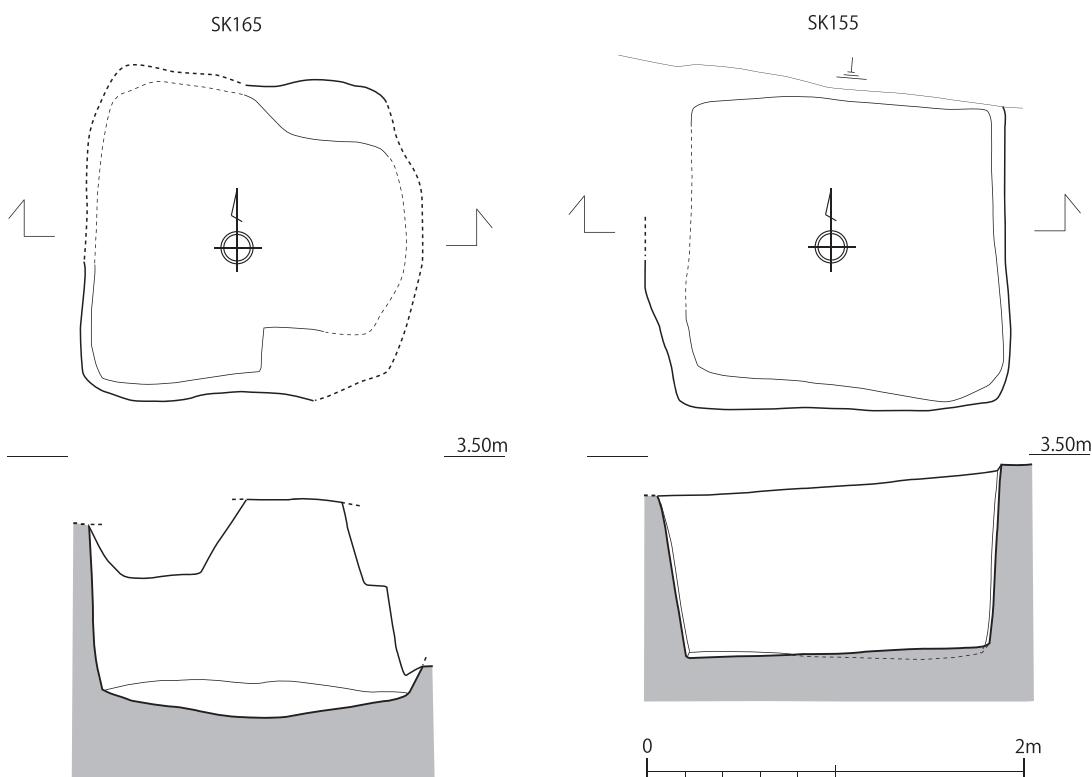


第32図 SK140 遺構実測図 (1/40)

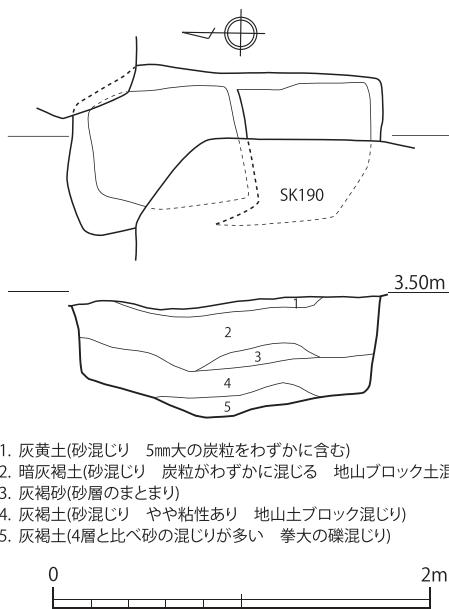


1. 黄灰土(砂混じり しまりあり)
 2. 暗灰褐土(砂混じり 漆喰片混じり しまりあり)
 3. 暗灰褐土(砂混じり しまりあり)
 4. 灰褐土(砂混じり しまりあり)
 5. 茶褐土(砂混じり しまりあり)
 6. 灰褐砂土(やや粒子の粗い砂混じり)
 7. 暗灰褐土(砂混じり 漆喰片混じり しまりあり)
 8. 灰褐土(砂混じり しまりあり)
 9. 茶褐土(砂混じり しまりあり)
 10. 灰茶土(砂混じり やや粘性あり)
 11. 灰褐土(砂混じり ややしまりあり 炭混じり)
 12. 灰褐砂土(粒子の細かい砂混じり)
 13. 暗灰土(炭片が多く混じる)
 14. 暗灰土(13層と比べ炭の混じりは少ない)
 15. 灰色土(砂混じり 炭混じり)
 16. 灰茶土(砂混じり やや粘性あり)
 17. 灰褐砂土(砂が多く混じる 炭混じり)
 18. 暗灰褐土(砂が多く混じる やや粘性あり)
 19. 灰褐砂土(しまりなし 砂混じり)
 20. 茶褐粘質土(灰褐土ブロック混じり 砂混じり 鉄分みられる)
 21. 淡黄褐砂土(地山土 ブロックの塊)
 22. 暗灰褐粘砂土(粘性あり ややグライ化した土 砂混じり)
 23. 黄灰褐粘砂土(ややグライ化した土 砂混じり 粘性あり)

24. 茶褐土(粘性ややあり 砂混じり)
 25. 灰褐土(砂混じり やや粘性あり)
 26. 灰茶褐土(砂混じり やや粘性あり)
 27. 暗灰粘質土(瓦が多く混じる 砂混じり 粘性あり)
 28. 黄灰色粘質土(粘性あり 砂混じり)
 29. 灰褐土(砂混じり しまりなし)
 30. 暗灰褐土(砂混じり 5mm大の炭粒混じり)
 31. 灰茶土(茶褐ブロック粘質土混じり 砂混じり)
 32. 灰褐土(茶褐ブロック混じり 砂混じり)
 33. 灰褐土(茶褐ブロック混じり 砂混じり)
 34. 暗灰褐土(やや粘性あり 瓦多く含む)
 35. 暗灰粘質土(砂混じり 炭粒混じり)
 36. 淡黄褐土ブロック(地山土ブロックのまとまり しまりあり)
 37. 淡茶褐粘質土(砂混じり 茶褐粘土ブロック混じり やや粘性あり)
 38. 茶褐粘質土(砂混じり 粘土ブロック混じり やや粘性あり)
 39. 暗灰褐土(砂混じり 炭粒多く混じる)
 40. 灰茶土(黄褐地山土ブロック混じり 1cm大の炭粒混じり 烧土粒混じり)
 41. 灰茶土(40層と比べ砂の混じりが多い やや粘性あり)
 42. 灰茶土(黄褐ブロック混じり 砂混じり しまりあり)
 43. 灰褐土(砂が多く混じる 粘土ブロック混じり)
 44. 灰茶砂土(粒子のやや粗めの砂が多く混じる しまりなし)
 45. 灰褐砂(灰色粘土ブロック混じり ほとんどが砂でしまりなし)
 1~23…SK160 24~28…SK155 29~38…SK165 39~41…SK145 42~45…SK170



第33図 SK145・SK155・SK160・SK165 遺構実測図 (1/40)



第 34 図 SK185 遺構実測図 (1/40)

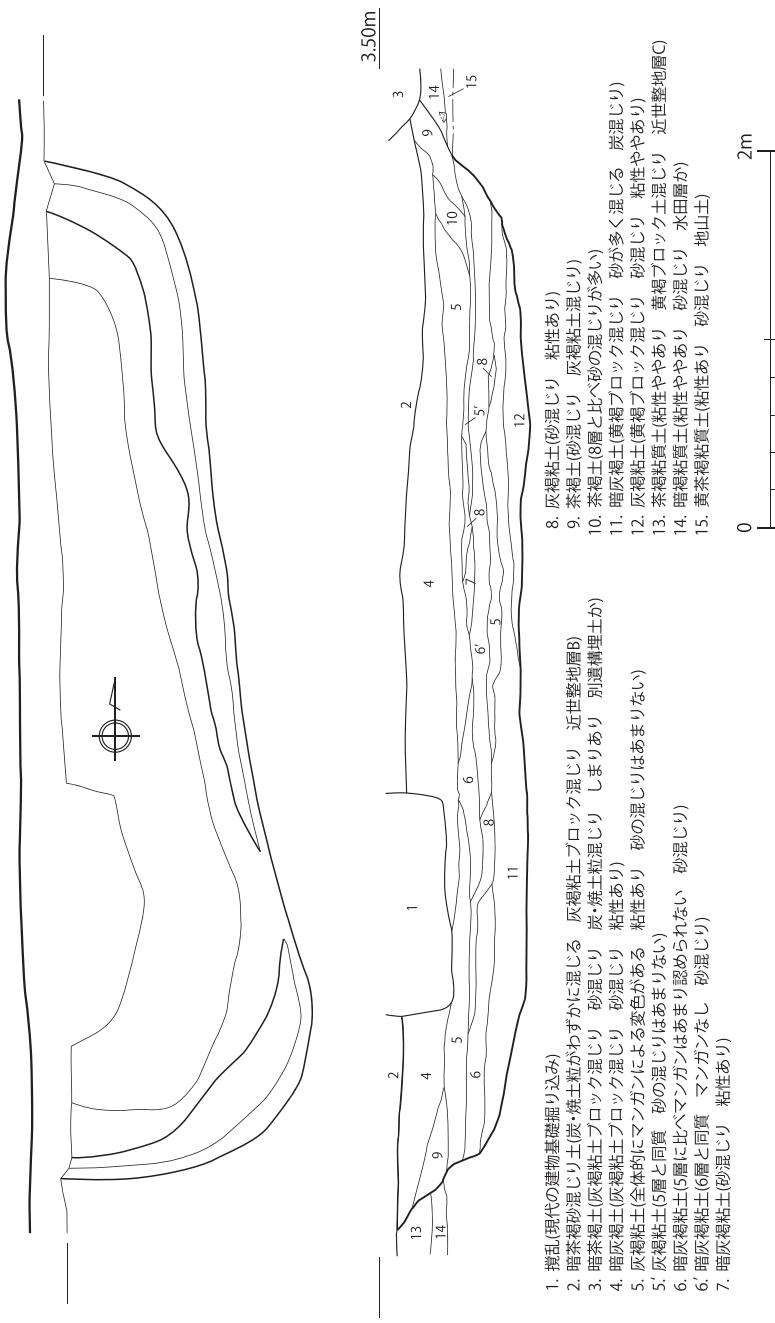
廃棄土坑として利用したと考えられる。第2面調査時の土層観察で上面から掘り込まれている事を確認しており、出土遺物(広東碗などV期前半)から18世紀末～19世紀初頭頃と考えられる。

SK160 (第33図)

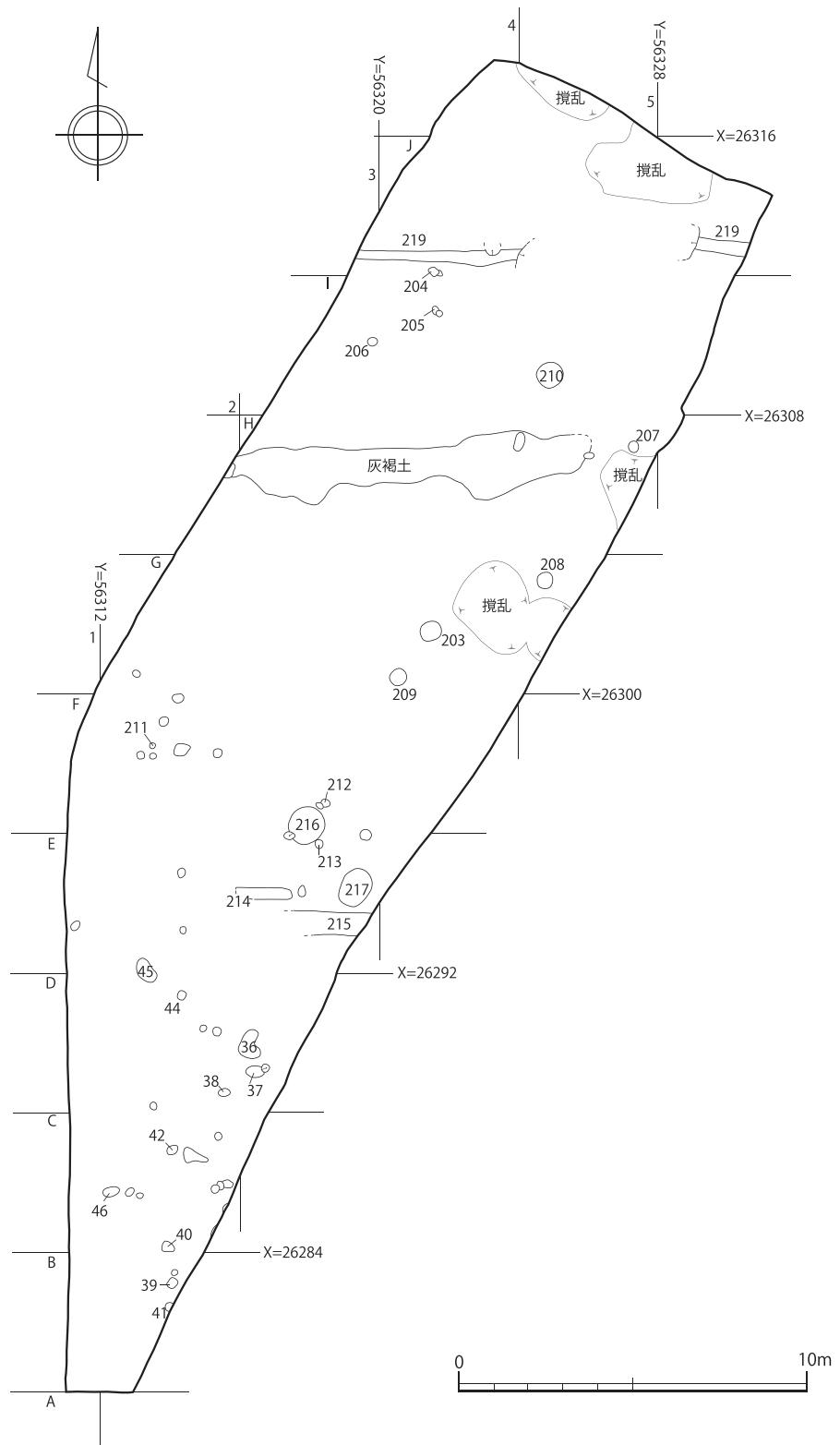
調査区北部の J5 グリッドで検出した。SK155・SK165 を切り、SK099 に切られる。長軸約 2.10m 以上、短軸約 1.50m の橢円形で、検出面からの最大深度は約 1.20m である。埋土は大きく上・下層に分けられる。下層(22～23層)には底にグライ化した粘砂土が水平に堆積しており、その上から人為的に埋め戻されたと考えられるブロック混じりの茶褐粘質土がある。上層(1～19層)には砂混埋め戻し後の地盤沈下を防ぐ目的があつ事を確認しており、出土遺物(端反碗な

調査区北部の J5 グ

検出面からの最大深度は約 1.15m である。遺物は主に下層からの出土が多く、多量の瓦が出土した事から廃棄土坑と考えられる。時期は出土遺物（外青磁碗・筒形碗などIV期後半）から 18 世紀後半頃と考えられる。



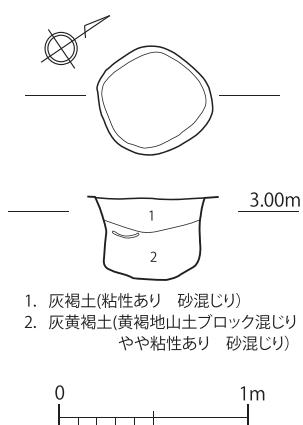
第 35 図 SX034 遺構実測図 (1/40)



第36図 第4面 遺構配置図(1/200)



第37図 第4面全体遺構図 (1/200)



第38図 SP203 遺構実測図(1/40)

SK185 (第34図)

調査区北部のI5・J5グリッドで検出した。SK100・SK190に切られる。長軸約1.60m、短軸約0.86mの隅丸長方形で、検出面からの最大深度は約0.62mである。埋土は大きく上層(1・2・3層)と下層(4・5層)に分けられるものの、遺物は上下層で差のある出方はしていないため一括で取り上げている。時期は出土遺物(初期伊万里皿などⅡ期)が古い様相を見せるが、第2面調査時の土層観察で上面から掘り込まれているのを確認している事や遺構の切り合い関係から18世紀後半～19世紀初頭頃と考えられる。

性格不明遺構**SX034 (第35図)**

調査区南部西端のC1・2、D1・2グリッドで検出した。掘方は長軸約5.30mの隅丸方形ないし隅丸長方形と考えられるが、規模につ

いては判然としない。検出面からの最大深度は約0.64mである。埋土は底からグライ化した粘土と砂混じり土が相互に堆積し、半分以上埋まった段階で暗灰褐土により人為的に埋め戻されている。埋没後に近世整地層Bに覆われている事から、17世紀～18世紀初頭頃と考えられる。

(4) 第4面 (第36図・第37図)

検出した遺構は、古墳～中世段階の溝状遺構、土坑、小穴である。遺構密度は低い。暗褐粘質土除去後に検出できた遺構で、自然堆積層に掘り込まれている。

溝状遺構**SD219 (第37図・第5図)**

調査区北部西端のJ3グリッドから東端のJ6グリッドにかけて検出した、東西方向に延びる溝状遺構である。中央部分が近世の土坑に切られている事や西側と東側とで若干主軸が異なるため別遺構の可能性も考えられたが、埋土や断面形状などが一致する事から一連の溝と判断した。西側は幅約0.30m、長さ約4.85m、検出面からの最大深度は約0.07mで、主軸方向W-1°-Nである。東側は幅約0.40m、長さ約1.50m、検出面からの最大深度は約0.12mで、主軸方向W-10°-Nである。断面形状は台形で、底部は比較的平坦でありレベル差もほとんどない。埋土は灰褐土の単一層で、流水などの痕跡は認められなかった。遺物が出土していない事から、時期は不明である。

小穴**SP203 (第38図)**

調査区中央部のG4グリッドで検出した。直径約0.60mの円形で、検出面からの最大深度は約0.50mである。周辺に同規模の小穴(SP208・SP209)が散見するが、掘立柱建物などの並びは想定できない。埋土中から古墳時代前期の土師器甕が出土した。

第3節 出土遺物の概要

今回の調査では、コンテナ 22 箱の遺物が出土した。出土遺物は古墳時代から 20 世紀代までの幅広い時期にわたっているが、主体となるのは光西寺に関係すると思われる 17 世紀から 19 世紀代のものである。今回掲載できていない遺物は数多くあるが、主要遺構の時期を示すものや特殊な遺物を中心に掲載・報告を行う。遺物の種類・名称・法量などについては遺物観察表にゆずり、ここでは特に重要と思われる遺物についてのみ記述する。

SX031 出土遺物（第 45 図）

1 は軟質施釉陶器の碗である。内外面ともに被熱を受け状態が良くないが、赤色系の素地に白釉が施されていると考えられる。半筒形で、高台は低く幅も狭い。7・8 は結桶の板材である。結桶は 16 枚の板材で構成されており、そのうちの 2 枚を図化している。桶には竹のタガが 3 条巻かれており、板材の表面にはタガ痕が残る。板材の両側面には直径約 0.4cm の穴に竹の棒が差し込まれ、隣り合う板材と連結しており、板材が解体しないための役割を果たしている。9 は丸太材である。長さ約 100cm、幅約 9.8cm である。出土時に樹皮は上部で残っていたが、取り上げ後と保管中に剥落した。材の下端は先端が尖るように切られており、上端は被熱を受け炭化している。

SK140 出土遺物（第 46 図）

22 は唐津焼の皿である。見込みに砂目積みの痕跡が認められる。23 は絵唐津の皿である。鉄釉により植物文様が描かれている。24 は焼塩壺である。底部の上に体部を積み上げ成形している事から、I 類と考えられる。25 は軒丸瓦である。瓦当は直径約 15cm に復元できる。巴文は反時計回りで、その尾部は離れている。珠文数は復元で 14 個を数える。文様の輪郭ははっきりとしている。26 は軒平瓦である。表面は磨滅し、文様もはっきりとはしていないが、吉田分類にない文様構成である。焼きがあまい。27 は軒平瓦である。表面は全体的に磨滅のため判然としないが、三葉の笹状文を中心飾りとする均整唐草文である。吉田分類 C 類の可能性がある。頸の貼り付け前に力キヤブリを施す。焼きがあまい。

SK185 出土遺物（第 47 図）

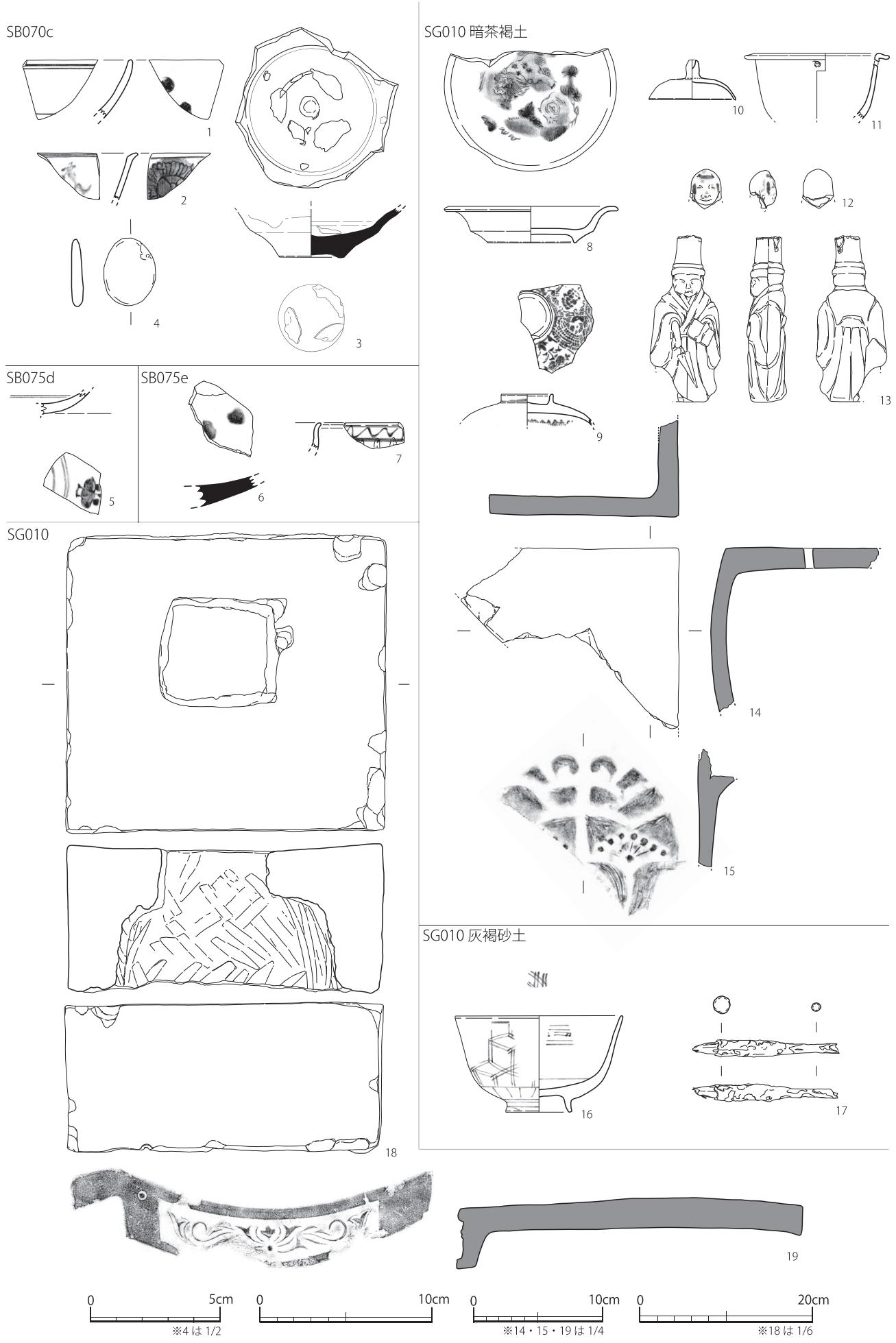
6 は肥前磁器碗である。7 は肥前染付皿である。1620～1640 年頃の製品で、初期伊万里である。植物と三日月が描かれている。高台は高い。8 は陶器の火入れである。外面施釉で内面・高台部は露胎である。福岡産であろうか。9 は唐津焼の皿である。見込み・高台に砂目積みの痕跡が認められる。

SK078 出土遺物（第 48 図）

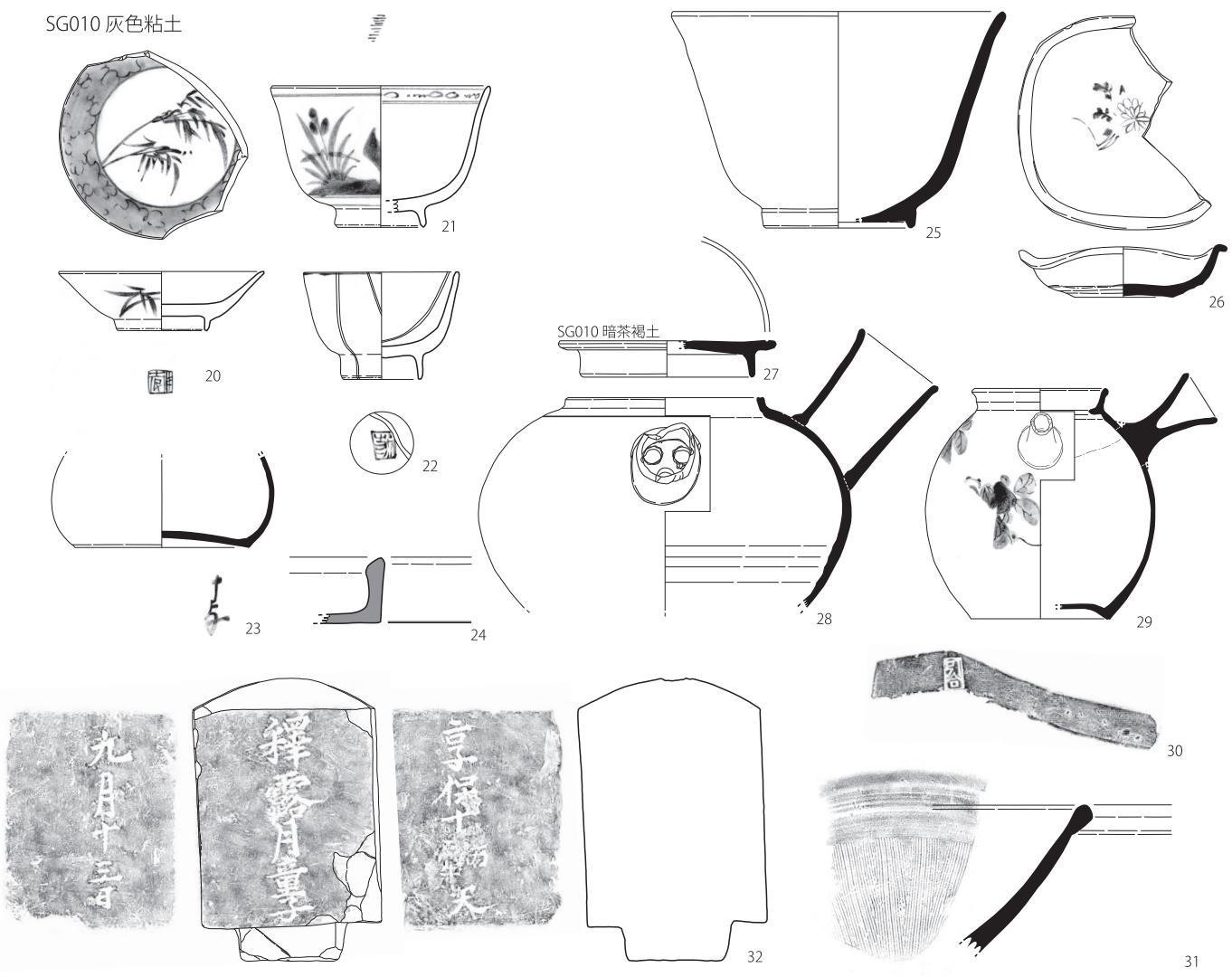
8 は銅製飾り金具と考えられる。木質部が残存しており、表面と側面には漆が塗られている。銅板には 0.1cm にも満たない丸紋様が表面に複数装飾されており、金メッキが施されている。銅板は木質部の表面に、銅製の鉢によって付けられている。

遺構間接合

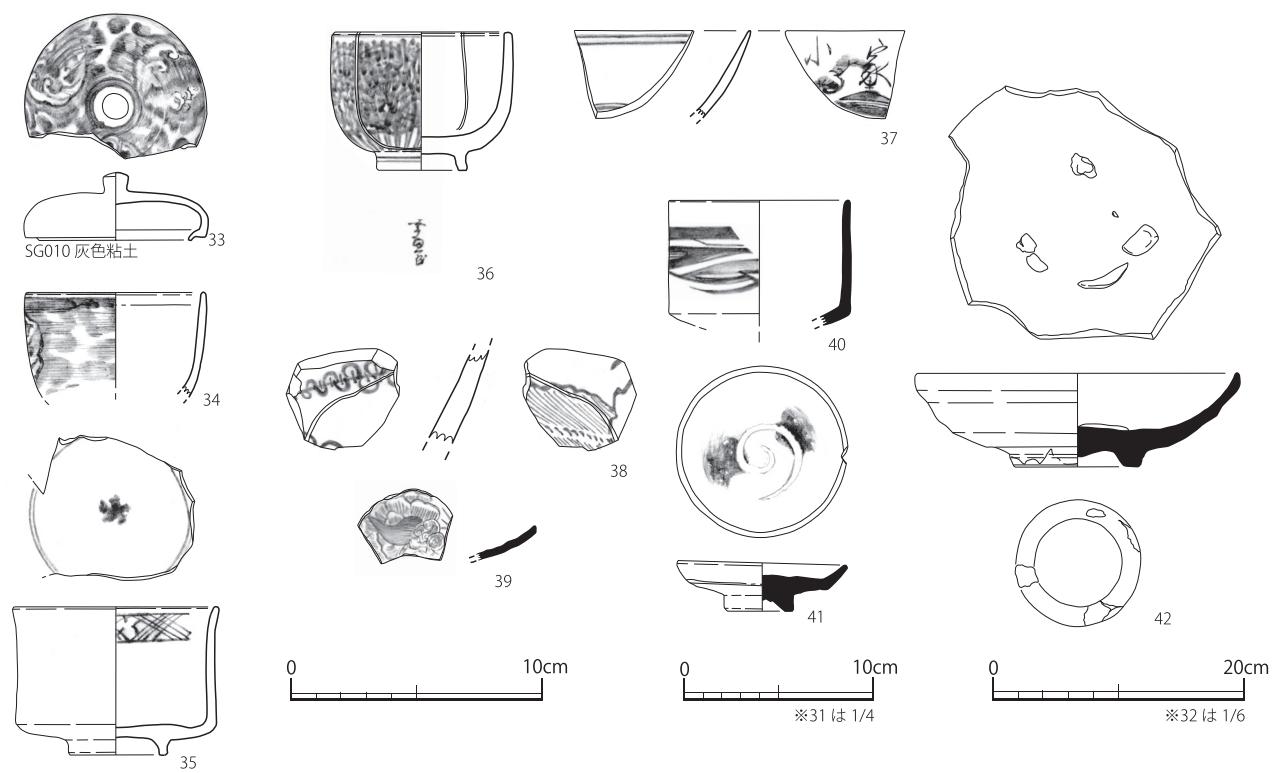
今回掲載した中で遺構間接合した遺物は 7 点である。切り合い関係のある遺構間での接合は第 44 図 6 (SK062・SK066)、第 47 図 7 (SK185・SK190)、第 48 図 11 (SK078・SK132) である。切り合い関係のない遺構間での接合は第 42 図 12・13・14 (SK099・SK100)、第 49 図 11 (SK107・SK115・SK125) である。SK099 と SK100 の遺物は掲載した 3 点以外にも複数の遺物の接合関係が認められている。上記以外の遺構間接合例は確認できなかった。



第39図 SB070・SB075・SG010出土遺物実測図(1/2・1/3・1/4・1/6)

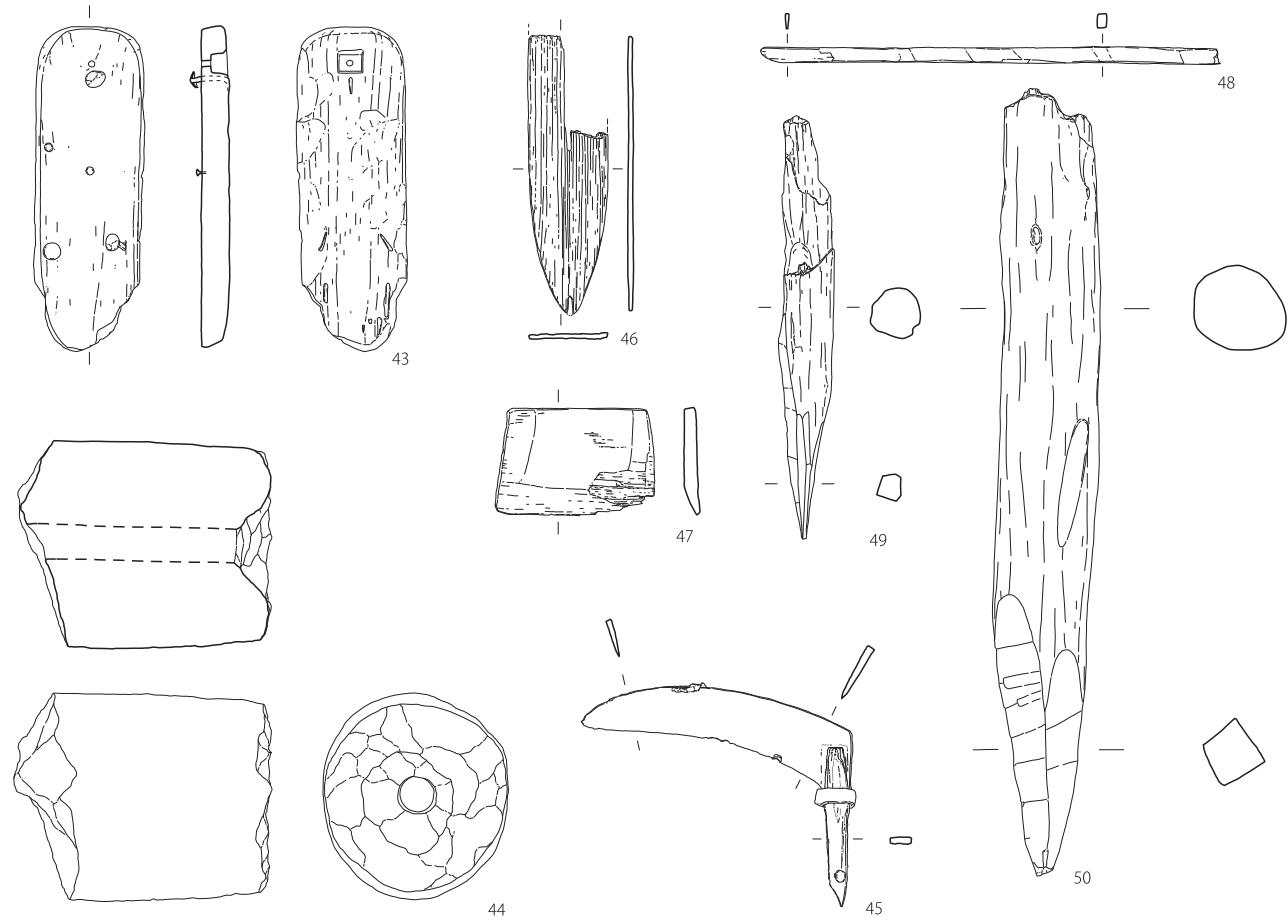


SG010 灰色グライ層

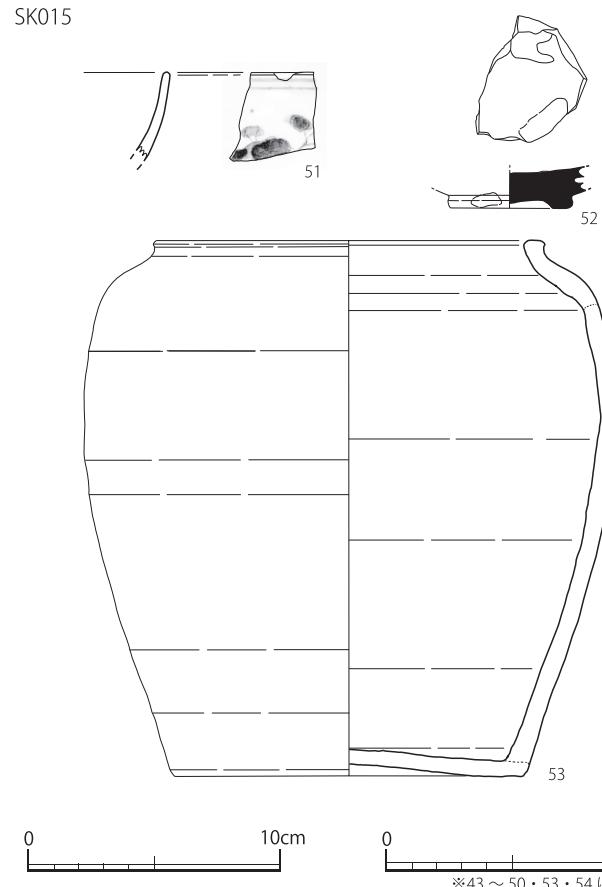


第40図 SG010出土遺物実測図(1/3・1/4・1/6)

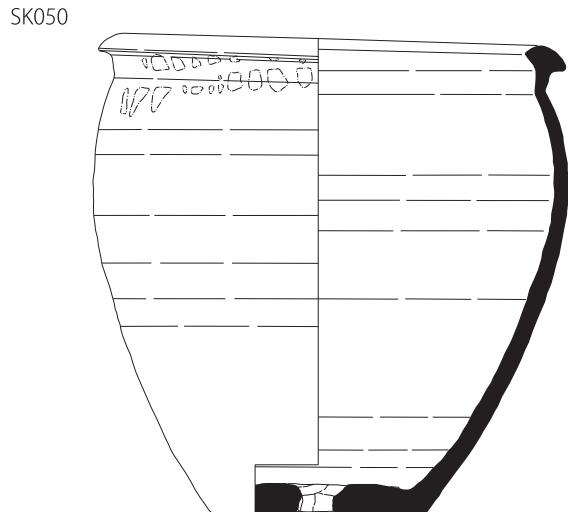
SG010 灰色グライ層



SK015



SK050



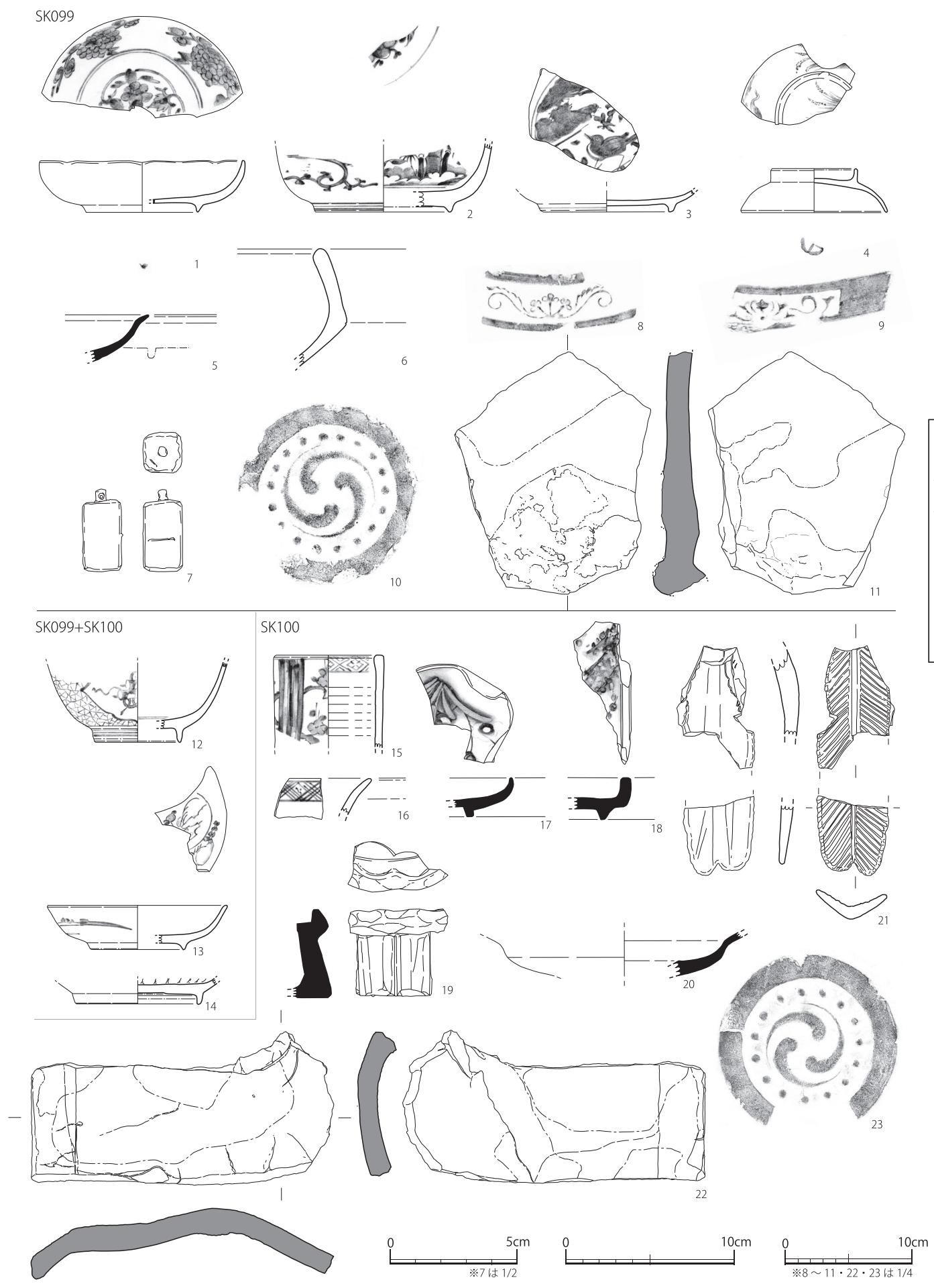
SK050 2層



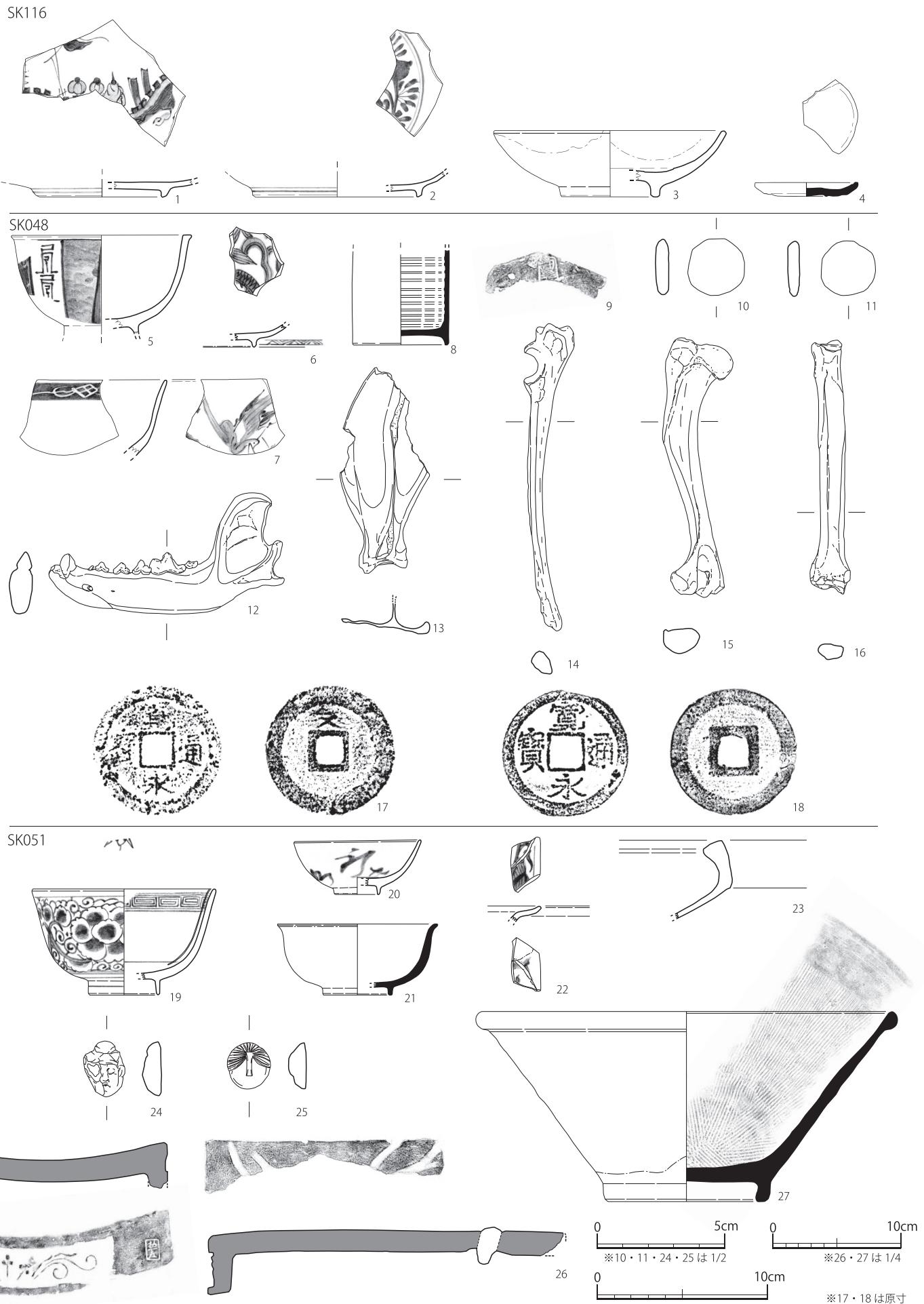
SK050 ウラゴメ



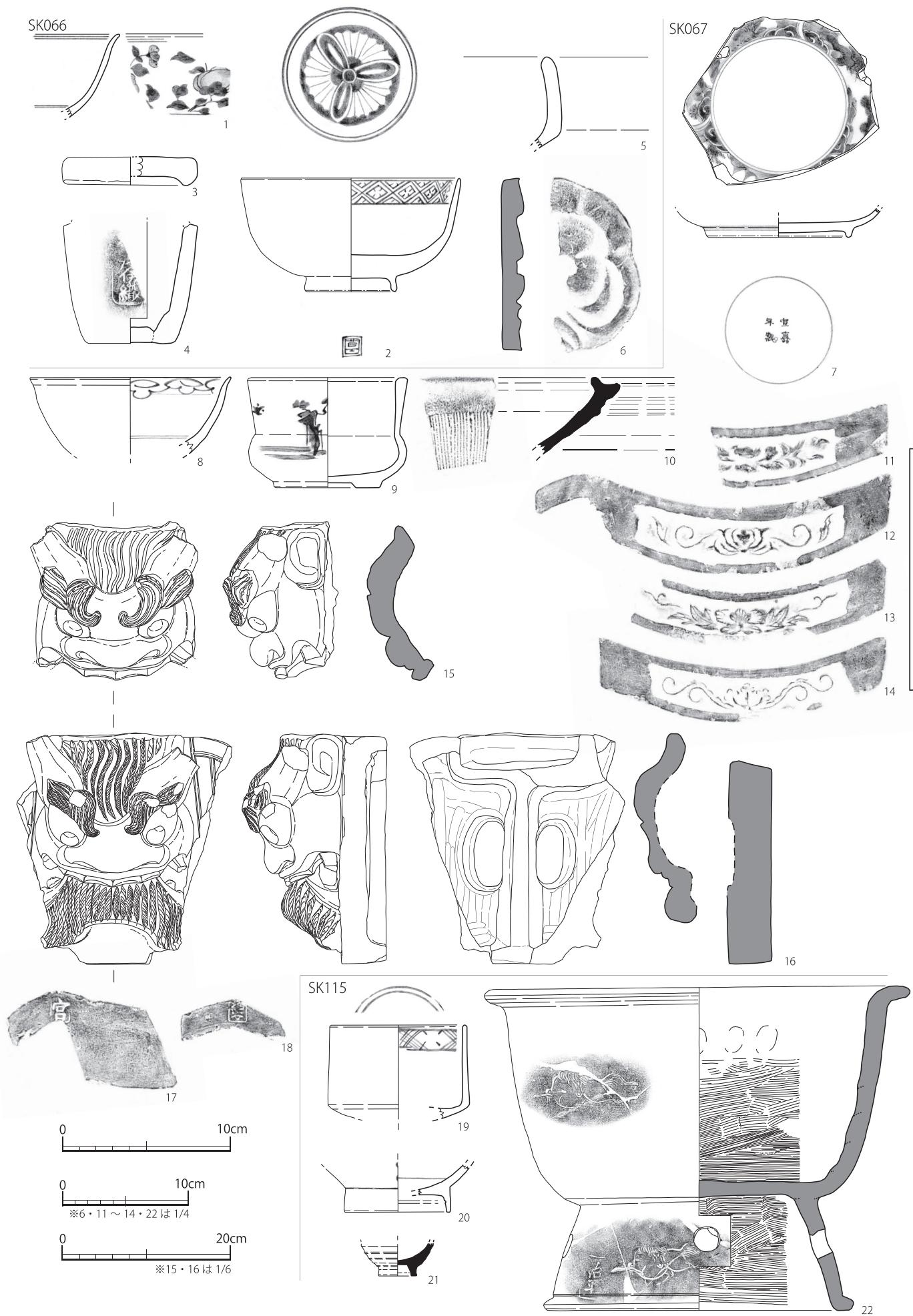
第41図 SG010・SK015・SK050 出土遺物実測図 (1/3・1/6)



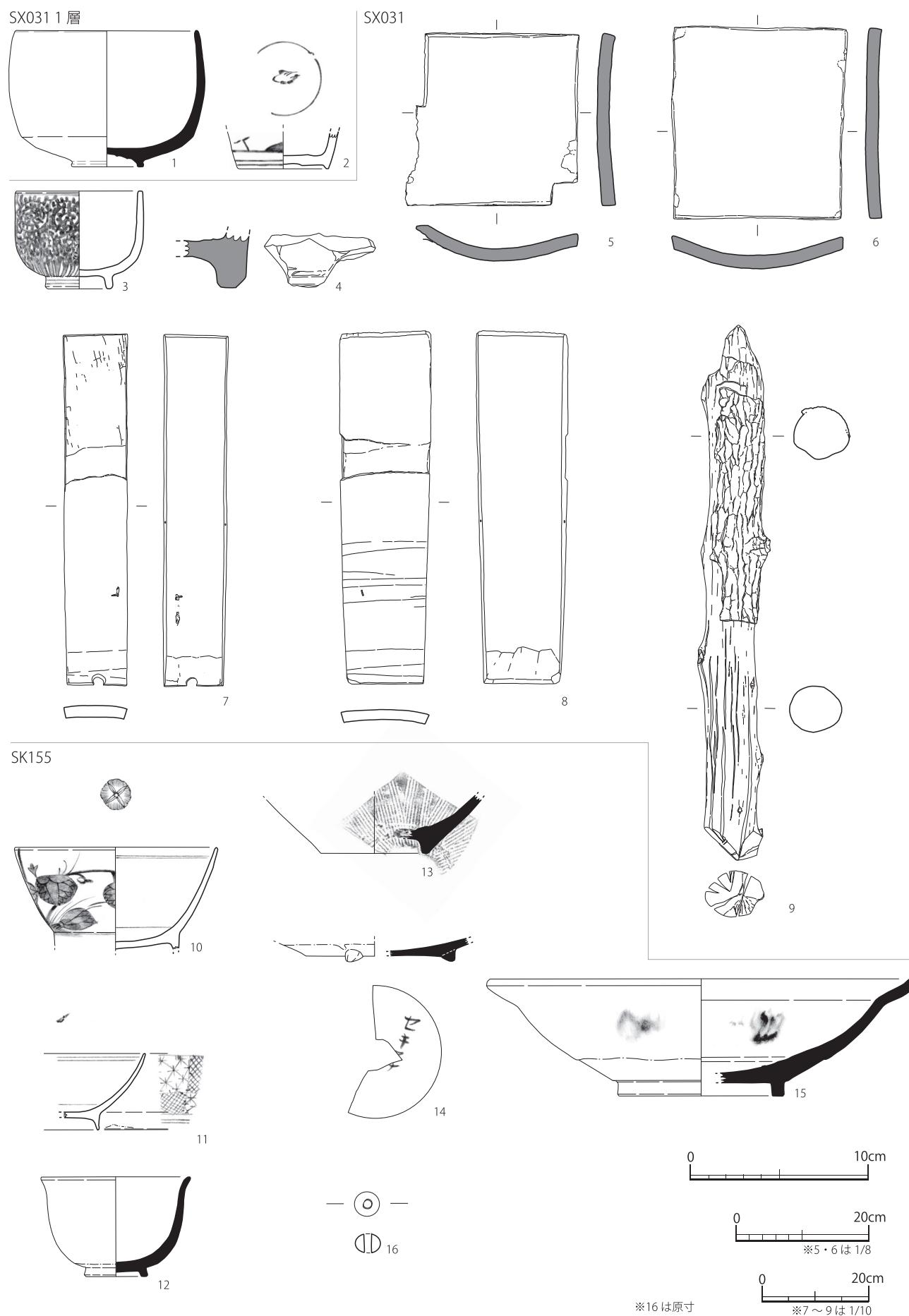
第42図 SK099・SK099+SK100・SK100出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4)



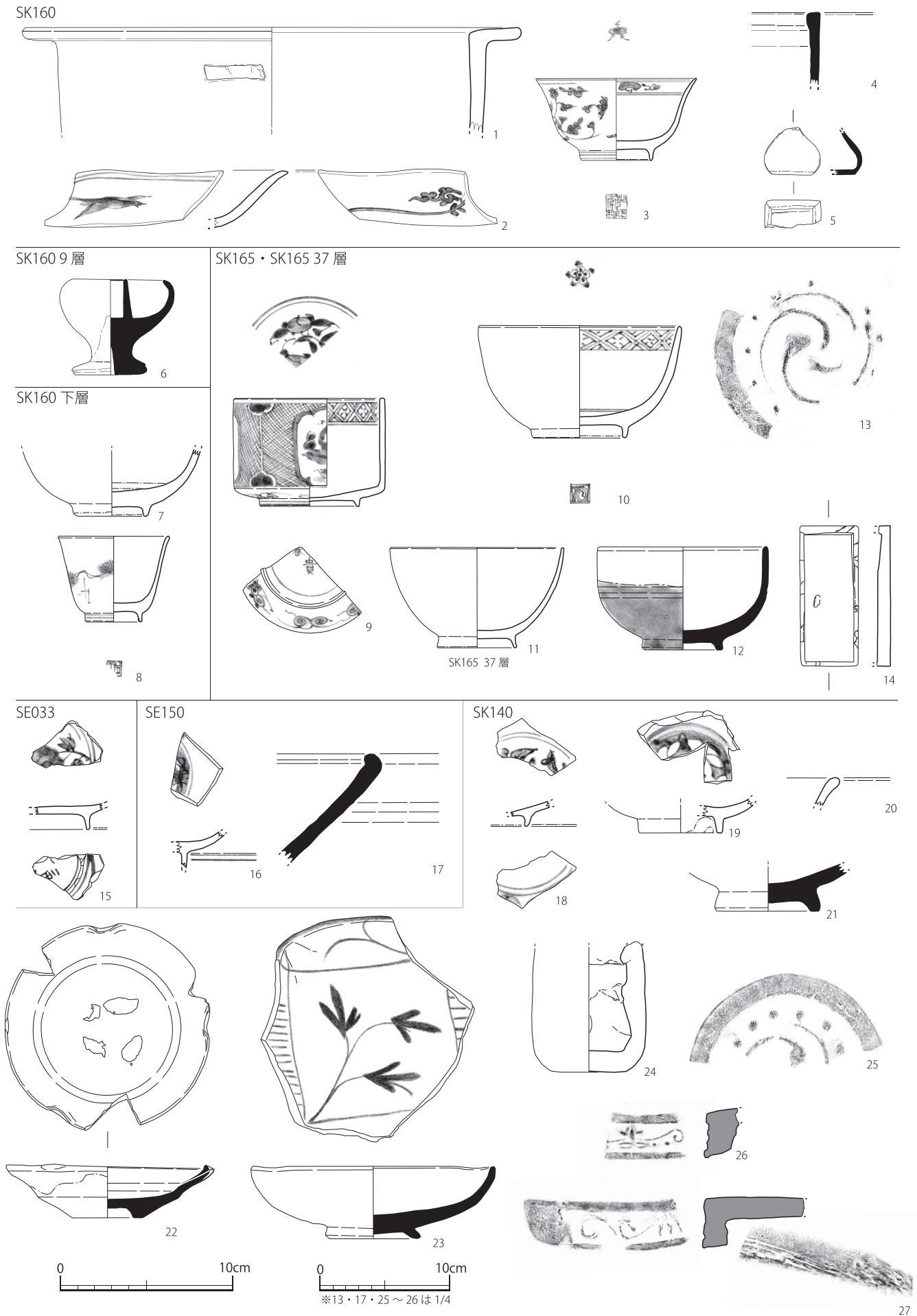
第43図 SK116・SK048・SK051出土遺物実測図(1/1・1/2・1/3・1/4)



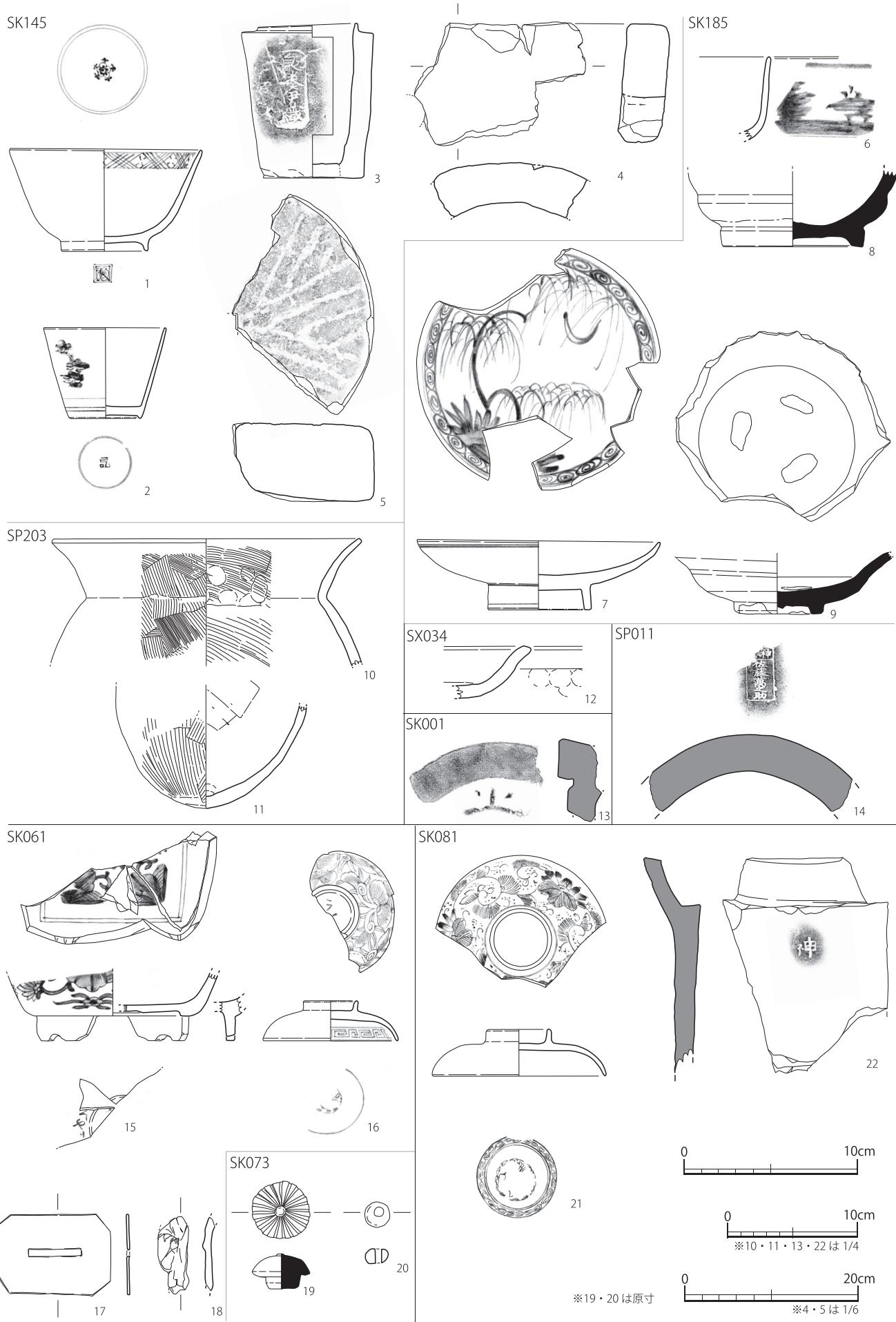
第44図 SK066・SK067・SK115出土遺物実測図(1/3・1/4・1/6)



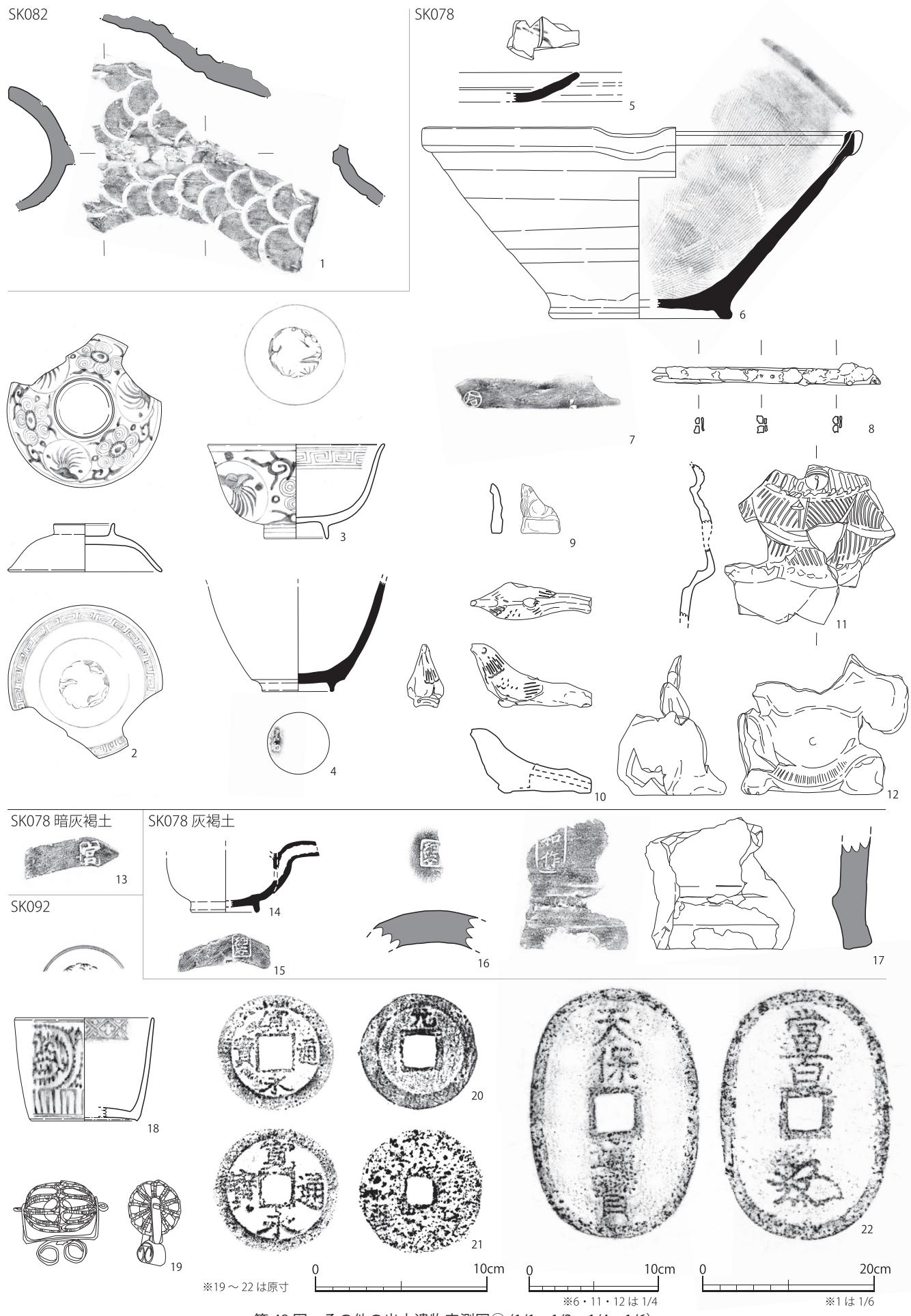
第45図 SX031・SK155出土遺物実測図 (1/1・1/3・1/8・1/10)



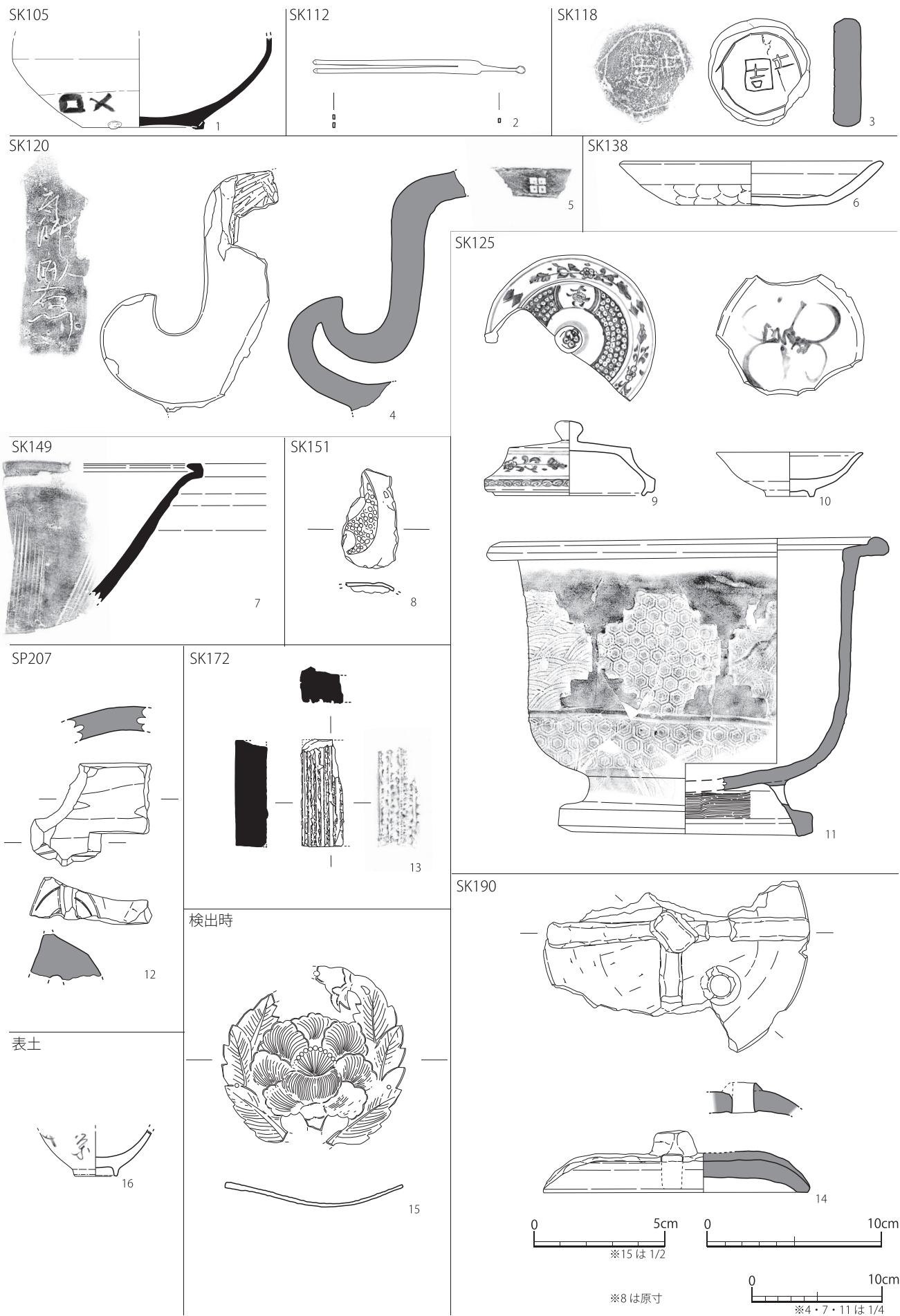
第46図 SE033・SE150・SK140・SK160・SK165出土遺物実測図(1/3・1/4)



第47図 SK145・SK185・SX034 その他の出土遺物実測図① (1/1・1/3・1/4・1/6)



第48図 その他の出土遺物実測図② (1/1・1/3・1/4・1/6)



第49図 その他の出土遺物実測図③ (1/1・1/2・1/3・1/4)

第IV章 総括

今回の調査は、江戸時代の府内城・城下町跡における光西寺敷地内で行った。結果、近代の遺構面を1面、近世の遺構面を2面、古墳時代～中世の遺構面を1面の、大きく4面の遺構面を確認し、①18世紀後半から19世紀中頃までの礎石建物跡、及び近代の建物へと続く石畳状遺構を確認、②建物の南側には池状遺構、建物の傍に水琴窟と思われる埋甕遺構などの庭園関連遺構等を確認、③17世紀初頭～19世紀の廃棄土坑や、18世紀～19世紀の井戸などの生活関連遺構、及び19世紀前半の火災処理土坑などを確認するという成果を得る事ができた。ここでは遺構の変遷及び光西寺における建物と庭園の配置について発掘調査成果を基に検討していきたい。

(1) 遺構の変遷

まず層位及び切り合い関係、出土遺物の様相から推測される遺構の変遷についてまとめる。

【Ⅰ期：古墳～中世】

最下面で検出した遺構で、暗褐粘質土に覆われ、自然堆積層である黄茶褐粘質土を掘り込む遺構群である。北区のSD219、SP203が該当する。遺構密度はかなり低く、遺物もあまり出土していないが、SP203からは古墳時代前期の土師器が出土している。この遺物は、破片が大きく、磨滅もあまり受けていないため、自然流路などで流されてきたものではないと考えられる。調査区から南東約500mに位置する大道遺跡群では、古墳時代前期の遺構・遺物が多量に確認されており、集落が展開していたと考えられている。大道遺跡群と距離的に近接し、同時期であるため、大道遺跡群との関連が考えられる。ただ遺構密度が高くはないため、集落そのものが広がっていたわけではなく、あくまでも古墳時代前期の生活圏が当地にまで及んでいたという事であろう。

またSD219については、遺物が出土していないため時期が不明であるが、埋土が直上の暗褐粘質土と非常に似通っている。暗褐粘質土は一部に畦畔状の高まりを有し、水田耕作土の可能性が考えられる堆積層である。暗褐粘質土からは土師器の破片が出土しているが、細片であり、磨滅が著しいなど暗褐粘質土の時期を示すものは判断し難い。そのため、共に時期は不明であるが、SD219は水田耕作に関わる排水などのための溝である可能性が考えられる。

【Ⅱ期：17世紀～18世紀初頭】

第3面目で検出した遺構で、最初期の近世整地層をベース層とする遺構群である。北区のSB220、SK140、南区のSX034、SE033が該当する。上位の遺構に切られているため、この時期と認定できる遺構は少ない。しかし、SK140は出土遺物が砂目積みの唐津焼皿や絵唐津、初期伊万里であるなど17世紀初頭と限られており、近世段階では最初期の時期に比定される遺構である。中でも、吉田氏が報告書の中で編年された軒平瓦の中でC類としたタイプ(吉田1993・吉田2003)よりも一段階古いタイプのC類と思われる府内城系の軒平瓦(図46-27)が出土している^(註1)。光西寺が中世府内町から移転してきたのは、城下町完成後の1602年前後であると考えられる事から、SK140出土遺物は、城下町移転後の最初期の遺物群である。

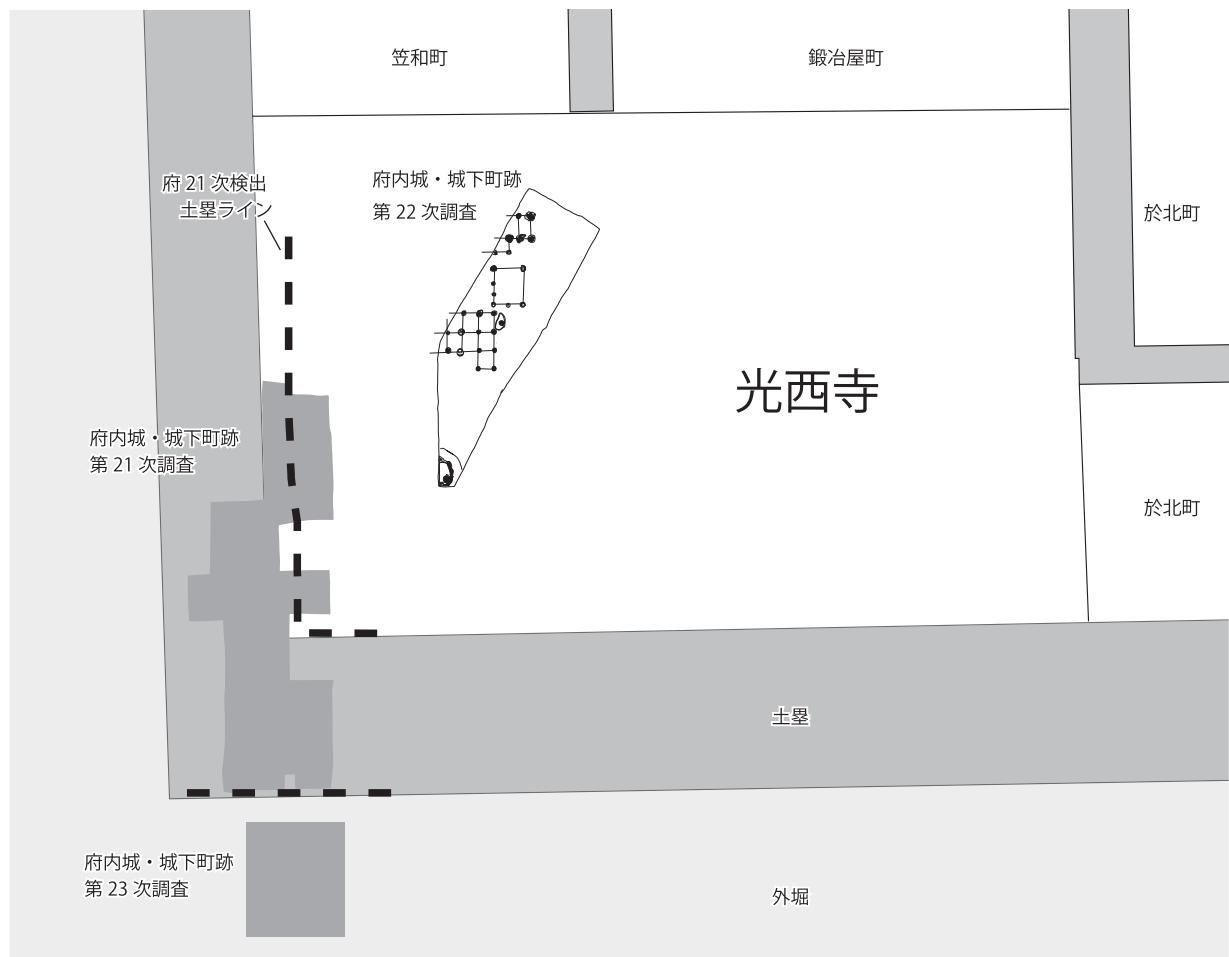
【Ⅲ期：18世紀代】

北端でSK145、SK155、SK160、SK165などの廃棄土坑や火災処理土坑であるSK116が、中央東端でSB218が展開し、南端では池状遺構SG010の古段階が形成される時期である。基本的に第2面で検出した遺構のうち、出土遺物の様相から、この時期を設定している。SK145、SK155、SK160、SK165、SK185については、調査の都合上第3面で検出したものの、他遺構掘削後の遺構の壁などで第2面から掘り込む遺構である事を確認しており、本来は第2面に該当する遺構である。またSB218は大きくは第2面であり、実際礎石跡の一部であるSB218cは他の遺構と同様に検出しているが、SB218a・bについては一部整地層を掘り下げた段階で検出してい

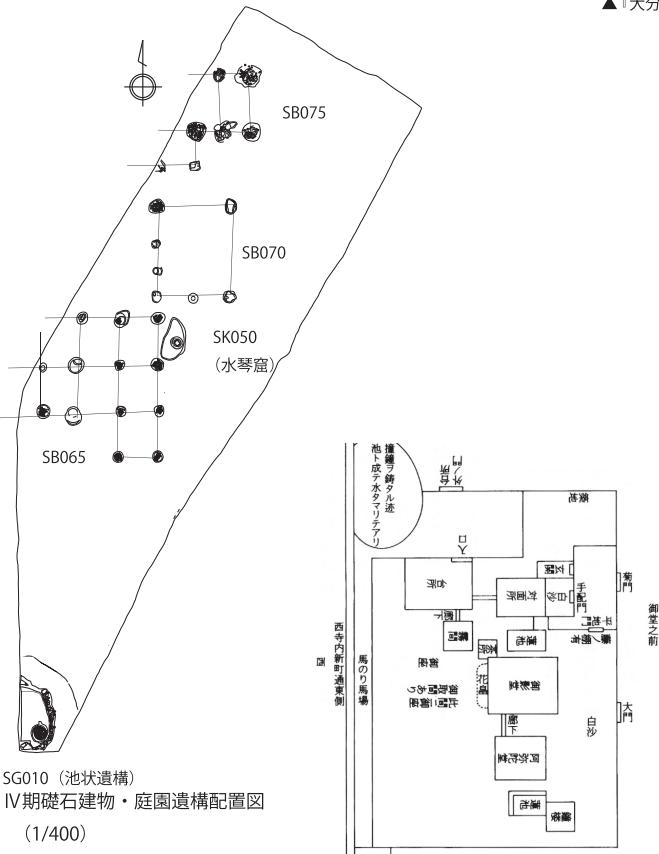


第 50 図 遺構変遷図

る。調査区西壁の土層観察では、礎石建物部分の土層に細かい整地が施されている事が見て取れる。SB218はそういう細かい整地に覆われていたものと思われ、IV期とした礎石建物群よりも一段階古いこの時期に設定した。同時にIV期の礎石建物群の下位に廃棄土坑などの大型遺構がない事から考えると、検出はしていないもののSB065、SB070、SB075と同様の位置に前身の建物が存在していた可能性は高い。

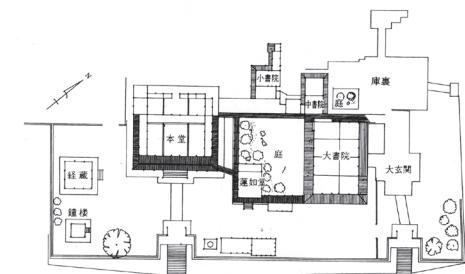


▲『大分市史』中巻付図IV「府内城下の復原図」を元に一部改変し作成 (1/1000)

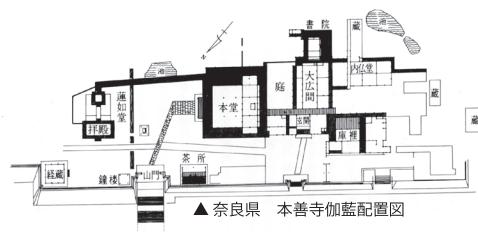


SG010 (池状遺構)
IV期礎石建物・庭園遺構配置図
(1/400)

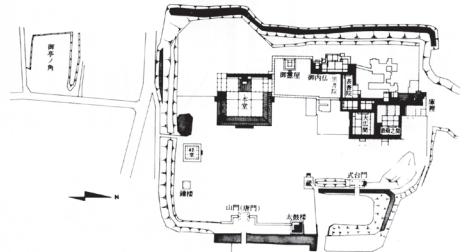
▲東本願寺伽藍配置
慶長度境内図 東本願寺周辺町図より抄出



▲奈良県 願行寺伽藍配置図



▲奈良県 本善寺伽藍配置図



▲富山県 勝興寺伽藍配置図

第 51 図 光西寺伽藍配置復原図及び真宗寺院伽藍配置図

【IV期：19世紀初頭～19世紀中頃】

北区西寄りで、SB065、SB070、SB075の建物群が展開しており、SB065に隣接して水琴窟と考えられる埋甕遺構のSK050が位置している。また建物と重複しない場所には、SK099、SK100の火災処理土坑やSK066、SK067、SK051の瓦が大量に廃棄された廃棄土坑が広がり、南端ではⅢ期と同じくSG010の新段階が引き続き形成されている時期である。

火災処理土坑であるSK099とSK100は切り合い関係を持たないが遺物の接合関係にあり、また18世紀末～19世紀初頭と同時期に比定されるため、単一の火災による片づけのための土坑である。この時期の火災として挙げられるのは、明和八年(1771)や文化七年(1810)などの火災で、共に下柳町という比較的近接地からの出火である。空襲による焼失の影響あまり多くの文献が残っていないため、実際に火災による被害がどの程度まで及んでいたのかについては詳しくはないが、光西寺に伝わる「年代記」には明和八年の火災で寺内寺である常念寺が焼けたとの記述がある事から、光西寺内にまで火災の影響があった事は確実である。

建物については、Ⅲ期でも述べたように、このIV期に位置付けられる礎石建物群の下位には空閑地が広がっている。またⅡ期には掘立柱建物ではあるがSB220が建っている。他の大型遺構が近世期の全体を通してほとんどこの位置には形成されておらず、空閑地がひろがっている事から考えると、おそらく近世期を通して建物が展開する空間であった可能性が高い。その場合、建物が建つ空間と、それ以外の廃棄土坑、井戸などの生活遺構が展開する空間が、時期による多少の変動はあるものの空間配置としてはある程度分かれており、土地利用の状況に差があったと考えられる。

【V期：明治～昭和戦前】

第1面の北端でのみ検出した遺構で、東西方向の石畳状遺構SF055とそれに並行する石列SF060が位置し、その西側にSX097を根締石とする礎石の建物が展開する。近世末期の遺構群を覆う整地層をベースとして構築されている遺構で、IV期の礎石建物群が廃絶したのち整地を行い、新たに建物を建てており、その際に前代になかった石畳を新たに付け加えたと考えられる。最終的には太平洋戦争時の空襲後に片づけられた焼土層に覆われる。調査の都合上近世期の調査を優先させたため、この時期の遺構は北端のみで、それ以外については機械掘削によって掘り下げている。そのためV期の全体的な様相については不明な点も多いが、一部検出した礎石跡がIV期の建物と同様の位置にある事から、IV期と同様V期も建物が広がっていたと思われる。また池状遺構SG010もこの時期まで使用され、明治初期頃に多種多様な陶磁器、石製品とともに埋められ廃絶したものと考えられる。

(2) 建物と庭園の配置

これまで遺構の記述や変遷で見てきたように、建物の位置と生活痕跡である廃棄土坑の位置にある程度の区分が見られる。ここでは、建物を一番多く検出したIV期を対象として、光西寺内における建物配置と敷地利用について考えてみたい。

今回の調査では、礎石建物群と、建物の傍に位置する水琴窟と考えられる埋甕遺構、建物の南側には池状遺構が展開している事が判明した。光西寺は、やや東西方向に長い敷地をしており、近世期には東側に表門を有し、東側を正面とする建物配置であったと考えられている。『大分市史』における「府内城下の復原図」との照合では、すぐ西側に府内城の土塁及び外堀が位置している。この土塁は府内城・城下町跡第21次調査において、復原図での想定ラインよりやや東側で検出しているため、東西方向のズレは見られる。ただ、南北方向は一致しており、あまり大きな齟齬ではない。そのため、今回検出した建物群及び池状遺構を含む庭園遺構については、推定境内範囲の西側やや北寄り、ほぼ光西寺敷地の一番奥に位置していると言える。

次に建物の性格について見ていくと、まずその機能として考えられるのが、本堂、庫裡などである。しかし建物であるSB065を詳細に見ていくと、建物の南北方向の1間の距離と、東西方向の1間の距離に違いがある事が見受けられる。つまりは、南北方向は1間につき約2.5mなのにに対し、東西方向は1間につき約2.0mである。

これを当時の尺で示すならば、南北方向が概ね7尺で、東西方向が概ね6尺5寸と明らかな違いがある。この尺の違いは通常の建築物において使われる事はあまりないと考えられ^(註2)、庫裡などの日常的な建物ではないと考えられる。また、SB065のすぐそばに水琴窟と考えられる埋甃遺構が存在している事からすると、信仰の場である本堂のすぐそばに水琴窟があるとは考えられないため、本堂とも考えにくい。

ここで、他の真宗寺院における空間配置について見てみると、本堂、庫裡以外の建物として、本堂や庫裡の傍に大広間や対面所といった建物が配置されている事が挙げられる。また他の真宗寺院では、本堂と庫裡・大広間・対面所の間に庭が広がっており、池をもつ寺院も見受けられる。上述したように、光西寺では空襲の影響もあり、あまり文献・絵図の類が残っておらず、当時の建物配置などは詳しくはわかっていない。ただ、明治時代前期に作成された「豊後国大分郡寺院明細牒」には、作成時に建っていた建物の種類について、本堂、庫裡の他、客室や茶所といった建物があったとの記述がある。これが近世期にまで遡るかどうかは調査結果からも疑問であるが、少なくとも本堂、庫裡以外の建物が建っていた可能性が高い事がわかる。

以上の事を調査結果に当てはめると、検出したIV期の建物群は、大広間や対面所、もしくは客室や茶所といった対外的な施設であったと考えられる。仮にそうだとするならば、建物SB065の傍に水琴窟があり、約10m南に池が広がるという景観は、対外的に客を迎える施設としてふさわしい景観と言えるであろう。

少々蛇足ではあるが、このIV期にあたる19世紀は、府内城・城下町跡第12次調査出土の「光さ□寺」焼継文字入り禁裏御用品と同時期であり、検出した建物群は禁裏御用品の使用も想定される建物である。この禁裏御用品は、16世住職円珠の夫人に白川大納言娘久姫、17世住職円琛の夫人に京都の公家大炊御門娘が嫁いでおり、どちらかの腰入れの際に持ち込まれたものと考えられているが、どちらにせよ公家とのつながりを示す遺物といえる。また「府内藩記録」によれば、近世期を通して光西寺は、江戸幕府が諸国の政情、民情を探るために派遣する巡見使の宿泊先や、本山である東本願寺からの使僧の宿泊先となっており、そういった客を迎える事が多かったと考えられる。そのため、公家とのつながりも含めて考えると、ある程度の格式をもつ対外的な客に対する施設があったはずであり、今回検出した建物群がその一部に当たる可能性は考えられる。

(3)まとめ

調査では、江戸時代の光西寺敷地内を調査し、寺院関連の建物群及び庭園遺構を検出する事ができた。現在の光西寺は太平洋戦争時の空襲やその後の都市開発の影響によって、当時とはその敷地範囲や建物位置などが様変わりしている。また近世期の光西寺敷地内を描いた絵図が存在していない事から、当時の内部の様相について詳しい事はわかっていないかった。そのため、敷地の一部とはいえその内部の空間的配置や伽藍配置についてわずかながらもその一端にふれる事ができたという事は、大きな意義である。

光西寺は、江戸時代、府内城の中で最も大きな寺院の一つであり、境内内の施設も多かった。また府内城の南西隅という重要な個所に位置しており、宗教的な意味合いも強く、その檀家数も多い。そういう府内城において重要な位置を占めていた寺院であるため、『光西寺史』の発行など光西寺の歴史をまとめる作業が行われてきたが、もっぱら文献によるものであり、これまで考古学的な調査が行われた事はなく、近世期の状況について不明な点も多かった。今回の成果は、より具体的な光西寺の歴史の解明にむけた一助となろう。

(註1) 吉田氏（大分県教育庁埋蔵文化財センター）に御教示を頂いた。

(註2) 玉井先生（国立歴史民俗博物館）には、東西方向と南北方向で1間の距離に違いが見られる事から、庫裡などの日常的な建物などではないのではないかという御教示を頂いた。

【参考・引用文献】

追川吉生 2004『江戸のミクロコスモス 加賀藩江戸屋敷』遺跡を学ぶ011 新泉社
櫻井敏雄 1997『浄土真宗寺院の建築史的研究』法政大学出版局
吉田寛 1993『府内城三ノ丸遺跡出土の瓦の分類と編年』『府内城三ノ丸遺跡－大分県共同庁舎（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』大分県教育委員会
吉田寛 2003『近世府内城・近世府内城下町跡出土瓦の編年の研究』『山口大学考古学論集 近藤喬一先生退官記念論文集』近藤喬一先生退官記念事業会
江戸遺跡研究会編 2001『図説江戸考古学研究事典』柏書房
真宗大谷派四極山 光西寺 2006『光西寺史』
龍居庭園研究所編 1990『水琴窟の話 一水滴の余情を庭に楽しむ－』ガーデンライブラリー① 建築資料研究社

第1表 遺物観察表1

挿図番号	遺構番号	種別	器種	産地	法量(cm)			重量(g)	備考	R番号
					口径	器高	底径			
第39図-01	SB070c	磁器	染付碗	肥前	-	3.4+α	-		丸碗 全体に被熱あり	R-01
第39図-02	SB070c	磁器	染付小杯	肥前	-	2.8+α	-			R-02
第39図-03	SB070c	国産陶器	皿	唐津	-	2.7+α	4.0		見込み・高台に砂目痕あり	R-03
第39図-04	SB070c	石製品	碁石		長2.6	幅2.0	厚0.45			R-04
第39図-05	SB075d	磁器	染付碗	肥前	-	1.3+α	-		丸碗	R-01
第39図-06	SB075e	国産陶器	皿	唐津	-	1.7+α	-		絵唐津	R-01
第39図-07	SB075e	磁器	染付碗	肥前	-	1.5+α	-			R-02
第39図-08	SG010暗茶褐土	磁器	染付皿	瀬戸・美濃	10.1	2.1	5.1			R-04
第39図-09	SG010暗茶褐土	磁器	染付蓋		-	1.8+α	(3.0)		型紙刷り	R-03
第39図-10	SG010暗茶褐土	土師器	蓋		(5.0)	2.3	摘要(0.8)		白色	R-01
第39図-11	SG010暗茶褐土	土師器	ミニチュア植木鉢		(8.4)	3.8+α	-		穿孔あり	R-02
第39図-12	SG010暗茶褐土	土製品	土人形(頭部)		長2.3+α	幅1.8+α	厚1.5+α		彩色	R-05
第39図-13	SG010暗茶褐土	ガラス製品	ニッキ水か		長9.6	幅4.0	厚2.2			R-08
第39図-14	SG010暗茶褐土	瓦質土器	不明		長16.8+α	幅14.0+α	厚2.1		穿孔あり(1箇所) 表面全体的に剥離著しい	R-07
第39図-15	SG010暗茶褐土	瓦	軒丸瓦		-	幅13.5+α	厚2.8+α		杏葉紋	R-06
第39図-16	SG010灰褐砂土	磁器	染付碗	肥前	(9.8)	5.6	3.8		端反碗	R-01
第39図-17	SG010灰褐砂土	銅製品	煙管		長8.5+α	幅1.0	厚1.0	6.7	木質部が残る 吸口	R-02
第39図-18	SG010	石製品	墓石台石		長34.5	幅37.0	厚17.0		内面に加工痕(ノミ痕)残る	R-07
第39図-19	SG010	瓦	軒棟瓦		長26.6	幅4.6	厚2.2		吉田分類F-1類 刻印「〇」	R-01
第40図-20	SG010灰色粘土	磁器	小皿(色絵)	肥前	(9.0)	2.6	3.9		色絵付	R-01
第40図-21	SG010灰色粘土	磁器	染付碗	肥前	(9.7)	6.2	(3.8)		端反碗	R-02
第40図-22	SG010灰色粘土	磁器	碗	肥前	(6.8)	4.7	(3.4)		完形 烧継あり 瑠璃釉	R-10
第40図-23	SG010灰色粘土	国産陶器	瓶(徳利)	瀬戸・美濃か	-	4.0+α	7.6		明茶色の釉(褐釉か)が全体にかかっている 墨書「申与」	R-04
第40図-24	SG010灰色粘土	瓦質土器	焰焰		-	2.9	-			R-06
第40図-25	SG010灰色粘土	国産陶器	鉢	砥平焼	(14.6)	9.5	(6.4)		被熱により釉の剥離が著しい	R-05
第40図-26	SG010灰色粘土	国産陶器	皿	関西系か	9.2	2.3	4.3		SG010灰褐砂土との接合品 被熱し施釉部分が炭化	R-03
第40図-27	SG010暗茶褐土	国産陶器	蓋		(7.7)	1.6	(9.6)		SG010灰色粘土R-11の急須の蓋	R-09
第40図-28	SG010灰色粘土	国産陶器	急須		8.5	9.3+α	-		持ち手・注ぎ口上部に装飾目的と思われる貼り付けあり SG010暗茶褐土R-09が蓋	R-11
第40図-29	SG010灰色粘土	国産陶器	急須	福岡産か	6.0	10.1	6.1		穿孔部に持ち手を取り付け釉で接合	R-12
第40図-30	SG010灰色粘土	瓦	棟瓦		長12.0+α	幅12.8	厚1.7		刻印「引合」	R-09
第40図-31	SG010灰色粘土	国産陶器	擂鉢	肥前	-	8.6	-			R-07
第40図-32	SG010	石製品	墓石		長24.8	幅16.0	厚14.0		凝灰岩 「釈露月童子」「享保十一丙牛天」「九月十三日」 SG010新段階護岸	R-08
第40図-33	SG010灰色粘土	磁器	染付蓋	肥前	6.0	2.7	-		表面の釉が削れています SG010灰色グライ層R-01の蓋	R-08
第40図-34	SG010灰色グライ層	磁器	染付碗	肥前	(7.2)	4.2+α	-		SG010灰色粘土 R-08が蓋 表面の釉が削れています	R-01
第40図-35	SG010灰色グライ層	磁器	染付碗		(8.2)	5.9	4.0		筒形碗 外青磁	R-04
第40図-36	SG010灰色グライ層	磁器	染付碗	肥前	7.2	5.5	3.6		完形 烧継・焼継文字あり「雲恵殿」	R-02
第40図-37	SG010灰色グライ層	磁器	染付碗		-	3.5+α	-		「小家」	R-03
第40図-38	SG010灰色グライ層	磁器	染付鉢	肥前	-	4.1+α	-		焼継あり	R-05
第40図-39	SG010灰色グライ層	国産陶器	皿	備前	-	2.8+α	-		型押し 煎茶道具	R-09
第40図-40	SG010灰色グライ層	国産陶器	碗	関西系	(7.2)	5.0+α	-		筒形碗	R-07
第40図-41	SG010灰色グライ層	国産陶器	皿	萩	6.8	2.0	2.7		完形	R-06
第40図-42	SG010灰色グライ層	国産陶器	皿	唐津	(12.9)	3.7	5.0		全体に被熱 見込み・高台に砂目痕あり	R-08
第41図-43	SG010灰色グライ層	木製品	下駄		長25.8	幅8.6	厚2.1		無眼下駄	R-10
第41図-44	SG010灰色グライ層	石製品	輪羽口		長20.5+α	最大径16.4	厚14.5		穿孔3.0cm	R-12
第41図-45	SG010灰色グライ層	鉄製品	鎌		長18.0	幅21.5	厚0.6		柄残存	R-11
第41図-46	SG010	木製品	卒塔婆		長22.0	幅6.2	厚0.3		下部のみ	R-06
第41図-47	SG010	木製品	木包丁か		長8.5	幅12.5	厚1.1			R-05
第41図-48	SG010	木製品	木ベラか		長36.5	幅1.2	厚0.7			R-04
第41図-49	SG010	木製品	杭		長33.6	幅4.0	厚4.0		SG010古段階護岸杭	R-02
第41図-50	SG010	木製品	杭		長62.4	幅8.0	厚6.8		SG010古段階護岸杭	R-03
第41図-51	SK015	磁器	染付碗	肥前	-	3.5+α	-		丸碗	R-01
第41図-52	SK015	国産陶器	皿	唐津	-	1.6+α	(4.9)		見込み・高台に砂目痕あり	R-02
第41図-53	SK015	土師質土器	甕		(31.0)	42.5	27.6		底面に圧痕	R-03
第41図-54	SK050	国産陶器	甕	瀬戸・美濃	37.0	37.9	16.5		底部穿孔し水琴窟に転用 内面底部に目痕 底部に漆喰付着	R-01
第41図-55	SK050 2層	土師質土器	火鉢か		-	3.3+α	-			R-01
第41図-56	SK050 ウラゴメ	磁器	染付碗	肥前	-	2.8+α	-		くらわんか碗	R-01
第42図-01	SK099	磁器	染付皿	肥前	(12.2)	3.1	(6.6)		外青磁	R-01
第42図-02	SK099	磁器	染付鉢	肥前	-	3.9+α	(8.2)		蛇ノ目凹形高台	R-02
第42図-03	SK099	磁器	染付皿	肥前	-	1.1+α	(7.5)		全体に被熱あり	R-09
第42図-04	SK099	磁器	染付蓋	肥前	(8.7)	2.6	(5.1)			R-03
第42図-05	SK099	国産陶器	皿	瀬戸・美濃か	-	2.8+α	-			R-10
第42図-06	SK099	土師質土器	焰焰		-	7.0+α	-			R-04
第42図-07	SK099	銅製品	鎌		長3.2	幅1.6	厚1.6	45.4	側面・上面に「一」の文字あり	R-08
第42図-08	SK099	瓦	軒平瓦		長4.0+α	幅12.2+α	厚1.7		吉田分類E類	R-05
第42図-09	SK099	瓦	軒平瓦		長8.7+α	幅13.0+α	厚1.8		吉田分類F-1類	R-06
第42図-10	SK099	瓦	軒丸瓦		長7.3+α	幅14.4	厚1.8		巴文(時計回り) 珠文18	R-11
第42図-11	SK099	瓦	平瓦		長19.2+α	幅15.1+α	厚4.1		被熱により変形	R-07
第42図-12	SK099+SK100	磁器	染付碗	肥前	-	4.7+α	(5.2)		丸碗	R-01
第42図-13	SK099+SK100	磁器	染付皿	肥前	(10.6)	2.6	(5.6)		色絵	R-03
第42図-14	SK099+SK100	磁器	白磁皿	肥前	-	1.5+α	(7.4)		輪花 蛇ノ目凹形高台	R-02
第42図-15	SK100	磁器	染付香炉	肥前	(6.6)	5.5+α	-			R-01
第42図-16	SK100	磁器	染付皿	肥前	-	2.2+α	-		外青磁	R-02

第2表 遺物観察表2

挿図番号	遺構番号	種別	器種	産地	法量(cm)			重量(g)	備考	R番号
					口径	器高	底径			
第42図-17	SK100	国産陶器	皿	肥前	-	2.3	-		被熱あり 色絵	R-05
第42図-18	SK100	国産陶器	皿	京・信楽か	-	2.5	-		全体に被熱あり 色絵	R-04
第42図-19	SK100	国産陶器	火入か		長5.2	幅6.0+α	厚1.7			R-06
第42図-20	SK100	国産陶器	皿	関西系か	-	2.3+α	-		全体に被熱あり	R-07
第42図-21	SK100	磁器	青磁人形か		長7.2+α	幅4.3+α	厚0.7		鳥の羽根か	R-03
第42図-22	SK100	瓦	棟瓦		長11.4	幅23.8	厚1.6		被熱により変形 表面赤変	R-08
第42図-23	SK100	瓦	軒丸瓦		長4.0+α	幅14.2	厚2.0		巴文(反時計回り) 珠文15	R-09
第43図-01	SK116	磁器	染付皿	肥前	-	1.1+α	(7.2)			R-01
第43図-02	SK116	磁器	染付皿	肥前	-	1.5+α	(9.5)		全体に被熱あり	R-02
第43図-03	SK116	磁器	皿	瀬戸・美濃か	(13.6)	4.0	(5.8)		蛇ノ目釉剥ぎ	R-03
第43図-04	SK116	国産陶器	皿		(6.0)	0.8	(2.4)		産地不明	R-04
第43図-05	SK048	磁器	染付碗	肥前	(10.6)	5.8+α	-			R-01
第43図-06	SK048	磁器	染付皿	肥前	-	1.4+α	-			R-10
第43図-07	SK048	磁器	染付碗	肥前	-	4.4+α	-		端反碗	R-02
第43図-08	SK048	国産陶器	瓶	瀬戸・美濃	-	5.5+α	5.6			R-03
第43図-09	SK048	瓦	棟瓦		長8.0+α	幅7.6+α	厚1.6		刻印「細□」	R-04
第43図-10	SK048	石製品	碁石		長2.2	幅2.2	厚0.5			R-12
第43図-11	SK048	石製品	碁石		長2.1	幅2.2	厚0.45			R-11
第43図-12	SK048	骨	歯骨(犬)		Id-Goc 13.8	Cr-Gov 5.6			下顎骨	R-05
第43図-13	SK048	骨	歯骨(犬)		HS 12.0+α	GLP 2.8			肩甲骨	R-06
第43図-14	SK048	骨	歯骨(犬)		GL 18.0	DPA 2.6			尺骨	R-09
第43図-15	SK048	骨	歯骨(犬)		GL 15.2	Bp 3.2	Bd 3.0		上腕骨	R-07
第43図-16	SK048	骨	歯骨(犬)		GL 14.9	Bp 1.8			橈骨	R-08
第43図-17	SK048	銅製品	銅錢		2.5				寛永通宝 新寛永(文錢)	R-13
第43図-18	SK048	銅製品	銅錢		2.4				寛永通宝 古寛永	R-14
第43図-19	SK051	磁器	染付碗	肥前	(10.8)	6.2	(4.2)		焼継あり 端反碗	R-03
第43図-20	SK051	磁器	染付紅猪口	肥前	7.4	3.2	2.6		「大坂新町お 笹紅」	R-02
第43図-21	SK051	国産陶器	小碗	瀬戸・美濃か	(9.3)	4.2	(4.0)			R-04
第43図-22	SK051	磁器	染付皿	肥前	-	0.95+α	-		焼継あり	R-01
第43図-23	SK051	土師質土器	焰烙		-	4.6+α	-		外面に煤付着	R-06
第43図-24	SK051	土製品	芥子面		長2.2	幅1.6	厚0.8			R-08
第43図-25	SK051	土製品	芥子面		長1.8	幅1.7	厚0.7			R-09
第43図-26	SK051	瓦	軒平瓦		長27.7+α	幅17.5+α	厚2.0		刻印「惣左」 鉄釘	R-07
第43図-27	SK051	国産陶器	擂鉢	肥前	(32.8)	14.8	(12.7)			R-05
第44図-01	SK066	磁器	染付碗	肥前	-	4.9+α	-		端反碗 内・外に付着物	R-01
第44図-02	SK066	磁器	染付碗	肥前	(13.1)	6.8	5.3		見込みに朱?付着 外青磁	R-02
第44図-03	SK066	土師質土器	焼塙壺(蓋)		(7.0)	1.6	(8.0)		内側布目痕	R-03
第44図-04	SK066	土師質土器	焼塙壺(身)		-	7.1+α	(5.0)		刻印「伊織」 II類	R-04
第44図-05	SK066	土師質土器	焰烙		-	5.4+α	-			R-06
第44図-06	SK066	瓦	軒丸瓦か		長13.1	幅6.0+α	厚1.7			R-05
第44図-07	SK067	磁器	染付皿	肥前	-	1.7+α	8.5			R-12
第44図-08	SK067	磁器	染付碗	肥前	(12.0)	4.5+α	-			R-02
第44図-09	SK067	磁器	染付火入	肥前	(9.6)	6.5	(6.4)		蛇ノ目高台	R-01
第44図-10	SK067	国産陶器	擂鉢	上野・高取	-	4.5+α	-			R-03
第44図-11	SK067	瓦	軒平瓦		長18.0+α	幅14.2+α	厚1.8		吉田分類G類	R-09
第44図-12	SK067	瓦	軒棟瓦		長22.0+α	幅27.8	厚1.8		吉田分類F-1類	R-04
第44図-13	SK067	瓦	軒平瓦		長10.0+α	幅20.3+α	厚1.5			R-05
第44図-14	SK067	瓦	軒平瓦		長19.0+α	幅23.0	厚1.8		吉田分類E-2類	R-06
第44図-15	SK067	瓦	鬼瓦		長18.2+α	幅19.8+α				R-11
第44図-16	SK067	瓦	鬼瓦		長27.4	幅24.5+α				R-10
第44図-17	SK067	瓦	軒棟瓦		長14.8+α	幅10.5+α	厚1.8		刻印「宮」	R-07
第44図-18	SK067	瓦	棟瓦		長6.5+α	幅8.5+α	厚1.7		刻印「細安」	R-08
第44図-19	SK115	磁器	染付碗	肥前	(8.2)	5.5+α	-		外青磁 簡形碗	R-01
第44図-20	SK115	磁器	染付碗	肥前	-	2.6+α	(6.2)		広東碗	R-02
第44図-21	SK115	国産陶器	ミニチュア瓶	肥前	-	1.9+α	(2.2)			R-03
第44図-22	SK115	瓦質土器	火鉢		33.8	25.6	23.9		脚部に刻印「治平」 脚部と脚部に馬のスタンプ文	R-04
第45図-01	SX031 1層	軟質施釉陶器	碗	関西系か	(10.0)	7.7	(4.0)		全体に被熱	R-01
第45図-02	SX031 1層	磁器	染付猪口	肥前	-	2.1+α	5.2		蛇ノ目凹形高台	R-02
第45図-03	SX031	磁器	染付碗	肥前	(7.2)	5.5	3.8		蛸唐草	R-01
第45図-04	SX031	瓦質土器	火鉢(脚部)		長6.0+α	幅3.0+α	厚0.9			R-02
第45図-05	SX031	瓦	棟瓦		長26.0	幅25.7	厚1.8		棟部を打ち欠く	R-03
第45図-06	SX031	瓦	平瓦		長28.5	幅25.4	厚1.9			R-04
第45図-07	SX031	木製品	結桶板材		長65.8	幅11.8	厚2.2		鉄釘あり 上部表面炭化	R-05
第45図-08	SX031	木製品	結桶板材		長66.0	幅16.4	厚1.8		鉄釘あり 上部表面炭化	R-06
第45図-09	SX031	木	丸太材		長100.4	幅9.8	厚8.6		上部被熱により炭化	R-07
第45図-10	SK155	磁器	染付碗	肥前	11.5	5.7+α	-			R-01
第45図-11	SK155	磁器	染付小碗	肥前	-	4.3+α	-		小広東碗	R-02
第45図-12	SK155	国産陶器	碗	京・信楽系	(8.4)	5.6	3.6			R-06
第45図-13	SK155	国産陶器	ミニチュア擂鉢	唐津	-	3.3+α	(6.0)		重ね焼き痕あり	R-05
第45図-14	SK155	国産陶器	土瓶	瀬戸・美濃か	-	1.3+α	7.6		足2つ残存 墨書「セキ□□」	R-04
第45図-15	SK155	国産陶器	皿	萩	(24.2)	6.6	(9.2)		見込み部に重ね焼き痕あり	R-07
第45図-16	SK155	ガラス製品	小玉		最大径0.5	-	厚0.4		白色	R-03
第46図-01	SK160	磁器	青磁鉢	肥前	(28.9)	6.2+α	-		取手あり(欠損)	R-01
第46図-02	SK160	磁器	染付皿	肥前	-	3.4+α	-		輪花	R-05
第46図-03	SK160	磁器	染付碗	肥前	(9.3)	4.8	4.2		端反碗	R-02
第46図-04	SK160	国産陶器	鉢		-	4.2+α	-			R-04
第46図-05	SK160	国産陶器	ミニチュア瓶か	瀬戸・美濃	-	2.7+α	2.3			R-03
第46図-06	SK160 9層	国産陶器	秉燭	肥前	5.2	5.5	4.3			R-01
第46図-07	SK160 下層	磁器	碗	肥前	-	3.8+α	4.0		外青磁 蛇ノ目釉剥ぎ	R-01
第46図-08	SK160 下層	磁器	染付小壺	肥前	(6.5)	5.0	(3.3)			R-02
第46図-09	SK165	磁器	染付碗	肥前	(8.8)	6.3	(5.8)		筒形碗	R-02
第46図-10	SK165	磁器	染付碗	肥前	11.7	6.5	5.5		外青磁	R-01
第46図-11	SK165 37層	磁器	碗	肥前	(10.1)	5.8	(4.6)		口鉢	R-01
第46図-12	SK165	国産陶器	碗	瀬戸・美濃	(9.9)	6.0	4.7		腰鉢	R-04
第46図-13	SK165	瓦	軒丸瓦		長16.5	幅12.8	厚1.8		巴文(反時計回り)	R-05

第3表 遺物観察表3

挿図番号	遺構番号	種別	器種	産地	法量(cm)			重量(g)	備考	R番号
					口径	器高	底径			
第46図-14	SK165	石製品	硯		長8.1	幅3.4	厚0.9			R-03
第46図-15	SE033	磁器	青花碗	中国	-	1.5+ α	-			R-01
第46図-16	SE150	磁器	染付碗	肥前	-	2.1+ α	-		丸碗	R-01
第46図-17	SE150	国産陶器	鉢	信楽か	-	8.4+ α	-			R-02
第46図-18	SK140	磁器	青花皿	景德鎮	-	1.4+ α	-			R-01
第46図-19	SK140	磁器	青花碗	景德鎮	-	1.7+ α	(4.8)			R-03
第46図-20	SK140	磁器	青磁碗	龍泉窯	-	1.6+ α	-			R-02
第46図-21	SK140	国産陶器	碗	唐津	-	2.7+ α	6.1		全体に被熱あり	R-04
第46図-22	SK140	国産陶器	皿	唐津	11.8	3.1	4.1		砂目痕あり	R-05
第46図-23	SK140	国産陶器	皿	唐津	(14.2)	4.2	5.4		絵唐津	R-06
第46図-24	SK140	土師質土器	焼塙壺(身)		-	7.3+ α	(4.4)		I類	R-09
第46図-25	SK140	瓦	軒丸瓦		-	幅14.4	厚2.3		巴文(反時計回り)	R-10
第46図-26	SK140	瓦	軒平瓦		長2.5+ α	幅6.7+ α	厚2.5			R-07
第46図-27	SK140	瓦	軒平瓦		長8.7+ α	幅14.0+ α	厚1.9			R-08
第47図-01	SK145	磁器	染付碗	肥前	11.1	5.9	5.0		外青磁	R-01
第47図-02	SK145	磁器	染付猪口	肥前	7.0	5.2	4.1		そば猪口	R-02
第47図-03	SK145	土師質土器	焼塙壺(身)		5.7	8.9	5.8		刻印「泉湊伊織」 II類 内面布目	R-03
第47図-04	SK145	石製品	不明		長14.1+ α	幅19.5+ α	厚4.9		凝灰岩 穿孔あり 上面面取り	R-04
第47図-05	SK145	石製品	石臼		(長33.4)		厚8.8		凝灰岩系安山岩 1/4残存	R-05
第47図-06	SK185	磁器	染付碗	肥前	-	4.8+ α	-			R-02
第47図-07	SK185	磁器	染付皿	肥前	14.0	4.0	6.0		初期伊万里	R-01
第47図-08	SK185	国産陶器	火入	福岡産か	-	4.4+ α	(8.1)			R-03
第47図-09	SK185	国産陶器	皿	唐津	-	3.5+ α	5.1		見込み・高台に砂目痕あり	R-04
第47図-10	SP203	土師器	甕		(23.8)	9.5+ α	-		口縁へ肩部のみ	R-02
第47図-11	SP203	土師器	甕		-	9.5+ α	-		底部のみ	R-01
第47図-12	SX034 2層	土師器	皿		-	3.0+ α	-		京都系 内面に黒斑あり	R-01
第47図-13	SK001	瓦	軒丸瓦		-	幅10.1+ α	厚3.0+ α		「光西寺」文字入り (残存は「光」の一部のみ)	R-01
第47図-14	SP011	瓦	丸瓦		長8.9	幅11.5	厚2.1		刻印「神□ 佐藤萬之助」	R-01
第47図-15	SK061	磁器	染付鉢	肥前	-	4.0+ α	(8.7)		焼継・焼継文字あり 「てや□」 切り 高台 SK051 R-01同一個体か	R-01
第47図-16	SK061	磁器	染付蓋	肥前	(7.8)	2.3	(3.1)		朱文字 「之」?	R-02
第47図-17	SK061	銅製品	飾り金具		長4.6	幅6.7	厚0.15	14.7		R-03
第47図-18	SK061	土製品	土人形		長4.5+ α	幅1.8+ α	厚0.5+ α			R-04
第47図-19	SK073	国産陶器	蓋(栓)		最大径3.3	1.3	-			R-01
第47図-20	SK073	ガラス製品	小玉		最大径0.5	-	厚0.3		青色	R-02
第47図-21	SK081	磁器	染付蓋	肥前	(10.0)	2.7	(3.8)			R-01
第47図-22	SK081	瓦	丸瓦		16.5+ α	12.8+ α	2.5		刻印「神」	R-02
第48図-01	SK082	瓦	鰐瓦		長21.5+ α	幅14.4+ α	厚2.6		穿孔一ヶ所あり 鱗部分スタンプ文	R-01
第48図-02	SK078	磁器	染付蓋	肥前	9.0	2.8	3.5		SK078 R-10の蓋	R-09
第48図-03	SK078	磁器	染付碗	肥前	(10.3)	5.5	3.7		SK078 R-09の身 端反碗	R-10
第48図-04	SK078	国産陶器	碗	関西系	-	6.3+ α	4.2		刻印「瀬戸口」	R-01
第48図-05	SK078	国産陶器	皿	関西系	-	1.6+ α	-			R-02
第48図-06	SK078	国産陶器	擂鉢	肥前	33.5	14.9	14.2			R-11
第48図-07	SK078	瓦	桟瓦		長9.5+ α	幅8.0+ α	厚1.9			R-04
第48図-08	SK078	銅製品	飾り金具		長13.2+ α	幅1.3	厚0.6	5.8	木の表面に装飾を施した銅板を鉢でとめる	R-05
第48図-09	SK078	土製品	土人形		長2.8+ α	幅2.3+ α	厚0.7		キツネか	R-03
第48図-10	SK078	土製品	鳩笛		長7.3+ α	幅2.2	厚2.3		彩色あり	R-06
第48図-11	SK078	土製品	土人形		長12.4+ α	幅12.9+ α	厚2.4+ α		座狛か	R-08
第48図-12	SK078	土製品	土人形		長10.9+ α	幅13.2+ α	厚8.3+ α		赤色顔料	R-07
第48図-13	SK078暗灰褐土	瓦	桟瓦		長10.4+ α	幅5.5+ α	厚1.7		刻印「宮」	R-01
第48図-14	SK078灰褐土	国産陶器	水差し	瀬戸・美濃	-	4.1+ α	4.0			R-01
第48図-15	SK078灰褐土	瓦	桟瓦		長10.5+ α	幅6.0+ α	厚1.7		刻印「細安」	R-04
第48図-16	SK078灰褐土	瓦	丸瓦		長8.2+ α	幅7.0+ α	厚1.7		刻印「細安」	R-02
第48図-17	SK078灰褐土	瓦	平瓦		長7.6+ α	幅8.3+ α	厚2.0		刻印「和作」	R-03
第48図-18	SK092	磁器	染付猪口	肥前	(8.1)	6.0	(6.2)		蛇ノ目凹高台	R-01
第48図-19	SK092	銅製品	飾り金具		長1.8	幅1.7		1.2	内部に球形の金具(鈴か)あり 韶飾りか	R-03
第48図-20	SK092	銅製品	銅錢		2.3				寛永通宝 新寛永 背面「元」	R-05
第48図-21	SK092	銅製品	銅錢		2.4				寛永通宝 新寛永	R-04
第48図-22	SK092	銅製品	銅錢		長4.9	幅3.3			天保通宝 背面「当百」	R-02
第49図-01	SK105	国産陶器	土瓶	福岡産か	-	5.2+ α	6.7		墨書「□×」 足3つ残存	R-01
第49図-02	SK112	骨製品	簪		長12.4	幅0.8	厚0.15			R-01
第49図-03	SK118	瓦質土器	面子状製品		長6.2	幅5.8	厚1.6		表面に「吉」と「土(?)」の線刻	R-01
第49図-04	SK120	瓦	鬼瓦		長18.3	幅12.9+ α	厚2.5		ヘラ描き文字「瓦師助右門」	R-02
第49図-05	SK120	瓦	平瓦		長8.0	幅4.4	厚1.8		刻印	R-01
第49図-06	SK138	土師器	皿		(15.2)	2.5	(8.2)		京都系 内外面に黒斑あり	R-01
第49図-07	SK149	国産陶器	擂鉢	肥前	-	10.6+ α	-			R-01
第49図-08	SK151	銅製品	飾り金具		長1.9+ α	幅1.0+ α	厚0.1	0.4	表面金メッキ	R-01
第49図-09	SK125	磁器	染付蓋	肥前	8.6	4.3	-			R-01
第49図-10	SK125	磁器	染付皿	肥前	8.4	2.5	2.8		初期伊万里	R-02
第49図-11	SK125	瓦質土器	火鉢		30.8	22.5	17.2		4種類のスタンプ模様(六角文・波文・山風景・円文) 赤色塗彩	R-03
第49図-12	SP207	瓦	不明		長6.0+ α	幅6.8+ α	厚1.3		線刻あり	R-01
第49図-13	SK172	国産陶器	おろし金	瀬戸・美濃	長6.1	幅2.4+ α	厚2.0			R-01
第49図-14	SK190	瓦質土器	蓋		15.2	3.6	-		穿孔あり つまみあり	R-01
第49図-15	検出時	銅製品	飾り金具		長7.0+ α	幅7.0	厚0.1	23.6	牡丹模様(裏面にも模様あり) 上・両側に穴	R-01
第49図-16	表土	磁器	染付紅猪口	肥前	-	2.7+ α	(2.5)		朱文字「□京」	R-01

※法量の()内の数値は反転復元での数値

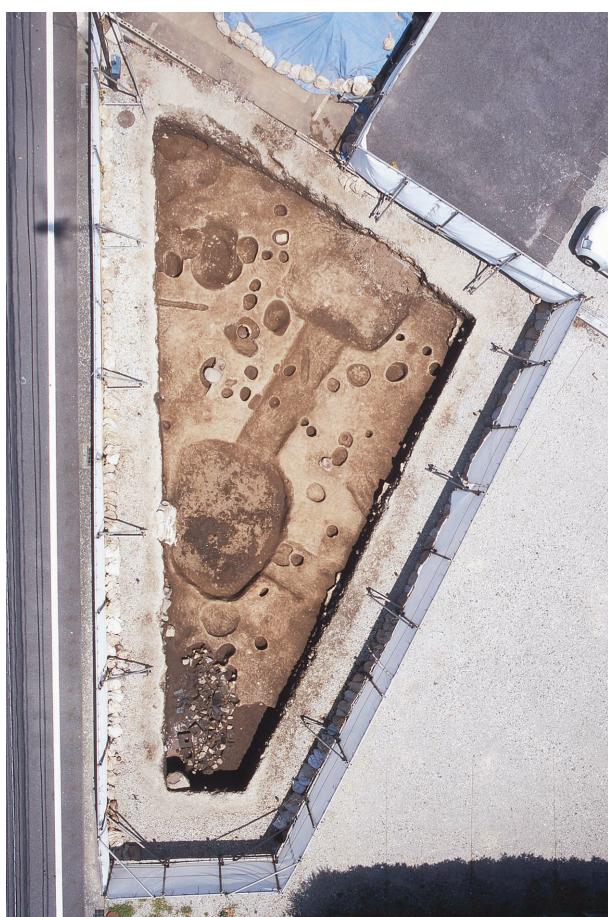
※Id-Goc(下顎骨全長) Cr-Gov(下頸枝高) HS(肩甲骨全長) GLP(肩甲骨近位端最大幅) GL(最大長) DPA(尺骨幅) Bd(遠位端最大幅) Bp(近位端最大幅)



南区全景(南より)



北区全景(南より)



南区全景(上が北)



北区全景(上が北東)

写真図版 2



SB065 完掘状況 (上が北)



SG010 出土状況 (上が北)



SK050 出土状況 (西より)



南区第2面検出状況(南より)



南区第2面完掘状況(南より)



SG010出土状況(南東より)



SG010新段階出土状況(西より)



SG010古段階出土状況(北西より)



SG010土層断面(東より)



SX031土層断面(西より)



SX031完掘状況(西より)

写真図版4



SK015 土層断面 (南西より)



SK015 完掘状況 (南西より)



南区第4面 完掘状況 (南より)



SE033 土層断面 (南より)



南区東壁 土層断面 (西より)



南区東壁 土層断面詳細 (西より)



北区第1・2面 検出状況 (南西より)



北区第1・2面 完掘状況 (北西より)



SF055 検出状況(東より)



SF055・SF060 出土状況(東より)



SB065 検出状況(東より)



SB075 完掘状況(東より)



SB070a 硏石(東より)



SB070a 硏石詳細(東より)



SK050 検出状況(西より)



SK050 土層断面(西より)

写真図版 6



SK050 完掘状況（西より）



SK050 蓋内部土層断面（西より）



SK050 蓋取り上げ後土層断面（西より）



SK099 土層断面（南より）



SK099 完掘状況（西より）



SK100 土層断面（西より）



SK100 完掘状況（西より）



SK116 土層断面（南より）



SK048 完掘状況(東より)



SK048 獣骨出土状況(東より)



SK066・SK067 土層断面(東より)



SK155 土層断面(南より)



SK155 完掘状況(西より)



SE150 完掘状況(北より)



北区第3面検出状況(南西より)



北区第3面完掘状況(北西より)

写真図版 8



SK140 土層断面 (北より)



SK140 完掘状況 (西より)



SK185 土層断面 (西より)



北区第4面 検出状況 (南西より)



北区第4面 完掘状況 (北西より)



SP203 土層断面 (南東より)



北区西壁 土層断面 (南東より)



北区西壁 土層断面詳細 (東より)



第 39 図 -15



第 40 図 -32



第 40 図 -36



第 40 図 -41



第 41 図 -44



第 41 図 -54



第 42 図 -7



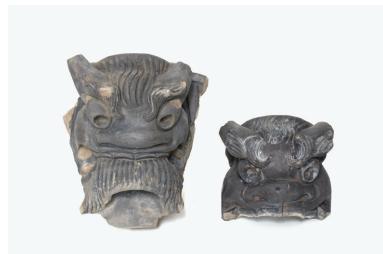
第 42 図 -12



第 42 図 -22



第 43 図 -12 ~ 16



第 44 図 -15・16



第 45 図 -1



第 46 図 -3



第 46 図 -22



第 46 図 -23



第 46 図 -25・26・27



第 47 図 -3



第 47 図 -4

写真図版 10



第 47 図 -7



第 47 図 -10



第 47 図 -13



第 47 図 -15



第 47 図 -15



第 48 図 -1



第 48 図 -10



第 48 図 -11



第 48 図 -12



第 48 図 -19



第 48 図 -22



第 48 図 -22



第 49 図 -3



第 49 図 -4



第 49 図 -11



第 49 図 -12



第 49 図 -14



第 49 図 -15

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ふないじょう・じょうかまちあと9 だい22じちょうさ							
書名	府内城・城下町跡9 第22次調査							
副書名	大分都市計画道路末広東大道線に係る発掘調査報告書2							
シリーズ名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第121集							
編著者名	松浦憲治、株式会社九州文化財総合研究所(業務責任者:服部真和)							
編集機関	大分市教育委員会							
所在地	〒870-8504 大分市荷揚町2番31号 TEL(097)534-6111(代表) FAX(097)536-0435							
発行年月日	西暦2013年3月15日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東径	調査期間	調査面積	発掘原因
遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ふないじょう じょうかまちあと	おおいたしじえひろまち	44201	201041	33° 14' 08"	131° 36' 15"	20120611 ～ 20121128	364.7m ²	道路建設
府内城・ 城下町跡第22次	大分市末広町							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
府内城・ 城下町跡第22次	都市	近世・中世	礎石建物跡 池状遺構 水琴窟 廃棄土坑 火災処理土坑 掘立柱建物跡 溝状遺構	肥前陶磁器、瀬戸・美濃陶器、関西系陶器、 青花、京都系土師器、土師器、焼塩壺、 軒平・軒丸瓦、鬼瓦、鰐瓦、土製品、錘、簪、 飾金具、銅錢、鉄製鎌、木製下駄、卒塔婆、 獸骨	

要約	江戸時代の府内城下において大きな規模を誇る寺院である光西寺の敷地内を調査した。結果、近世期の礎石建物跡とともに庭園遺構である池状遺構や水琴窟と考えられる埋甕遺構を確認し、また生活痕跡である井戸や廃棄土坑を確認した。特に19世紀前半には礎石建物と庭園遺構が並立しており、当時の光西寺境内内部の建物配置の様相が判明した。
----	--

大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第121集

府内城・城下町跡9

第22次調査

一大分都市計画道路末広東大道線に係る発掘調査報告書2—

2013年3月15日

発行 大分市教育委員会

大分市荷揚町2-31